

出雲市民病院移転予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

海上遺跡



2002年3月

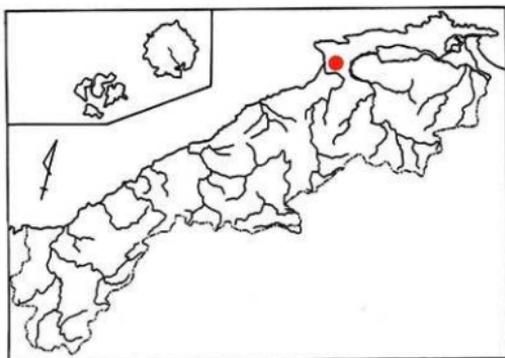
三井生命保険相互会社
出雲市教育委員会

「出雲市民病院移転予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 海上遺跡」 正誤表

項	図	場所	誤	正
9	5	土層写植④	地形落落ちこみ	地形落ち込み
10	7	スケール写植	20m	20cm
11		下から1行目	厚痕	圧痕
17		9行目	第17図4は漁労具の～	第17図4は漁労具の～
40	32	右下写植	※番号は・・・	削除
42		下から3行目	36-2、	36-2は
44		4行目	弥生時代時代以前	弥生時代以前
52	42			
56	46		出土木製品土器実測図	出土木製品実測図
64	53		2～3：清谷上寺地遺跡	2～3：青谷上寺地遺跡
67	55	「容器類ほか」1段目	14-14	14-4
70	56	「雑具ほか」2段目	姫1147-1 姫147-1	姫147-1 姫131-1
"	"	「武具・祭祀具ほか」 4段目	姫1119-	姫111-9
78	観察表	No.39 図版番号	18-1	18-10
"	観察表	No.40 "	18-1	18-11
"	観察表	No.41 "	18-1	18-12
79	観察表	No.105 "	29-1	29-10
"	観察表	No.109	32-1	32-18
"	観察表	No.110	32-1	32-13
"	観察表	No.111	32-1	32-11
"	観察表	No.113	32-1	32-14
80	観察表	No.187 "	50-1	50-10
97	図版	2段目、右から2番目	15-9	15-6

出雲市民病院移転予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

海上遺跡



海上遺跡 位置図

2002年3月

三井生命保険相互会社
出雲市教育委員会

序

本報告書は、出雲市が三井生命保険相互会社から委託を受けて、平成11年度と12年度の2カ年度、約1年間をかけて実施した、出雲市塩治町地内における出雲市民病院移転予定地内発掘調査の成果を記録したものです。

調査対象となった遺跡は、今回の開発事業に伴い新たに確認された遺物散布地である海上遺跡で、弥生時代の生活用具、部材等が大量に発見されました。中でも今回の調査で発見された弥生時代の木製資料は、種類・量ともに豊富で、保存状態も良好な非常に資料的価値の高いものです。

本書が今後の研究の一助をなし、広く市民の方々に文化財保護に対するご理解をいただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたって、ご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

出雲市教育委員会
教育長 多 久 博

例 言

1. 本書は出雲市教育委員会が、三井生命保険相互会社から委託を受けて、平成11・12年度に実施した出雲市民病院移転予定地内、海上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 海上遺跡は、出雲市塩冶町1541-2番地ほかに所在し、出雲市民病院建設工事に先立って実施した試掘調査によって発見した遺跡である。
3. 調査を行った地番は次のとおりである。
 - 1区 島根県出雲市塩冶町1541-2番地ほか
 - 2区 島根県出雲市塩冶町1542-1番地
4. 発掘調査は、下記の期間において実施した。
 - 1区 平成12年1月14日～平成12年6月30日まで
 - 2区 平成12年8月10日～平成13年1月10日まで
5. 調査組織は次のとおりである。(敬称略、職名等は当時)

調査主体 出雲市教育委員会

○平成11年度 [1999]

事務局	大田 茂 (出雲市教育委員会 文化振興課長)	川上 稔 (同課長補佐)
調査員	藤永照隆 (文化振興課主事)	
調査補助員	今岡ひとみ (文化振興課臨時職員)	
室内整理作業員	遠藤恭子	

○平成12年度 [2000]

調査指導	金子裕之 (奈良国立文化財研究所 考古第一部長)	
	池淵俊一 (島根県教育委員会 文化財課埋蔵文化財係文化財保護主事)	
事務局	大田 茂 (出雲市教育委員会 文化振興課長)	川上 稔 (同課長補佐)
調査員	藤永照隆 (文化振興課主事)	
調査補助員	今岡ひとみ、今岡司郎 (文化振興課臨時職員)	
室内整理作業員	遠藤恭子	

○平成13年度 [2001] (報告書作成)

事務局	川上 稔 (出雲市 芸術文化振興課文化財室長)
調査員	藤永照隆 (文化財室主事)
調査補助員	伊藤めぐみ (文化財室臨時職員)
室内整理作業員	鶴口令子

6. 発掘調査には、次の方々に従事していただいた。

米山清司	吾郷 栄	奥田広信	片山 修	天野重夫	神田鶴子	山根幸枝
佐野静子	板倉セツ子	坂本トミ子	坂根幸子	安食 勉	滝 彩子	周藤俊也
鎌田 悟	岸 邦夫	長島節子	藤原一男	古川八郎	今岡勝美	

7. 発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、調査指導者のほかに、以下の方々に有益なご助言とご協力を賜った。記して謝意を示しておきたい。(敬称略)

また、文献・情報収集等にあたっては、多数の方々に様々な便宜や援助をいただいた。紙面の都合で個々の人名や関係機関名を記すことはできないが、感謝申し上げます。

浅川滋男 (現鳥取環境大学教授)	田崎博之 (愛媛大学法文学部教授)
深澤芳樹 (奈良国立文化財研究所)	藤田三郎 (田原本町教育委員会)
湯村 功 (鳥取県埋蔵文化財センター)	渡邊正巳 (文化財調査コンサルタント株式会社)

8. 本書で使用した挿図の方位は磁北を示すもので、座標は座標系第Ⅲ系に基いたものである。

また、標高は海拔 (T. P) m で示した。

9. 挿図中の縮尺は図中に記しているが、土器遺物実測図については基本的に1/3スケールで、木製遺物実測図については1/6スケールで統一した。ただし、一部大型品については土器遺物実測図に1/4スケールを、木製遺物実測図に1/12スケールを摘要した。

10. 遺物の実測は、調査員・調査補助員・室内整理作業員のほか、片倉愛美 (文化財室主宰)・佐藤三鈴 (文化財室臨時職員)・宮崎峻 (同) がおこなった。

11. 本文中に明記した木製品の樹種は、株式会社吉田生物研究所に鑑定を委託したものである。

12. 本報告書掲載の木製品の实測図は、全て保存処理前の形状を図化したものである。

本報告書掲載の木製品の図版写真は、保存処理を行った資料については基本的に処理後に撮影したものを掲載した。

木製品の保存処理については、特に保存を要するものと判断したものについて、高級アルコール法による処理を株式会社吉田生物研究所に委託したものである。

13. 本書の執筆、編集は藤永がおこなった。

14. 本報告書掲載の遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	6
第1節 調査の概要	6
第2節 1区の調査	8
1. 土層堆積状況	8
2. 検出遺構	8
3. 出土遺物	11
i) 土器	11
ii) 木製品	16
第3節 2区の調査	37
1. 土層堆積状況	37
2. 検出遺構	37
3. 出土遺物	42
i) 土器	42
ii) 木製品	48
第4章 まとめ	61
観察表	72
写真図版	84
1区遺構	84
2区遺構	87
1区出土土器	91
2区出土土器	93
1区出土木製品	95
2区出土木製品	104

挿 図 目 次

第1図	海上遺跡周辺遺跡分布図	2	第30図	2区 調査区平面図・土層断面図	38
第2図	試掘調査出土木製品実測図	2	第31図	2区 杭群遺構実測図	39
第3図	出雲平野の主要遺跡分布図	5	第32図	2層杭群 杭材実測図	40
第4図	調査区配置図	7	第33図	杭列2 遺構実測図	41
第5図	1区 調査区平面図・土層断面図	9	第34図	杭列2 杭材実測図	41
第6図	杭列1 遺構実測図	10	第35図	2区3層 出土土器実測図-1	44
第7図	杭列1 杭材実測図	10	第36図	2区3層 出土土器実測図-2	45
第8図	1区4層 出土土器実測図	12	第37図	2区3層 出土土器実測図-3	46
第9図	1区3層 出土土器実測図-1	13	第38図	2区2層 出土土器実測図	47
第10図	1区3層 出土土器実測図-2	14	第39図	2区1層 出土土器実測図	47
第11図	1区1~2層 出土土器実測図	15	第40図	2区 木製品出土状況図	50
第12図	1区 木製品出土状況図	19	第41図	2区 出土木製品実測図-1	51
第13図	1区 出土木製品実測図-1	20	第42図	2区 出土木製品実測図-2	52
第14図	1区 出土木製品実測図-2	21	第43図	2区 出土木製品実測図-3	53
第15図	1区 出土木製品実測図-3	22	第44図	2区 出土木製品実測図-4	54
第16図	1区 木製品出土状況図-4	23	第45図	2区 出土木製品実測図-5	55
第17図	1区 出土木製品実測図-5	24	第46図	2区 出土木製品実測図-6	56
第18図	1区 出土木製品実測図-6	25	第47図	2区 出土木製品実測図-7	57
第19図	1区 出土木製品実測図-7	26	第48図	2区 出土木製品実測図-8	58
第20図	1区 出土木製品実測図-8	27	第49図	2区 出土木製品実測図-9	59
第21図	1区 出土木製品実測図-9	28	第50図	2区 出土木製品実測図-10	60
第22図	1区 出土木製品実測図-10	29	第51図	海上遺跡近隣の地形状況図	61
第23図	1区 出土木製品実測図-11	30	第52図	弥生時代中期の絵画舟	63
第24図	1区 出土木製品実測図-12	31	第53図	出土木製品の類例	64
第25図	1区 出土木製品実測図-13	32	第54図	海上遺跡土器製作関連遺物	65
第26図	1区 出土木製品実測図-14	33	第55図	海上遺跡主要出土木製品土層対応図	67
第27図	1区 出土木製品実測図-15	34			
第28図	1区 出土木製品実測図-16	35	第56図	出雲平野の主要出土木製品土層対応図	69
第29図	1区 出土木製品実測図-17	36			

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査の原因となった開発事業は、新出雲市民病院新築工事である。出雲市民病院は、出雲市塩冶町地内に既設されていたものであるが、建物施設の老朽化及び敷地スペース不足等の問題により、今回新たに移転建設事業が計画されたものである。

1999年（平成11年）7月、事業計画地土地保有者である三井生命保険相互会社及び建設事業者である出雲市勤労者健康管理協会より、本事業計画の連絡を受けた。

事業計画地周辺には、天神遺跡、善行寺遺跡、藤ヶ森遺跡など弥生時代以降の集落遺跡が点在しており、過去の試掘調査の結果からも遺跡が存在する可能性が高いと認められる場所であったため、同年9月に14箇所のトレンチを設定し、遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査を実施した。試掘調査の結果、10箇所のトレンチにおいて木製品、弥生土器等の遺物が発見された。

こうした結果を踏まえ、三井生命相互会社、出雲勤労者健康管理協会及び出雲市教育委員会の三者によって協議を重ね、事前に事業地内にある埋蔵文化財の発掘調査を実施することで合意した。なお、発掘調査業務については、三井生命保険相互会社と出雲市とで委託契約を締結し、2000年（平成12年）1月より開始することとなった。

第2節 調査の経過

前述の試掘調査の結果から、本事業地が遺跡の範囲内であることが確認されたが、この遺跡は従来周知の遺跡とはなっていないなかったため、海上遺跡として本遺跡発見を島根県経由文化庁宛に通知した。

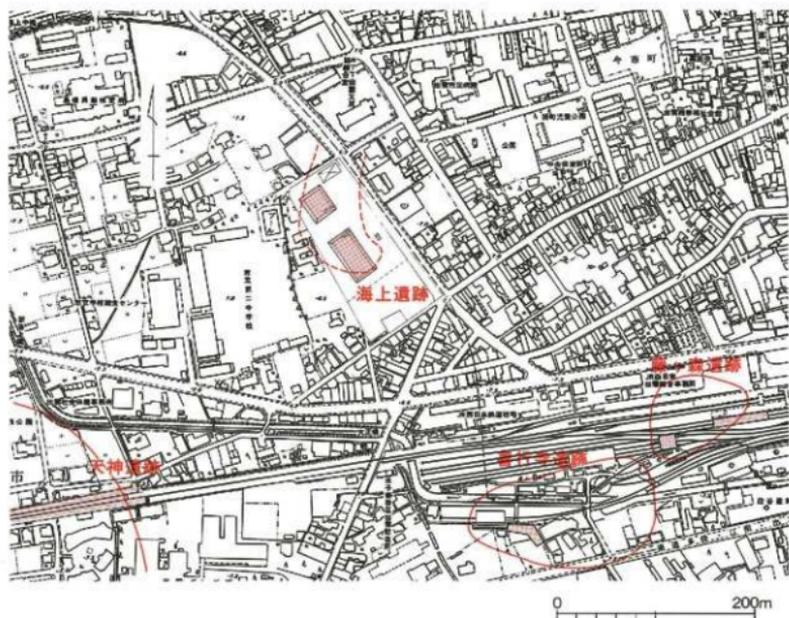
現地発掘調査は、1期工事予定地を1区、2期工事予定地を2区として、2区間を平成11年度、12年度の2カ年度にわたって実施した。本報告書は平成13年度にこの調査結果をまとめたものである。

1区の調査は、約1250㎡を対象として2000年1月14日から2000年6月30日までの期間で実施した。1区の調査では、海上遺跡が弥生時代中期後葉を中心とした時期の木製品資料を大量に出土する低湿地遺跡であることが判明した。しかしながら、調査地の地盤の状況や大量の湧き水のため、地山面まで調査を進めることは危険と判断されたため、標高3m付近で面的な調査を中止せざるを得なかった。

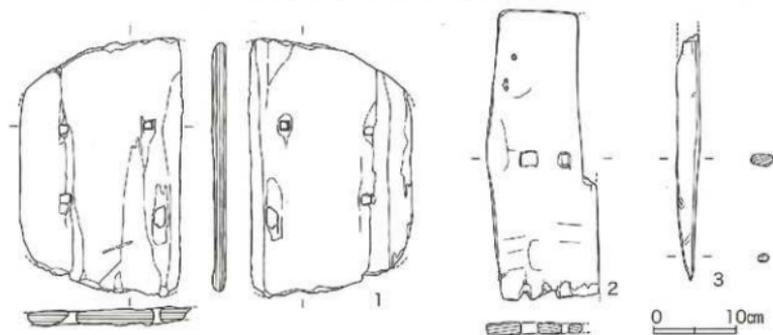
この調査概要については、同年7月14日に遺物及び調査写真の見学会を行い、一般に公開した。木製遺物の保存処理前公開ということもあって、わずか2時間という公開時間であったが、約150人の見学者があった。1区の調査終了後は出雲市民病院の1期建設工事が始まり、隣接地工事との調整を図りつつ2区の調査準備を進めた。

2区の調査は、約750㎡を対象として2000年8月10日から2001年1月10日までの期間で実施した。2区の調査でも1区と同様に低湿地から弥生時代の木製品が大量に確認された。また、調査の深さは1区と同様に標高3m付近で面的な調査を中止した。

今回の調査では、両区間ともに集落跡は確認できなかったものの、保存状態の良い弥生時代木製遺物が大量に出土し、当時の生活文化を考察する上での貴重な資料を得ることができた。また、これらの遺物は湿地状の地形の落ち込みに遺物が溜ったものであり、遺跡周辺の旧地形を考察する上でも貴重な調査成果が得られた。



第1図 海上遺跡周辺遺跡分布図



第2図 試掘調査出土木製品実測図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

今回の発掘調査地は出雲市塩冶町宇海上地内、出雲市街地の中心部であるJR出雲市駅の西北西側約300mの地点である。調査地近隣は早くから宅地化が進行しており、これまでに埋蔵文化財の存在も知られていなかった。海上遺跡は、開発事業に伴う試掘調査によって今回新たに発見された遺跡である。遺跡の範囲は、調査地の南側では広がりの確認できず、北側を中心に広がる可能性が高いと判断された。

遺跡の立地する出雲平野は、南北を山系に挟まれた、日本海から宍道湖西岸まで東西20kmにわたる県内最大の沖積平野である。平野を形成した二大河川、斐伊川とが神戸川がそれぞれ宍道湖と日本海に注いでおり、遺跡の位置はこの二大河川に挟まれた平野の中心部にあたる。

遺跡が造営された弥生時代の景観は現在とはかなり異なっていたようである。現在東流して宍道湖に注いでいる斐伊川は、当時は西流して入海（奈良時代の「神門水海」）に注いでいた。また、宍道湖の西端も現在よりかなり西にあったものと考えられている。現在の地形に近い形で定着したのは斐伊川の本流が東に流路を変えた江戸時代以降のことである。

第2節 歴史的環境

縄文時代

出雲平野における遺跡の初現は、平野の北にある縄文時代早期初頭の菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある縄文時代早期末の上長浜貝塚に遡るが、これに続く遺跡は確認されていない。

縄文時代後期～晩期になると、平野の北には出雲大社境内遺跡（大社町）や原山遺跡（大社町）で、南の丘陵下では三田谷Ⅰ遺跡、後谷遺跡（斐川町）、御領田遺跡等で遺跡が営まれ、平野中央部の矢野遺跡でも遺物が確認されている。

縄文時代早期末～前期はいわゆる「縄文海進」により平野の大部分が海域であったため平野縁辺部のみで遺跡が存在するが、後期～晩期には海進後の海退が進み平野中央部でも遺跡が確認されるようになる。

弥生時代

弥生時代には、縄文晩期から続く矢野遺跡、後谷遺跡などで前期の遺物が確認されているが、確拠例は少なく、いずれも小規模な集落と考えられるものである。

中期から後期にかけては入海周辺の沖積地を中心に集落が飛躍的に増大し、四絡遺跡群（矢野遺跡・小山遺跡・姫原西遺跡など）をはじめ、天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡（旧称正蓮寺周辺遺跡）などの大規模集落が出現する。これらの遺跡は集落に大規模な溝を多重に配置するものが多く、当地域の集落遺跡の特徴ともなっている。

また、出雲平野に向かって南から派生する丘陵地には大量青銅器埋納で知られる神庭荒神谷遺跡（斐川町）や加茂岩倉遺跡（加茂町）が存在する。これは祭祀に関わる集落間の結合性を物語ると

もに出雲地方における青銅器文化の特殊性を示すものであろう。これらの青銅器は弥生時代中期に使用され、後期に入る頃までに埋納されたものと考えられている。

弥生時代後期以降、四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が南の丘陵上に造営される。この中には、3号墓や9号墓など突出部を含めると長辺50m以上の規模を誇る大形の墳墓もある。この時期には強力な共同体的結合が図られており、その首長の権力が強大になっていたことが窺える。

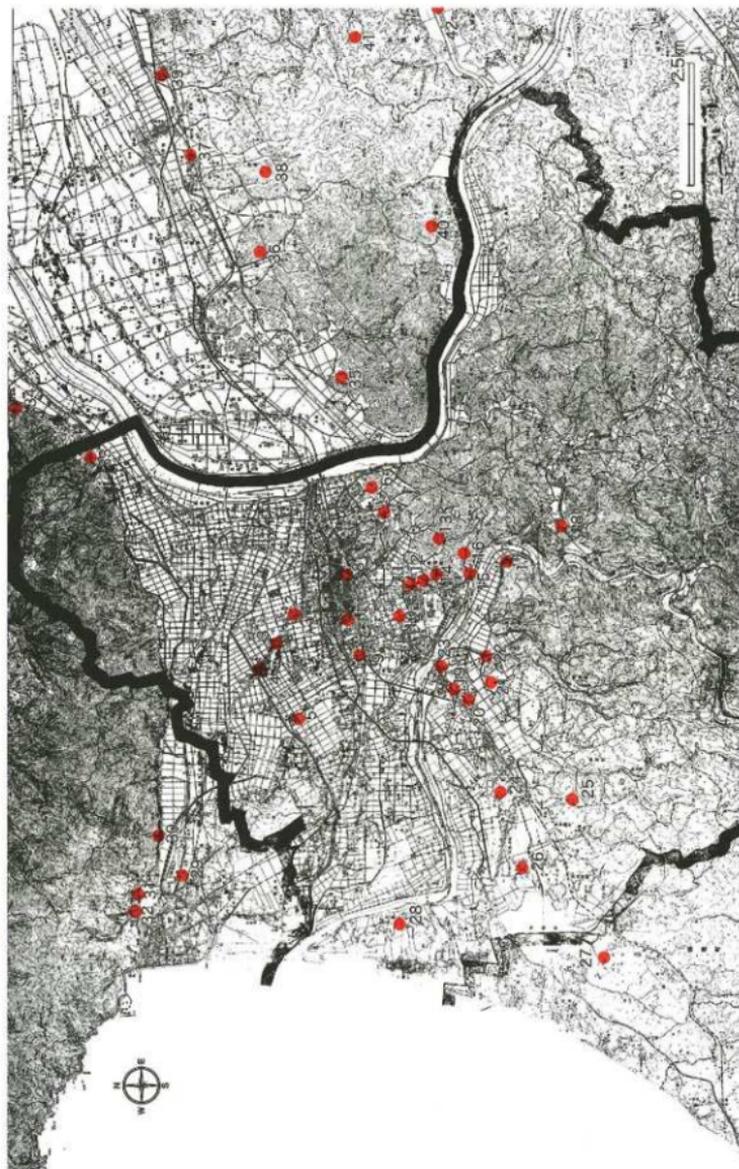
古墳時代

古墳時代になると、弥生時代に見られた平野部集落の多くが衰退もしくは消滅していく傾向にあり、前・中期の古墳も小中規模のものが数例知られるのみである。現在のところ、前期古墳として筒形銅器などを出土した山地古墳、景初三年銘鏡を出土した神原神社古墳（加茂町）、これらに続くものとしては、北光寺古墳、軍原古墳（斐川町）、神庭岩船山古墳（斐川町）などがある。

後期後半以降になると、今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳などの出雲地方最大級の横穴式石室を有する大形の古墳が築造されるようになる。また、南の丘陵には上塩冶横穴墓群、神門横穴墓群など大規模な横穴墓群も築かれる。この時期の出雲平野は出雲地方における古墳文化の中心地の一つであり、それ以前とは様相を画する。

奈良時代以降

この時期になると神門寺境内廃寺、長者原廃寺、天寺平廃寺（斐川町）などの古代寺院が建造されるとともに、光明寺3号墓をはじめ、小坂古墳の石櫃や朝山古墓などの初期火葬墓が多く確認され、いち早く仏教文化が取り入れられていたことが窺える。特に出雲地方出土の石櫃は神戸川周辺に集中しており、地域的特色となっている。



第3図 出雲平野の主要巡跡分布図

- | | | | |
|---------|------------|--------------|-------------|
| 1. 海上道跡 | 16. 光妙寺3号窟 | 31. 萬名井新井出土地 | 38. 神原宮跡分所跡 |
| 2. 尾張道跡 | 17. 小坂古墳 | 32. 出雲大社新内遷跡 | 39. 豊野石蹟 |
| 3. 小山道跡 | 18. 朝山古墳 | 33. 大寺古墳 | 40. 天寺平塚寺跡 |
| 4. 木好道跡 | 19. 下五古道跡 | 34. 上原古墳 | 41. 加茂郡赤坂跡 |
| 5. 白坂宮跡 | 20. 玉塚古墳 | 35. 赤野古墳跡 | 42. 神野神社古墳 |
| | | 36. 湯計古墳 | |
| | | 37. 中庭新堀山古墳 | |
| | | 26. 山神古墳 | |
| | | 27. 西交野遺跡 | |
| | | 28. 上原共白塚 | |
| | | 29. 原山遺跡 | |
| | | 30. 長野遺跡 | |
| | | 21. 妙蓮寺山古墳 | |
| | | 22. 敷丸山古墳 | |
| | | 23. 赤土本館遺跡 | |
| | | 24. 神宮内墓跡 | |
| | | 25. 北光寺古墳 | |
| | | 11. 旗山遺跡 | |
| | | 12. 上忍治塚山古墳群 | |
| | | 13. 上野台塚内墓群 | |
| | | 14. 赤坂山古墳 | |
| | | 15. 三柱古墳跡 | |
| | | 6. 聖谷遺跡群 | |
| | | 7. 矢野宮古墳 | |
| | | 8. 大宮寺古墳 | |
| | | 9. 天神道跡 | |
| | | 10. 神門寺境内跡寺 | |

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

調査は1区約1,250㎡、2区約750㎡の合計約2,000㎡を対象として行った。両調査区ともに地表下約3m、標高約4.5mまで重機による表土掘削を行い、その後手掘りによって徐々に掘削しながら調査を進めた。また、地山面の底まで調査を進めることは地盤の状態から不可能と判断したため、標高約3m前後で面的な調査を中止した。

地形と土層堆積状況

調査では、旧河道の可能性がある地形の落ち込みが確認された。落ち込み内の層序は、基本的に上から①暗灰色～黄灰色粘土、②黒色～黒褐色粘質土、③黒褐色粘土、④粘砂層の順に堆積しているが、大量の湧き水のため底部分の層序までは確認できなかった。

①層からは奈良・平安時代～古墳時代中期の遺物が、②層からは弥生時代後期の遺物が、③層からは弥生時代中期の遺物が、④層からは弥生時代前期の遺物が主に確認されており、それぞれ土層堆積の時期を示しているものと考えられる。

なお、面的な調査を行ったのは③層の途中までで、④層についてはトレンチによる部分的な調査しか行っていない。

検出遺構

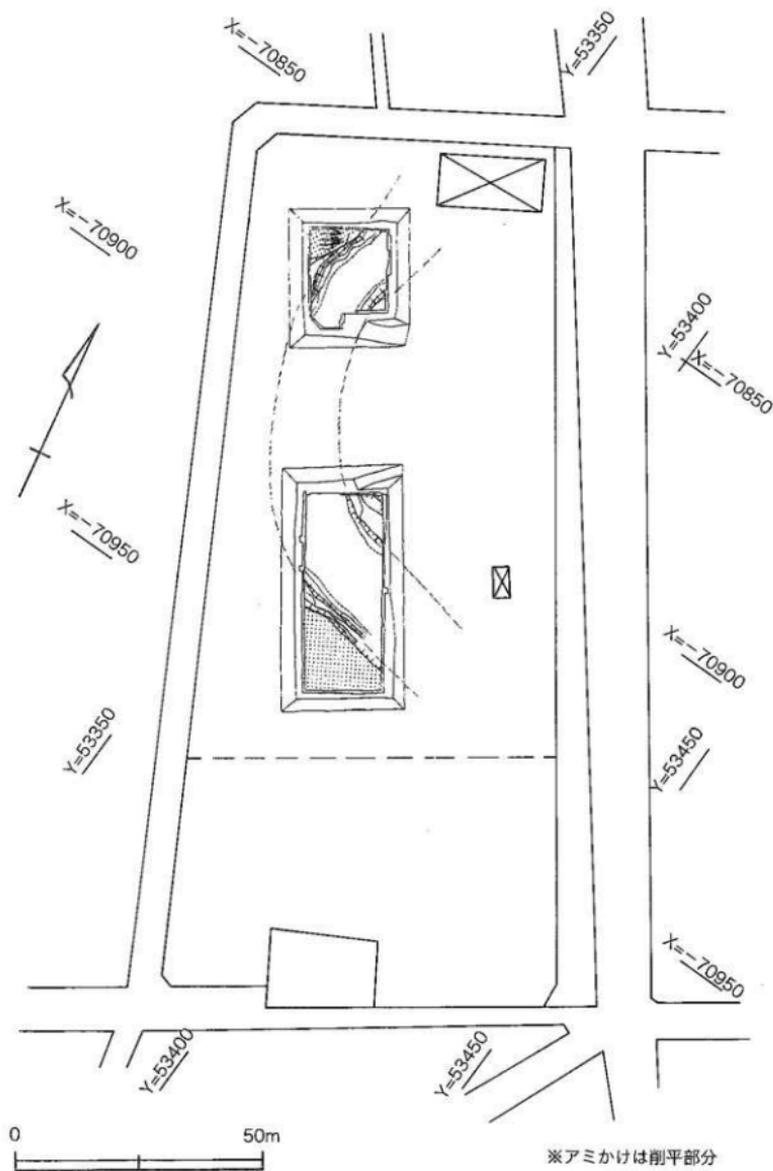
検出遺構としては、地形落ち込み内に杭列が③層上面～②層で1群（2区）、③層で1箇所（1区）③層～④層上面付近で1箇所（2区）確認されている。落ち込み肩部以上では近現代の造成等によって遺構面が破壊されており、生活面の遺構は全く確認されなかった。

地形落ち込みの規模・形状は残存部で幅約13～18m、深さ1.5m以上を測り、1区では西北西方向に、2区では北方向に方向を変えて帯状に伸びている。調査で確認された遺物包含層では継続的な水の流れを示す土層堆積状況は見られず、遺跡の営まれた時期には沼地もしくは湿地のような状態であったものと考えられる。

出土遺物

出土遺物は①層で須恵器、土師器が、②～④層で弥生土器が確認されるほか、②～③層においては大量の木製品も確認されている。出土した遺物はそのほとんどが近隣の生活空間からの流れ込み資料と考えられるものである。

特に注目される遺物資料は、弥生時代中期～後期の大量の木製品と弥生時代前期の弥生土器である。木製品資料は保存状態が良好で、その種類も多種多様であった。また、弥生時代前期の上器資料は出雲平野の平野部遺跡においては極めて稀少なものである。量的には少量であったが完形品も含んでおり、貴重な成果となった。



第4図 調査区配置図

第2節 1区の調査

1区の調査は調査地の南側、北北西～南南東に長辺をとる約50m×25m、約1,250㎡を対象範囲とした。発掘停止面の面積は約700㎡である。試掘の結果から標高約4.5m付近までは遺構・遺物が存在しないと判断されたため、地表下約3mまで重機掘削を行い、その後手掘りによって土層ごとに掘り下げて遺構・遺物の状況を確認した。

調査区には5mメッシュで杭を設定し、長辺を南南東から1～9Gr、短辺を東北東からA～EGr、計45Grに区分して調査を進めた。

また、安全面への配慮から、標高3.3m付近まで掘り下げたところで面的調査を中止し、標高3m付近までサブトレンチによって土層のみを確認した。

調査では、西北西～東南東方向に伸びる地形の落ち込みが確認され、落ち込み内堆積土より弥生時代を中心とする時期の遺物が大量に出土した。

1. 上層堆積状況

層序は、重機掘削を行った地形落ち込み肩部付近（標高約4.5m）までは造成土及び近現代攪乱土主体で、茶碗、ビニール類が包含されていた。落ち込み内は基本的に①黄灰色粘土、②褐灰色粘質土、③黒色～黒褐色粘質土、④黒褐色粘土、⑤黄灰色粘砂、粘質土の順で堆積しており、地山は細砂礫と粘質土層が交互に堆積しているようである。

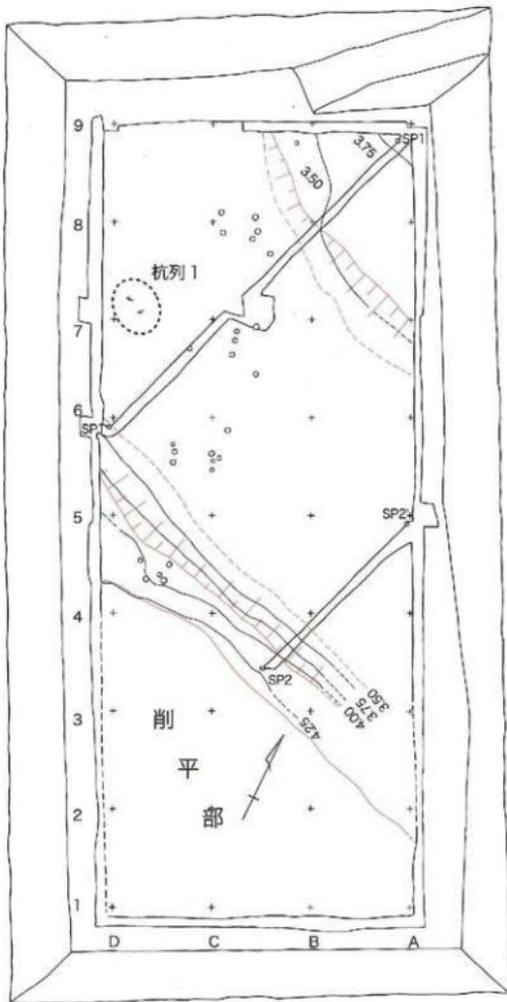
調査は①～③層の標高約3.3mのまでの深さを面的に行い、④層以下はサブトレンチによって部分的に確認した。①～④層まで全ての土層で遺物が確認されるが、特に②～③層では多くの遺物が確認され、大量の木製品も出土している。後述する遺物の特徴及び出土状況から、土層堆積の時期は大きくは④層が弥生時代前期、③層が弥生時代中期、②層が弥生時代後期、①層が古墳時代以降と考えられよう。

2. 検出遺構

1区では近現代の削平によって当時の生活面が破壊されており、地形の落ち込み肩部以上からは遺構が全く確認されていない。落ち込み内においても近現代のコンクリート製、木製の柱等が残存していた他は③層より杭列が1箇所確認されたのみである。以下に地形の落ち込み及び検出遺構の概略を記す。

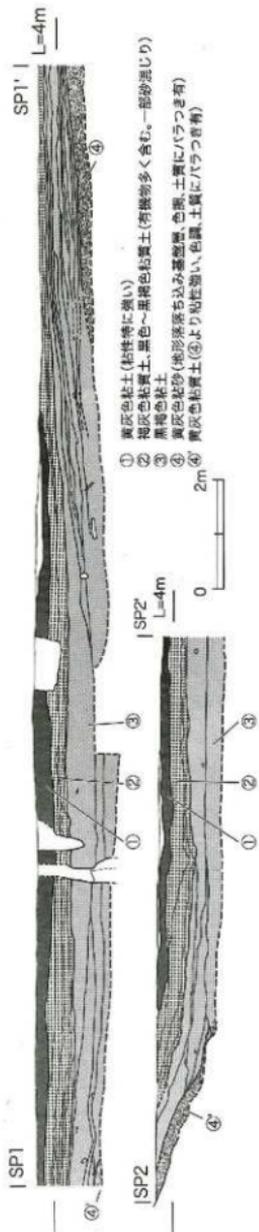
地形の落ち込み（第5図）

旧河道の可能性がある地形の落ち込みは、西北西～東南東方向に帯状に伸び、深さ1m以上、幅約18mを測る。南南西の岸は標高約4m、北北東の岸は標高約3.5mのレベルに確認され、地形はそれぞれの岸方向に向かってさらに緩やかに高くなっている。また、南南西岸の標高約4.25m以上では地形が削平されており、本来の地形が残存していない。



※ ○は近現代の柱

第5図 1区 調査区平面図・土層断面図



- ① 黄灰色粘土(粘性特に強い)
- ② 黄灰色粘質土、黒色～黒褐色粘質土(有機物多く含む、一部砂混じり)
- ③ 黄褐色粘土
- ④ 黄灰色粘砂(地形隆起をたどる礫混じり、色黒、土質にバラつき有)
- ⑤ 黄灰色粘質土(④より粘性強い、色黒、土質にバラつき有)

なお、ここで示した計測値及び図示した地形は面的調査を実施した①～③層掘削時のものであり、地山面の地形ではない。時期的には弥生時代前期以降、中期後葉までに形成された地形と考えると良いであろう。発掘停止面までのレベルでは継続的な水の流れを示す土層堆積状況も確認できず、当時は湿地もしくは沼地に近い状況であったものと考えられる。土層堆積状況及び堆積上内出土遺物の時期等から見て、後述の2区で検出された地形の落ち込みにつながるものと考えられる。

杭列1 (第6図～第7図)

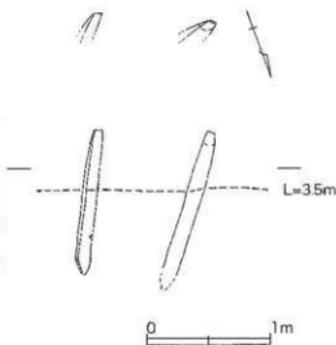
地形の落ち込み内の発掘停止面付近(③層中)において、2本の大形杭が並んで検出された。正確な遺構面のレベルは把握できなかったが、やや南南西側よりに位置し、約80cm間隔で約1.3～1.5mの長さの杭が打ち込まれていた。軸は落ち込み肩の方向にほぼ沿っている。

杭材の埋設状況については、いずれも南南西岸側にやや傾いて打ち込まれ、加工も南南西岸側は非常に粗雑で、ほぼ割りっぱなしの状態である。

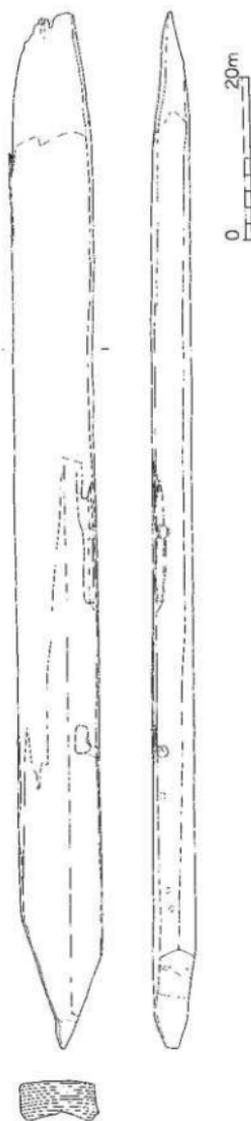
杭材の形状については、完全な形で取り上げることできた1点を第7図に図示した。もう一方の杭材についても、長さには若干の差があるものの、残存部の状況から図示したものとほぼ同様な形状であったと推定される。なお、図示した杭材に

は数箇所ほぞ穴状の加工が見られ、なんらかの部材を転用して利用したものと考えられる。

杭列の時期は後述の包含層出土遺物から弥生時代中期後葉前後のものとして推定される。



第6図 杭列1遺構 実測図



第7図 杭列1 杭材 実測図

3. 出土遺物

出土遺物はそのほとんどが地形の落ち込み内からの遺物で、いずれも落ち込みの周辺から流れ込んできた遺物と推定される。遺物としては①層で土師器、②～③層で弥生土器、各種木製品、④層でもサブトレンチ内より弥生土器が出土している。

i) 土器 (第8図～第11図)

1区出土土器には①層より古墳時代中期の土師器が、②層より弥生時代中期～後期の弥生土器が、③層より弥生時代中期～後期初頭の弥生土器が、④層より弥生時代前期の弥生土器が出土している。以下に土層ごとの出土土器の概略を記す。

④層出土土器

第8図は④層出土土器である。

1は甕もしくは鉢の口縁部である。2は無須壺で、内湾する口縁を持ち、蓋を付けたと推定される孔が2孔づつ1対穿孔されている。風化著しいが、内面に傷状の調整痕が多数残っている。3は広口壺で、頸部に1～2条の直線文が浅く残る。

時期については、松本1～3様式前後と考えられよう。

③層出土土器

第9図～第10図は③層出土土器である。

第9図1～4は壺である。1、2は広口壺の口縁で、口縁端面と上面に数条の凹線文が施される。3、4は直口壺の口縁で、3では口縁外面と端面に、4では外面のみに数条の凹線文が施される。

第9図5～20は甕である。口縁端部に2～3条の凹線文を施すものが多いが、9～10には口縁端部の凹線文が施されない。8～10では頸部内面付近までケズリが確認できる。

第10図1～2は壺・甕の体部である。2では凹線文、刻目文、斜格子文、列点文他各種文様が施され、裝飾性に富んでいる。

第10図3～10は壺・甕の底部である。4は内面に横方向ミガキがほどこされている。9は底部端が肥厚し、10は低い脚状を呈す。

第10図11～15は高坏である。11は内湾する坏部で、口縁端面と外面に凹線文が施される。12は口縁部で、複合口縁状を呈するものと考えられる。内外面に赤色塗採が残る。13～14は脚部で、凹線文、刻目文で飾られる。15は大形のもので、脚付壺等の破片である可能性もある。坏底部は欠損しているが、剝離痕が明瞭に残る。脚部は凹線文、刻目文で飾られる。

時期については、概ね松本IV様式の範疇で捕らえられるものと考えるが、9～8～10、10～12などは草田1期まで下るものと考えられよう。

②層出土土器

第11図1～10は②層出土土器である。

2は壺である。複合口縁に凹線文、頸部に凹線文と波状文が施される。

1、3、9、10は甕である。1、9は口縁端部が短く拡張するものである。1では口縁端面に凹線文、頸部に指頭丘痕文帯の一種で、爪で厚痕を施したと考えられる文様帯がめぐる。9では体部に刺

突文の一部が残る。3は無文の拡張した複合口縁を持つものである。肩部に刺突文が施される。10は体部内面にハケメを残す頭部の破片である。指頭圧痕文帯がめぐる。

4～8は高坏である。4、5は坏部で、口縁部は4では屈曲して直立する口縁を、5では複合口縁状を呈する。4は口縁端面に凹線文が施される。5には内外面赤色塗採が残る。6～8は脚部である。拡張した端部から直立して立ち上がる形状のもので、6、8には坏底部が剥離した痕跡が確認できる。

時期については、10がⅢ～Ⅳ様式、1～2、4～9が松本Ⅴ-1～2様式、3が草田5期に平行するものと考えられる。ただし、10の資料については、③層新相資料よりも古い時期のもので、土層の時期を反映する資料ではない。

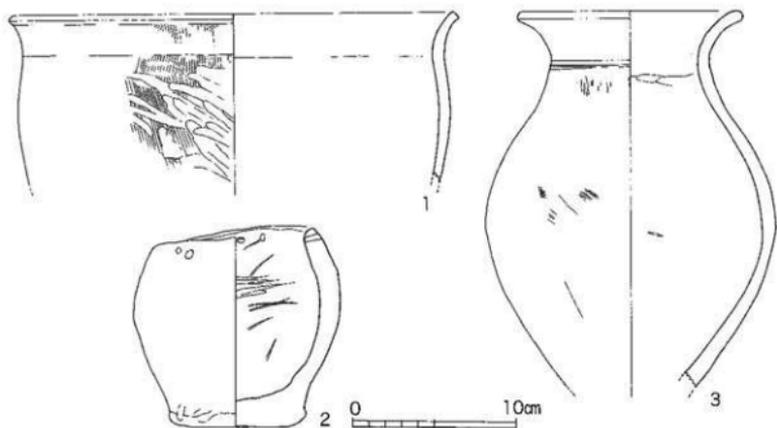
①層出土土器

第11図11は1層出土土器である。調査区の北側端において1個体のみ出土している。11は甕で、口縁中程に稜を持ち、複合口縁のなごりをわずかに残す。

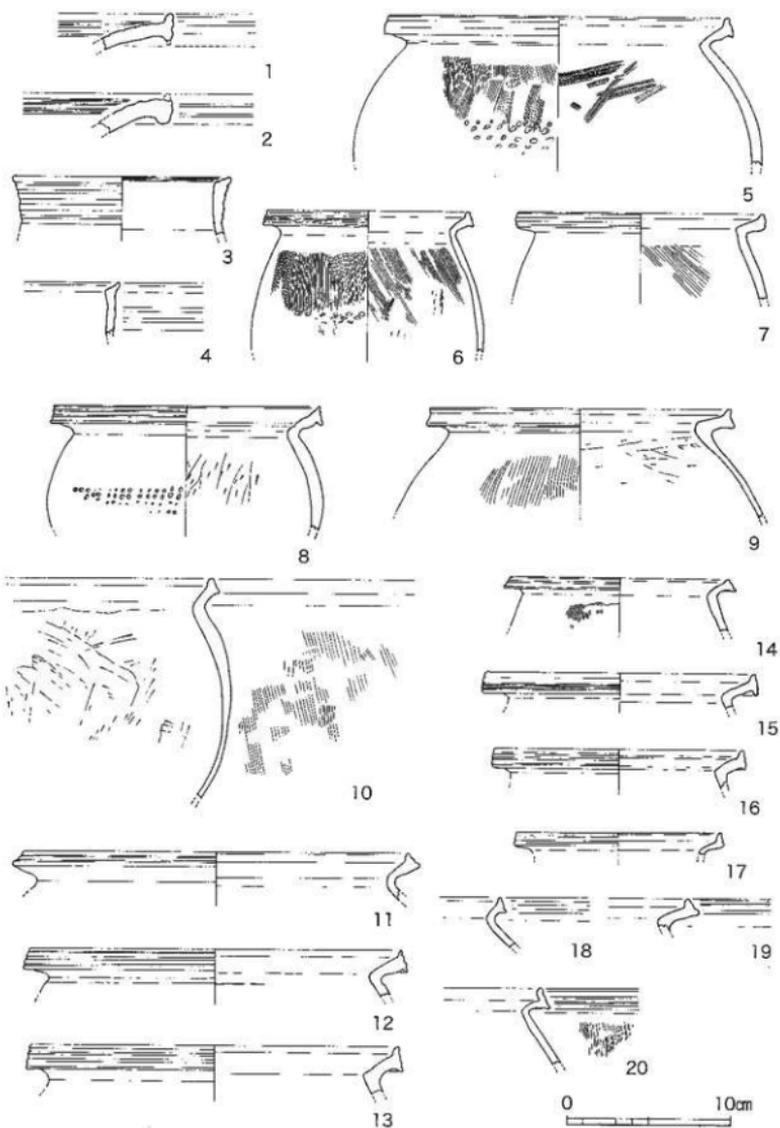
時期については松山Ⅲ期末～Ⅳ期に相当するものと考えられよう。

各土層について土器資料の時期をまとめると、①層が古墳時代中期後半、②層が弥生時代後期初頭～後葉、③層が弥生時代中期後葉～後期初頭、④層が弥生時代前期ということになる。ただし、土層の時期としては、次節で報告する2区の包含層遺物から、①層は奈良・平安時代まで下限を下ることが確実で、③層は弥生時代中期中葉まで上限を遡る可能性があることが認められる。

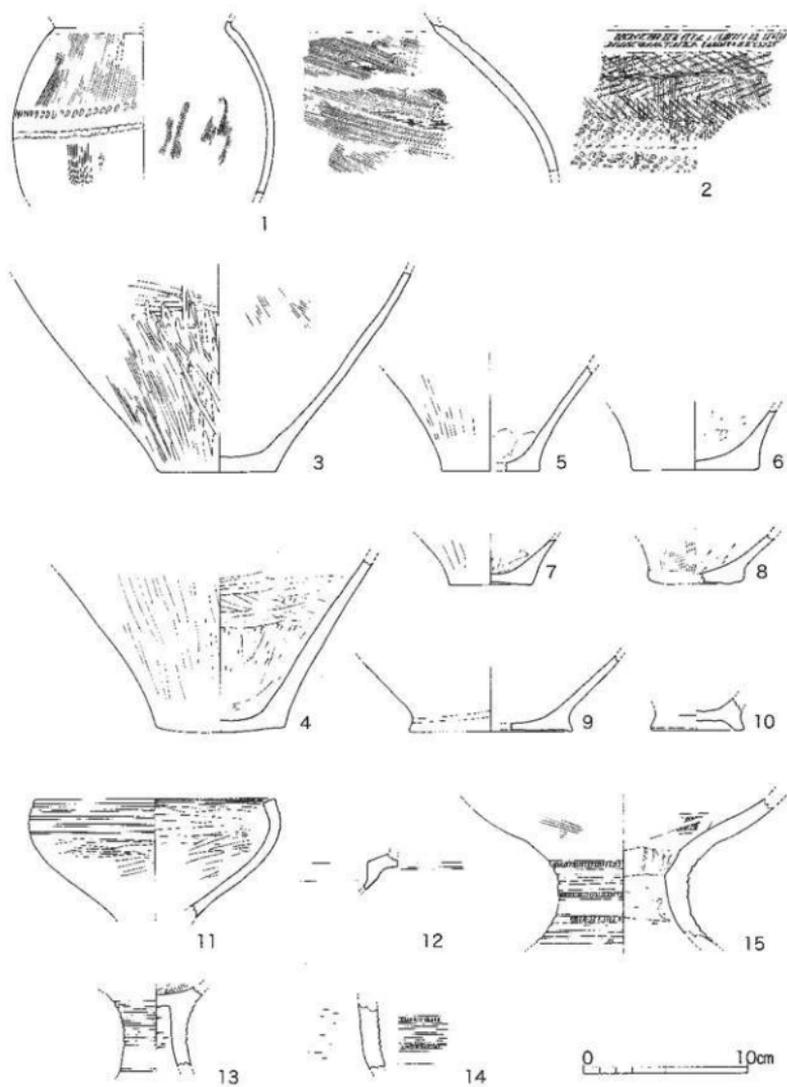
出土量としては弥生時代中期後葉～後期初頭の土器資料が圧倒的に多く、他時期の資料は極わずかである。



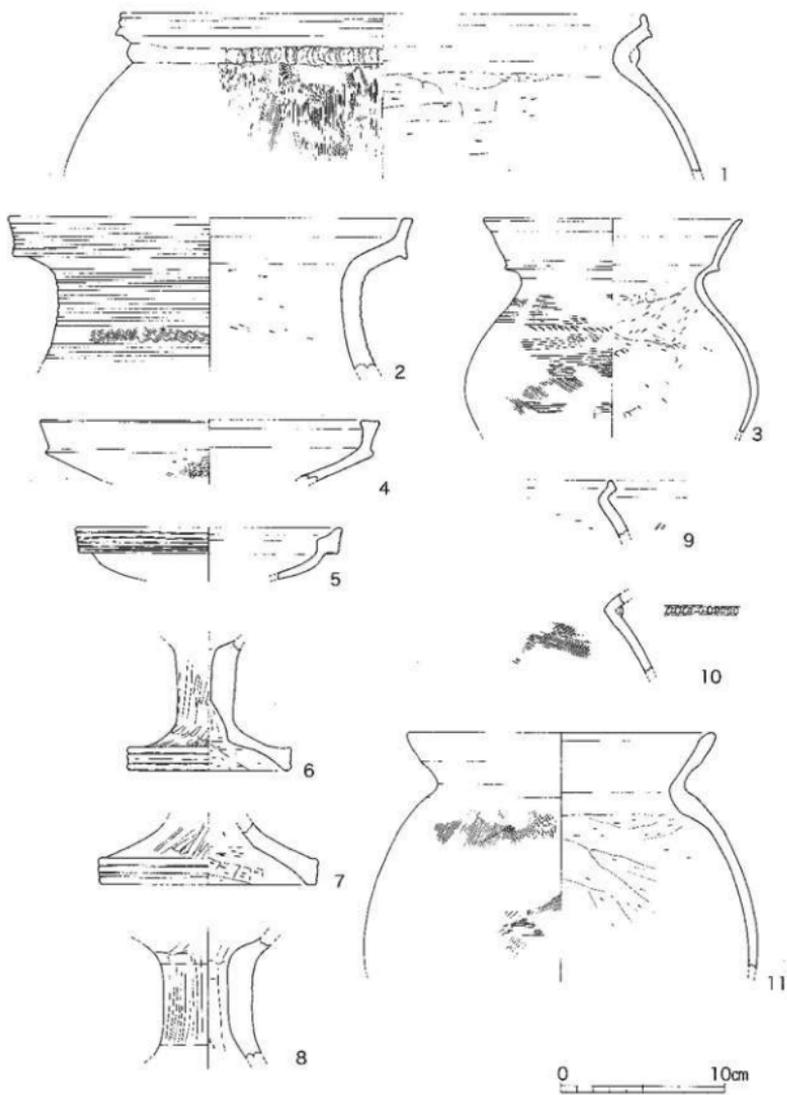
第8図 1区4層 出土土器実測図



第9图 1区3层 出土土器实测图-1



第10图 1区3层 出土土器实测图-2



第11图 1区1~2層 出土土器実測図

ii) 木製品

1区の出土木製品は、②～③層より弥生時代中期～後期の容器類、農具、漁労具、建築部材、武器、その他雑具、部材、杭材など多種多様な用具が確認された。加工痕のあるものとして現場から取り上げて持ち帰った木製品は約600点に登り、その内約200点を保存を要するものとして選別して保管している。以下に報告する木製品は保存しているものの内、用途の判別できるもの、形状に特徴のあるものを中心に選別したものである。また、杭材等については代表的なものを数点報告するのみにとどめることとする。

以下に、用途ごとの木製品資料の概略を記す。

<容器類> (第13図～第15図-1、6)

第13図1は田舟と推定したものである。運搬具として扱うべきかもしれないが、ここでは13-2との類似性を重視し、容器類として分類した。把手が削り込まれ、底部に7箇所補修痕がある。舟尾の切断面は極めて粗雑であり、後に切断されたものと推定した。

第13図2は大形槽である。把手が主軸上に1箇所削り込まれている。破面の形状等から、対面にもう1カ所把手が削り込まれていた可能性が高い。

第14図1～3はそれぞれ高杯口縁部、コップ形木製品、盤である。

第14図4は舟形容器である。形状は舟首、舟尾ともに強く反り返ったもので、底部には棒状に2列の低い脚が付属し、安定した形状である。内部の中程には仕切板が削り出されていた痕跡があるが、丁寧に削り取られている。祭祀用具の可能性が考えられるが、容器としての実用性を備えたものである。表面には全面に塗りが施されている。

第14図5は舟底形の底を持つ容器底部である。

第15図1は筒形容器である。本来は2個体の半筒形製品を紐等で縛り、底の付いた筒状の容器として使用したものであろう。組み合わせ面は割りっ放しの状態であり、内部削り抜きの為に用材を割り、割面をその後の組み合わせ面として利用したものと考えられる。

第15図6は把手付の削り抜き桶である。底部は肥厚し、この部分に長方形のほぞ穴が掘り込まれている。この肥厚部は、底板を下方から押し当て、底板の下からほぞ穴に棧を差し込んで固定するためのものと考えられる。棧を利用した底板固定法は比較的大形のものに使用される技法のようである。

<食事具> (第15図-2～5、7)

第15図2、3、5は横杓子である。2、3は出土状況、漆の同一性等から同一個体杓子の柄部分と考えられる。2が柄の上部、3が柄の下部に付き、把手状の輪を柄として削り出した形態と推定される。上面(2)には陽刻の文様が、下面(3)には陰刻の文様が施される。5には塗りが施されている。

第15図4は匙等の柄と推定されるものである。

第15図7は杓子形木器である。しゃもじに似た形態の木製品で、断面形は完全な板状である。液体の攪拌具としての用途が考えられる。

<農具> (第16図～17図-3)

第16図1～4は鋏である。1は直柄狭鋏、2は曲柄又鋏もしくは三角形の透かしを持つ曲柄平鋏、3は曲柄又鋏、4は傘のついた曲柄平鋏の一部である。また、1の直柄狭鋏には柄の残片が残っていた。

第16図5～7は田下駄である。いずれも四孔単独型足板として分類されるものと考えられる。

第17図1横槌、2は堅杵である。3は農具の掘り棒と推定したが、樹種等から食器具杓子形木製品等の一種である可能性も考えられる。

<漁撈具> (第17図-4)

第17図4は漁撈具のヤスと仮に推定したものであるが、正確な用途は不明である。

<武具> (第18図-1、2)

第18図1、2は楯である。1は両面に赤色塗彩を施し、刺し縫いの小孔が4列1単位で数列並んで確認できる。各列の孔と孔の間は紐で綴じたもので、赤色塗彩はその上から施すため線状に無塗彩の部分が残る。また、塗彩部分にも他の小孔よりやや大きめの孔が1箇所確認できる。2は塗彩の確認されないもので、図面の下端は本来の端部を残す可能性が高い。刺し縫いの小孔が数列確認され、端部付近では2列が狭く並んでいる。

<運搬具> (第18図-3～5)

第18図3～5は肩担運搬具である天秤棒と推定したものである。いずれも棒の端に紐かけ用の切り込みを入れたものである。但し、断面が円形で安定して荷物を運搬するのに適さないこと、4のように何かを差し込んだような段状の痕跡を残すものがあることなどから、ここで分類した資料が実際に天秤棒として使用されたものかどうかは定かでない。

<雑具ほか> (第18図-6～第26図-1)

雑具ほかとして分類したものには、発火具、その他用具、各種部材、部材残片などがある。用途が特定できない部材等も多いので、ここでは用途の特定、推定ができるもののみを記すにとどめる。

第18図7、8は用具の柄と推定したものである。一方の端が7では徐々に膨らみ、8では段状に若干膨らんでいる。

第18図12は発火具の火鑽臼である。側面にV字状の刻みを入れ、刻みの先端部に焦げ跡を伴う火鑽穴が確認できる。

その他は用途等の特定が困難であるが、第18図6は紡織具経巻具の可能性があるので、9～11は緊縛型留具と推定される。

<建築材ほか> (第26図-2～第27図)

第26図2～第27図は、必ずしも断定できないものも含まれるが、大形建造物の部材を建築材として推定したものである。

第26図2は直径18cm程度の孔が2孔以上の連続して穿たれた板材である。柱材等を組み合わせたものであろうか。

第26図3、4は柱材と推定したものである。

第27図1は両端に凸加工を施した板状のほぞ差棒材である。

第27図2、3は端面を薄く加工した大形板状部材で、3では2箇所の穿孔も確認される。薄く加工した部分を差し込み、壁板や床板に利用したものであろうか。

第27図4は屋根の破風板と推定したものである。腹面に直角三角形に近い台形の切れ込みが連続して施され、頭部は約45°にカットされ、尾部は鱗状に加工されている。また、背面に2箇所のくり込みが見られるほか、表面に3箇所の穿孔が見られる。

<用途不明品> (第28図)

第28図は用途の判別、推定ができなかったもので、特徴的な形態を持つものである。詳細は不明であるので、その残存部形状以外の特筆事項のみを述べるにとどめる。

第28図1は装飾性に富んだ板状木製品である。半円形の透かしが連続して穿たれるものと推定される。

第28図4は出土状況に特徴がある。中央部で2つ折りになり、きれいに重なった状況で出土した。重なりの間には堆積土もほとんど流入していなかったため、折り重ねた状態で使用された可能性を考慮すべきであろう。

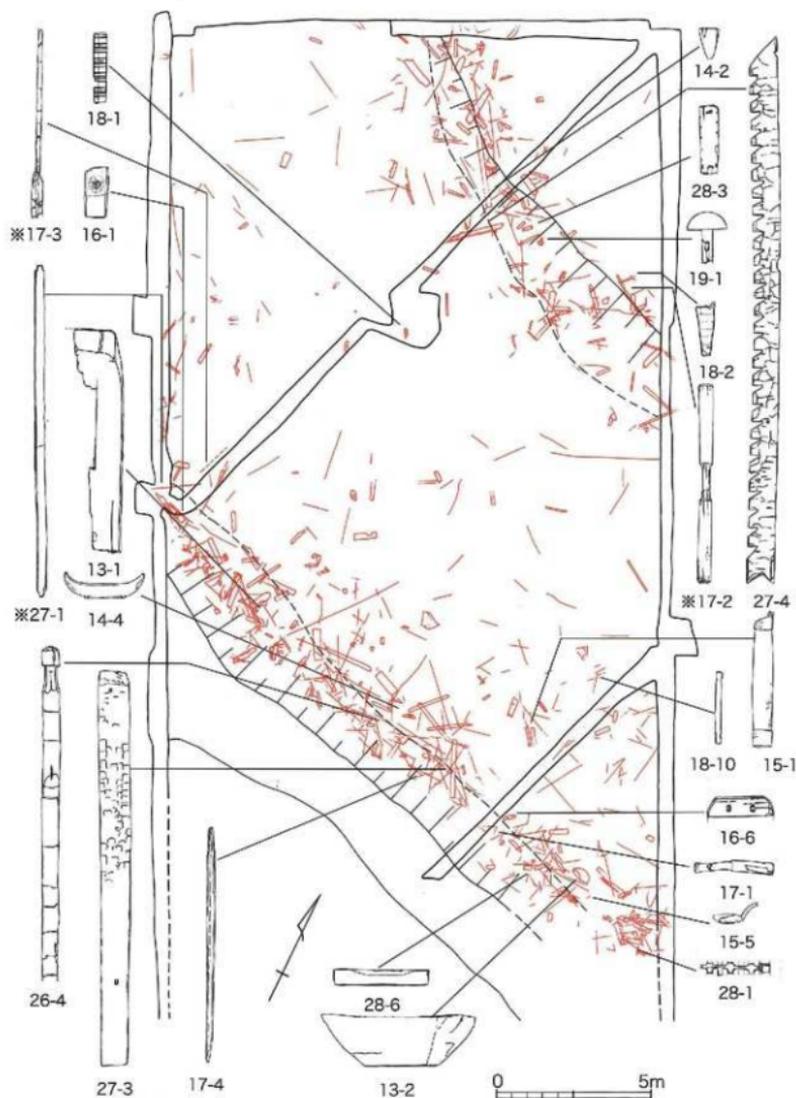
<杭材、矢板材ほか> (第29図)

第29図は杭材、矢板材等である。ここではその全てについての報告は省略し、その代表的なものについて数点図面掲載するにとどめることとする。

木製品の時期については、前述の共伴土器資料の時期に照らし合わせると、②層出土木製品がおおよそ弥生時代後期、③層出土木製品が弥生時代中期後葉～後期初頭頃のものとして推定される。

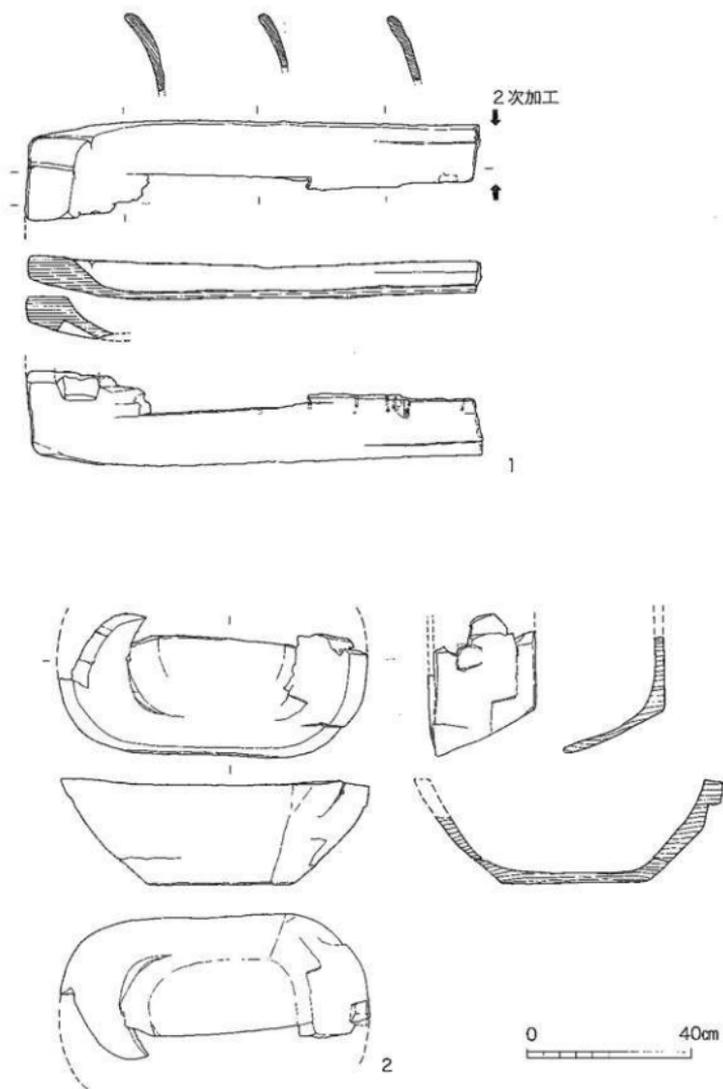
ただし、次節で報告する2区の調査においては1区の③層に対応すると推定した土層から弥生時代中期中葉の土器なども一定量混在して出土しており、③層出土木製品の上限時期は中期中葉まで遡る可能性を考慮しなくてはならない。

また、②層中に確認される木製品においても、小片については下層等からの混入品が存在する可能性を考慮すべきであろう。

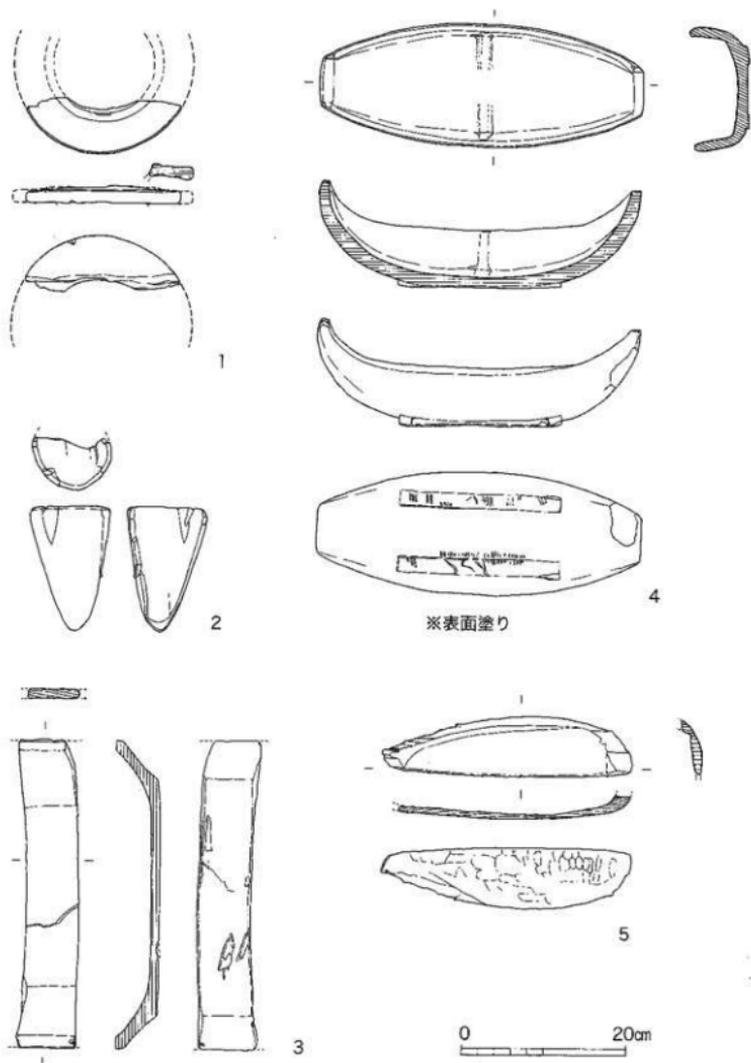


※印は、2層出土遺物、他は全て3層出土

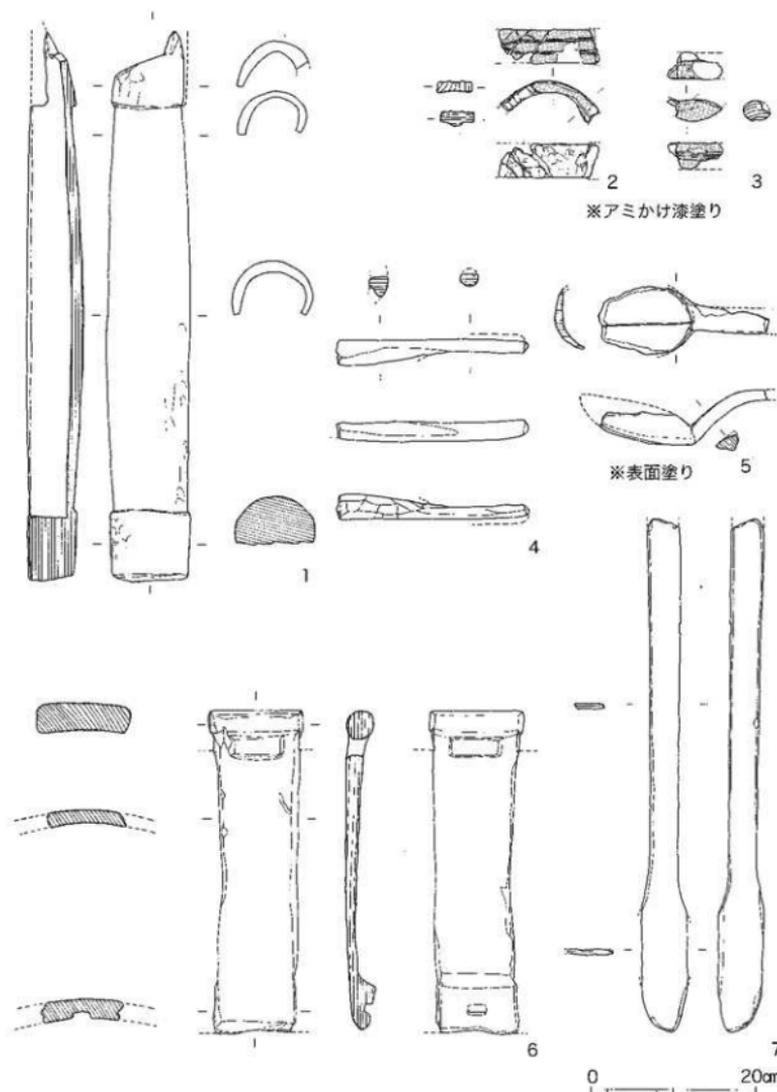
第12図 1区木製品出土状況図



第13図 1区 出土木製品実測図-1 (3層 S=1/12)

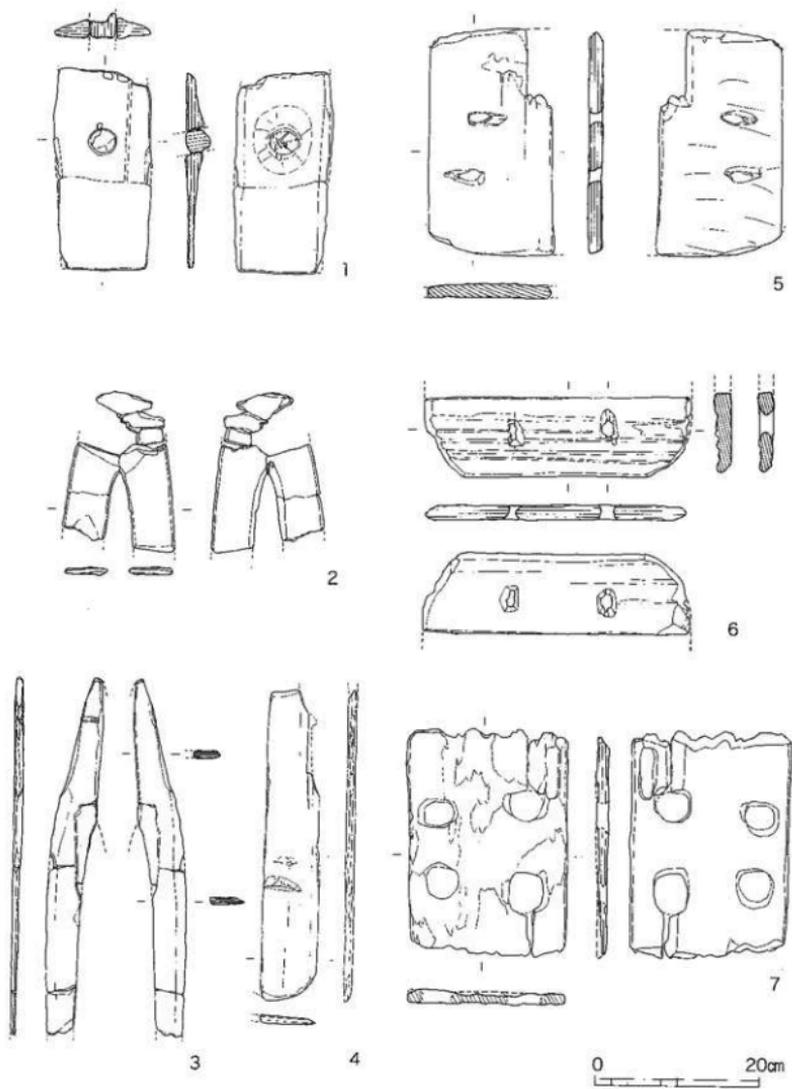


第14図 1区出土木製品実測図-2 (3層 S-1/6)

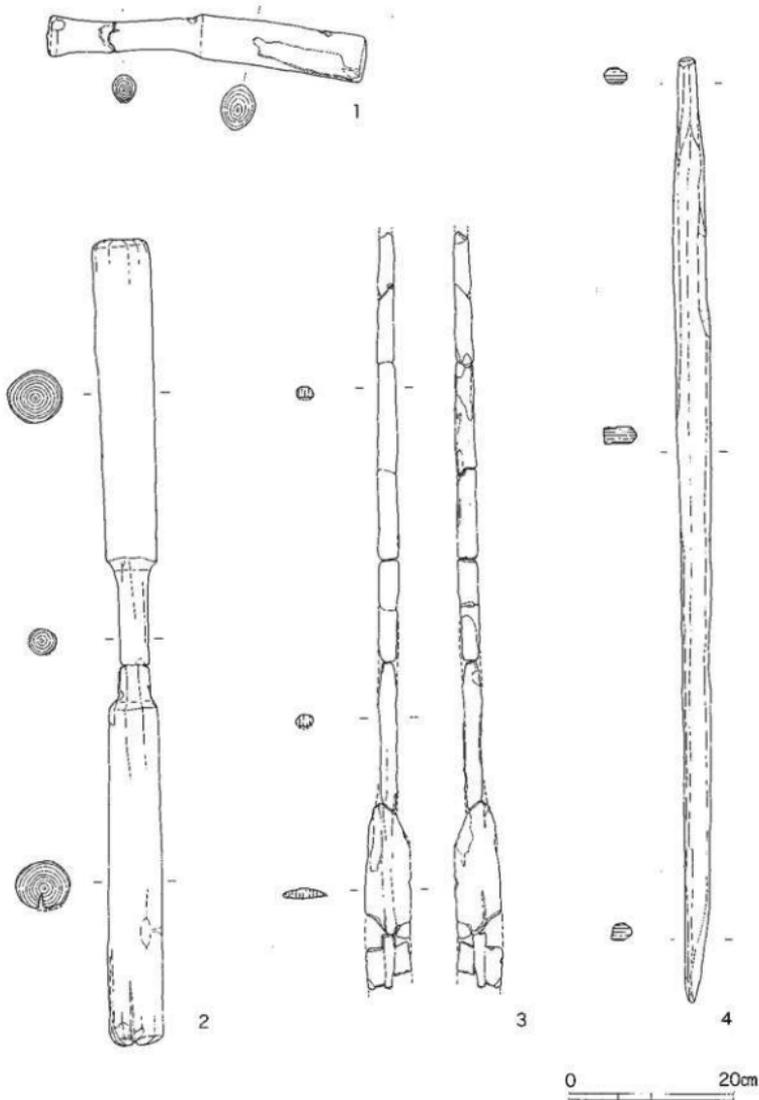


第15図 1区1～2層 出土木製品実測図-3

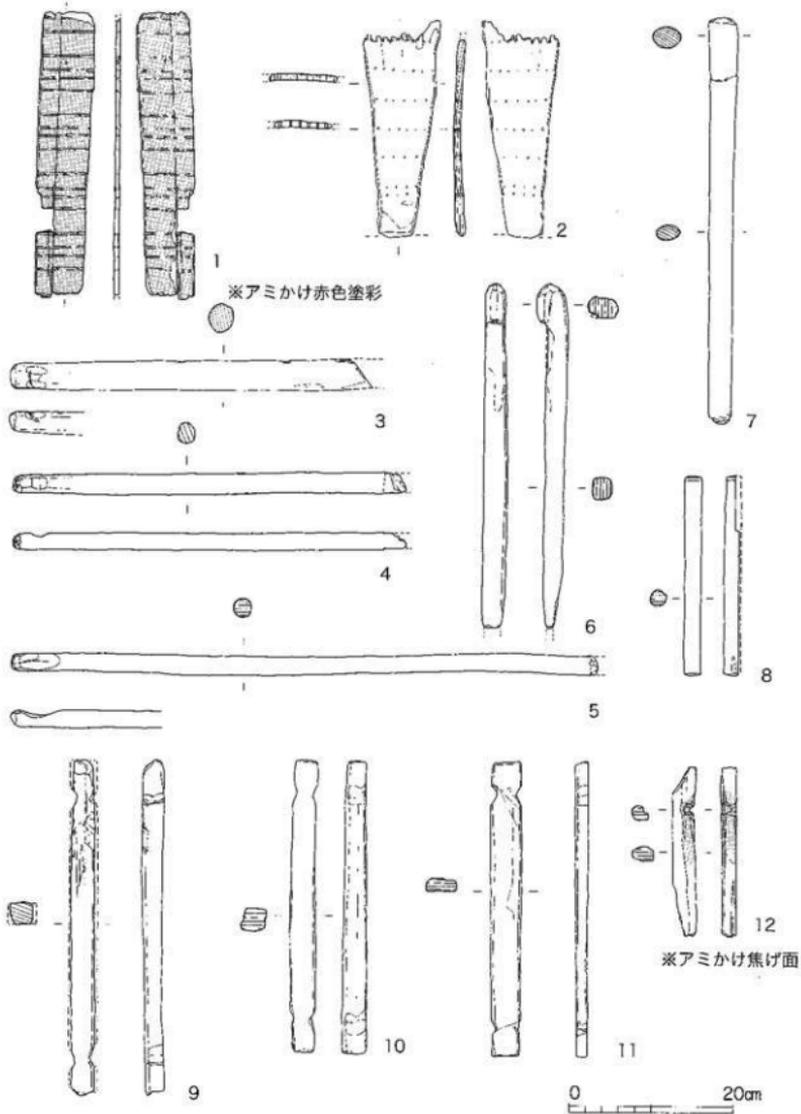
(6・7-2層 1～5-3層 S=1/6)



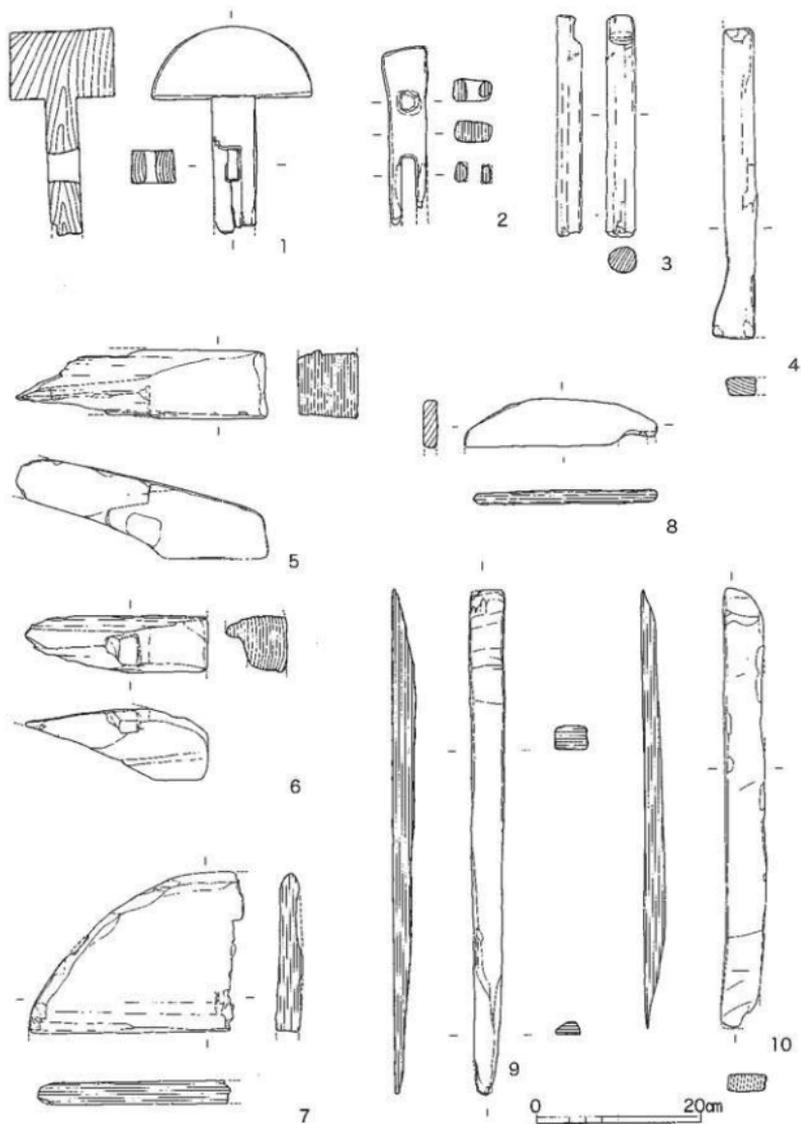
第16图 1区 出土木製品実測图-4
(7-2層 1~6-3層 S=1/6)



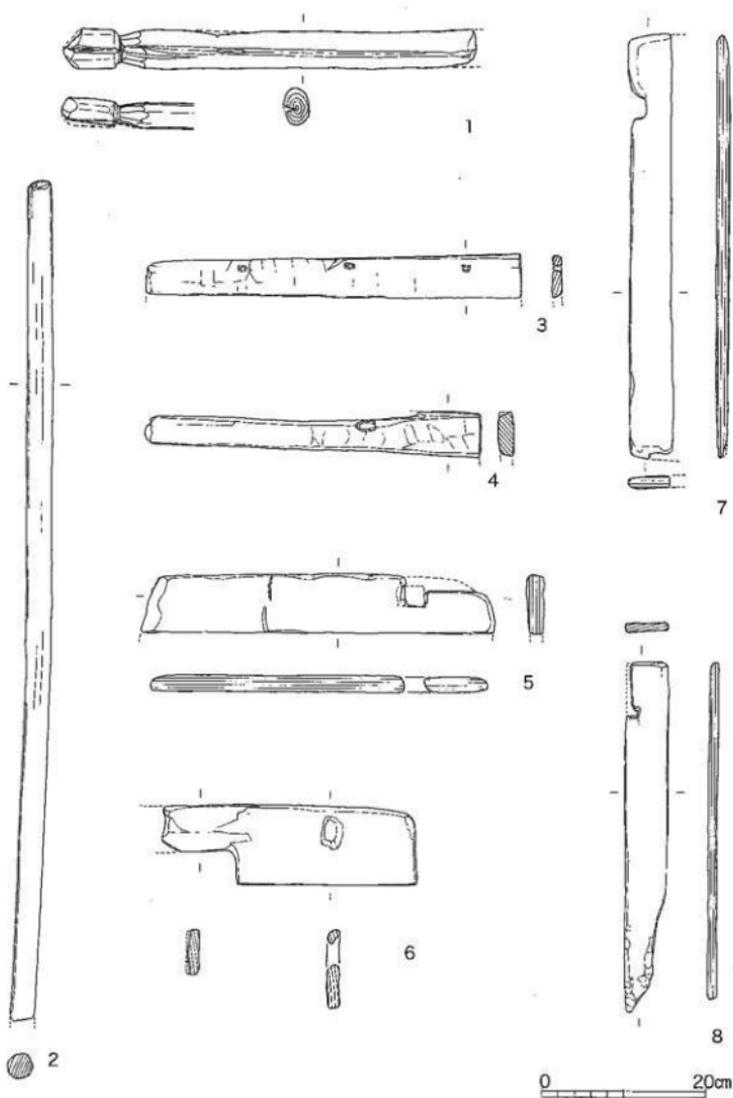
第17图 1区 出土木製品実測图-5 (2-2層 1·3·4-3層 S=1/6)



第18図 1区 出土木製品実測図-6 (3層 S=1/6)

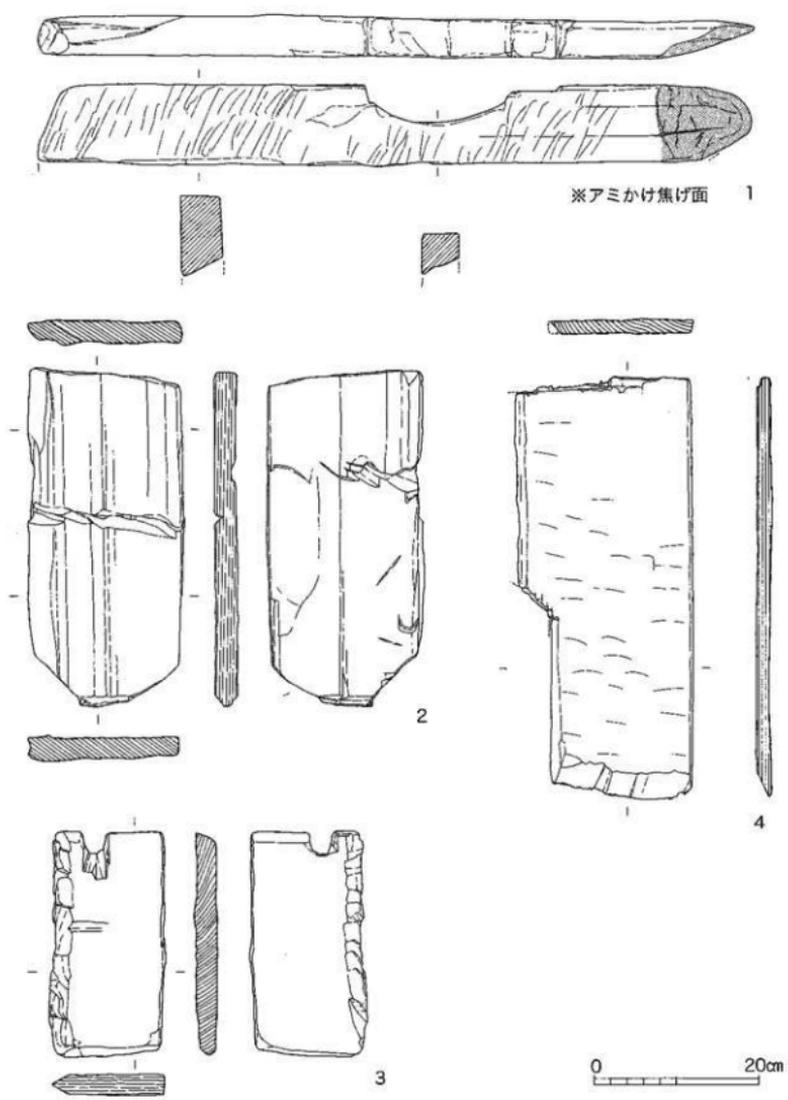


第19图 1区 出土木製品実測图-7 (3層 S=1/6)

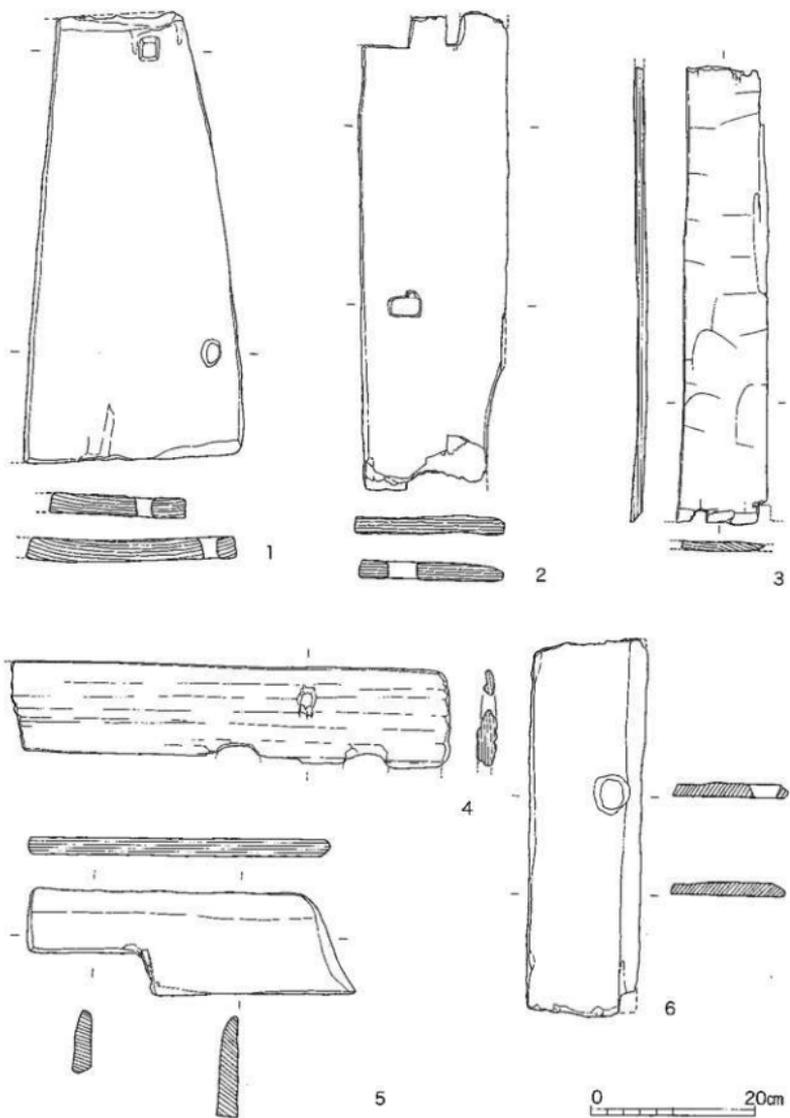


第20图 1区 出土木製品実測図-8

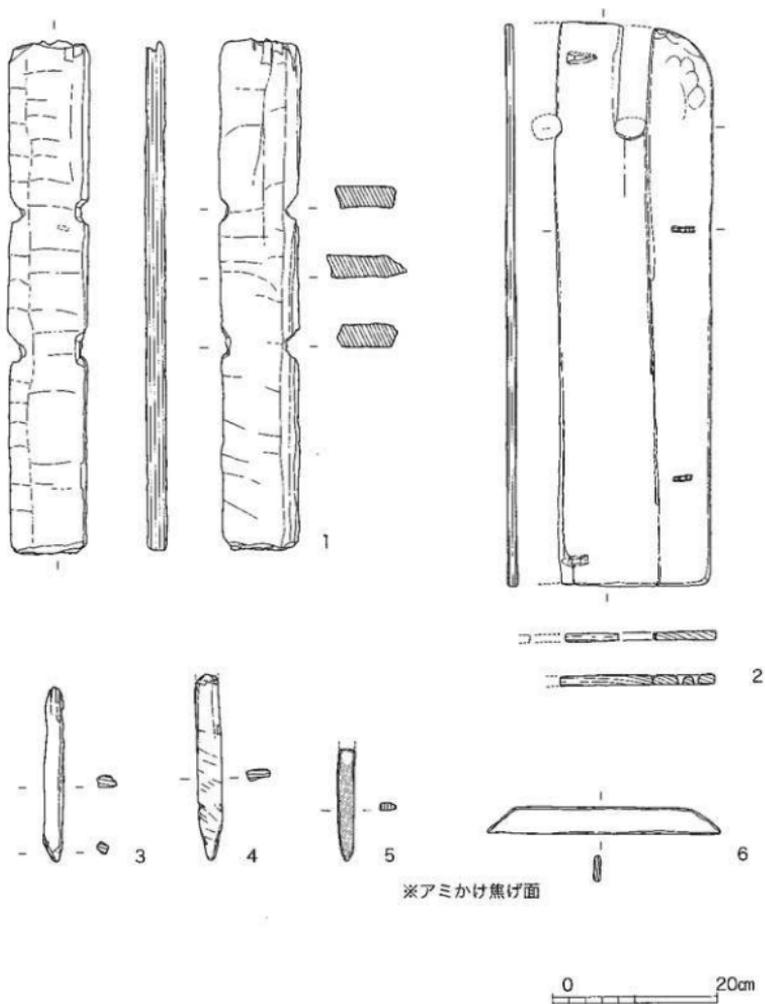
(3層 S=1/6)



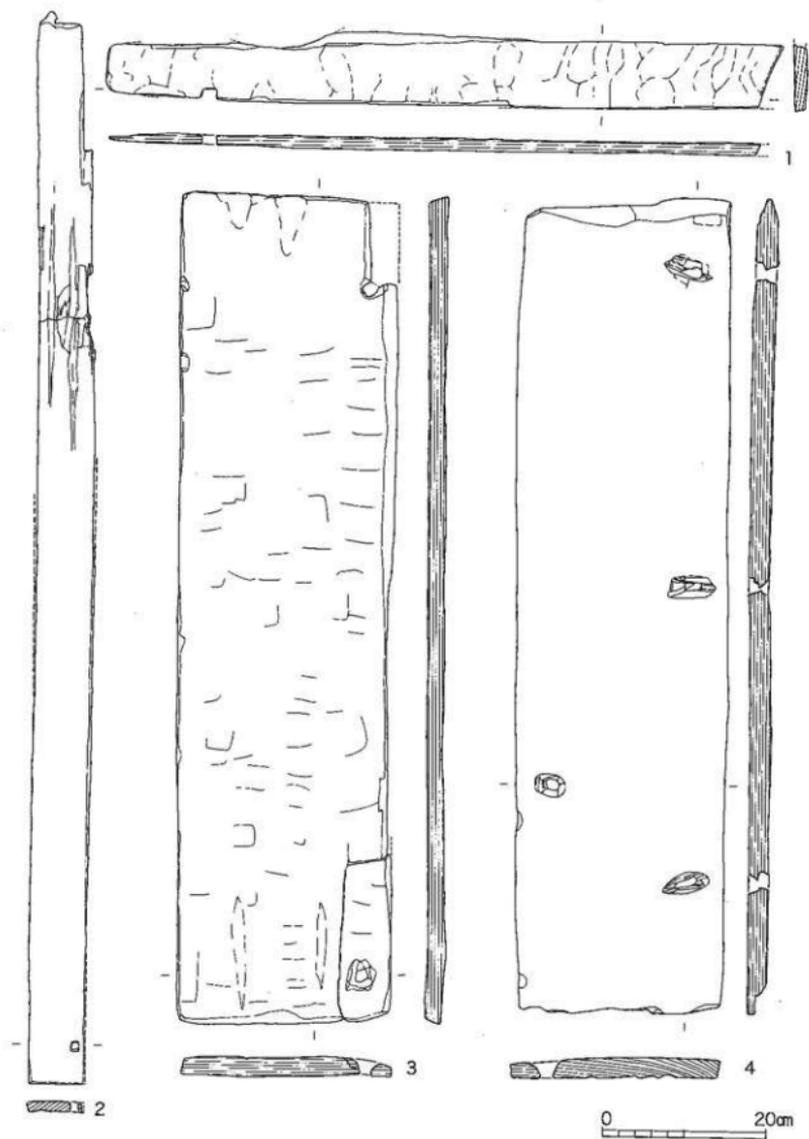
第21図 1区 出土木製品実測図-9 (2-2層 1・3・4-3層 S=1/6)



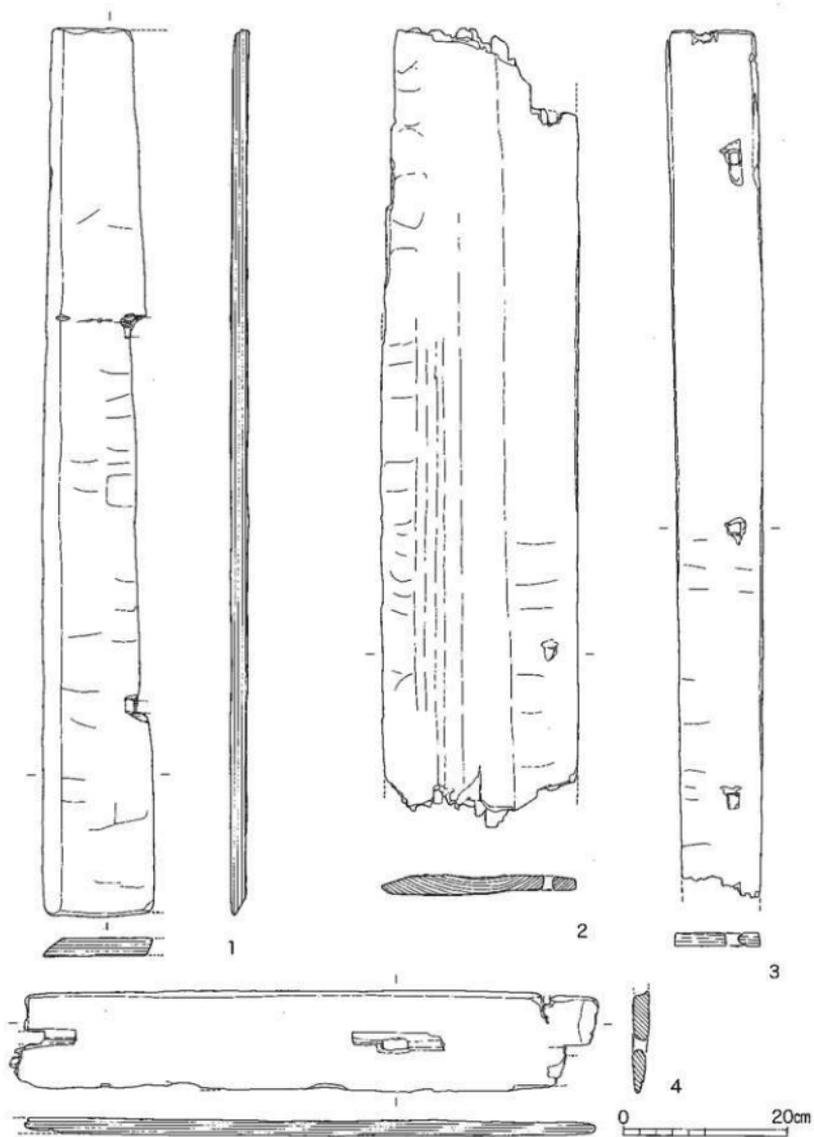
第22图 1区 出土木製品実測図-10 (3層 S=1/6)



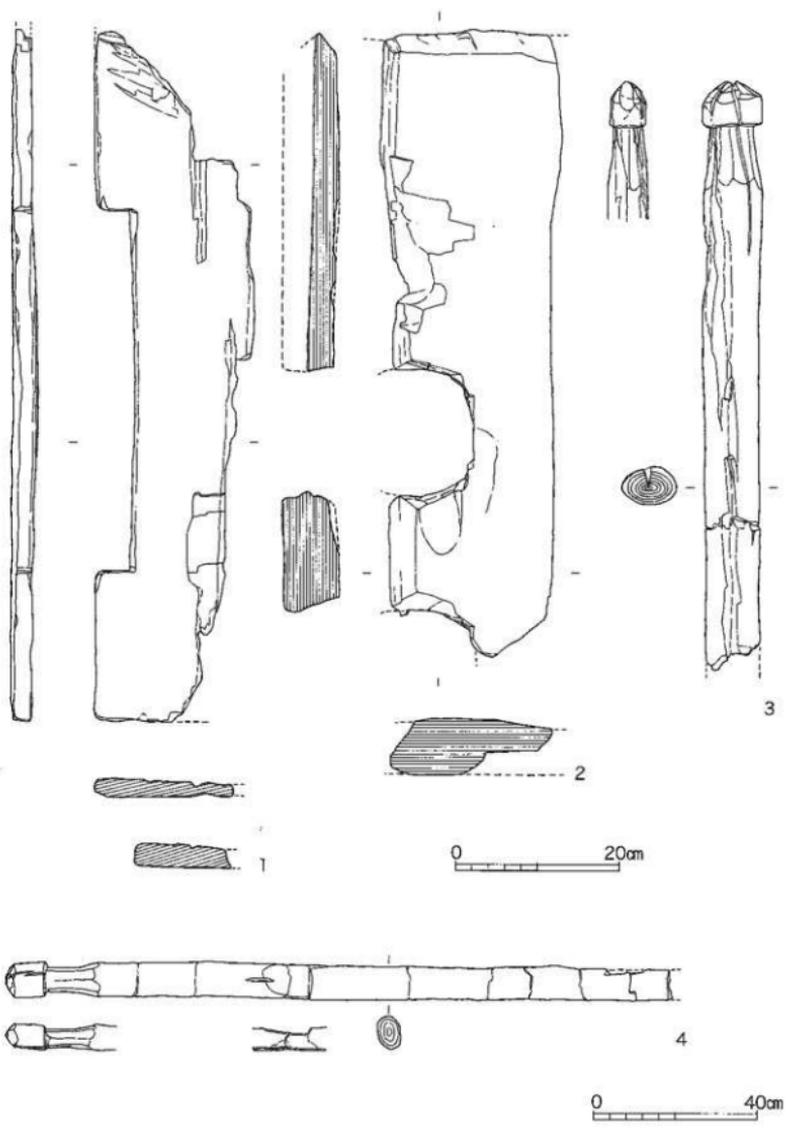
第23図 1区 出土木製品実測図-11 (1-2層 2~6-3層 S=1/6)



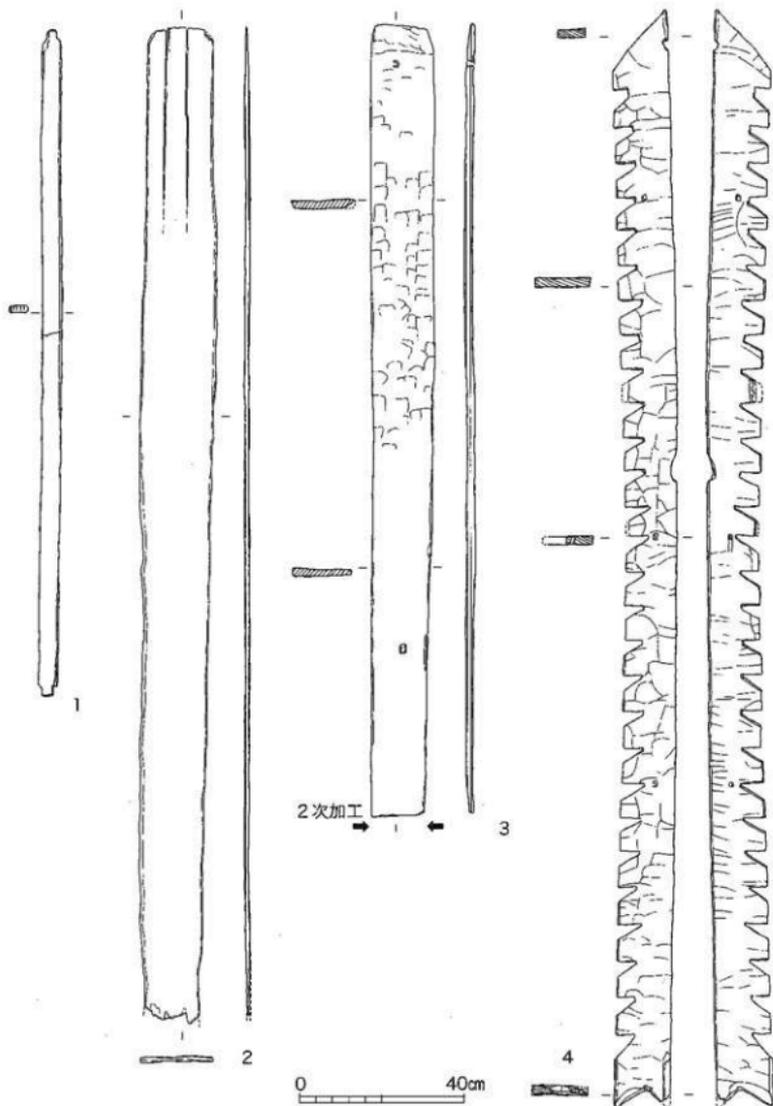
第24图 1区 出土木製品実測图-12 (3層 S=1/6)



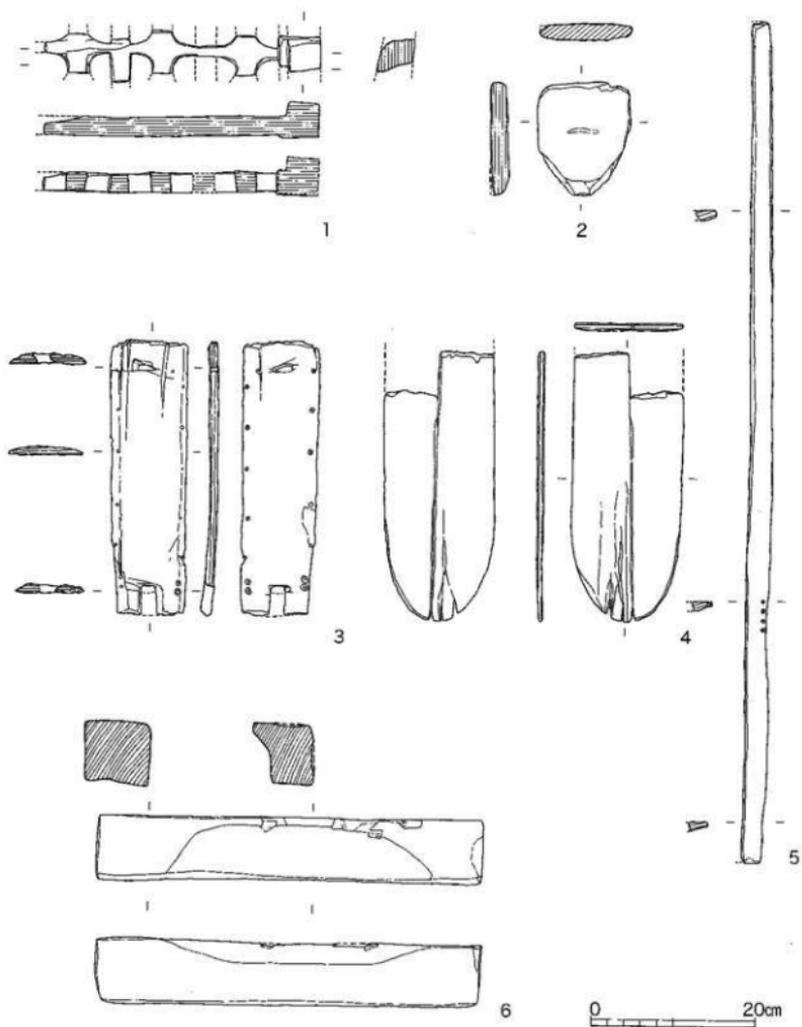
第25図 1区 出土木製品実測図-13 (3層 S=1/6)



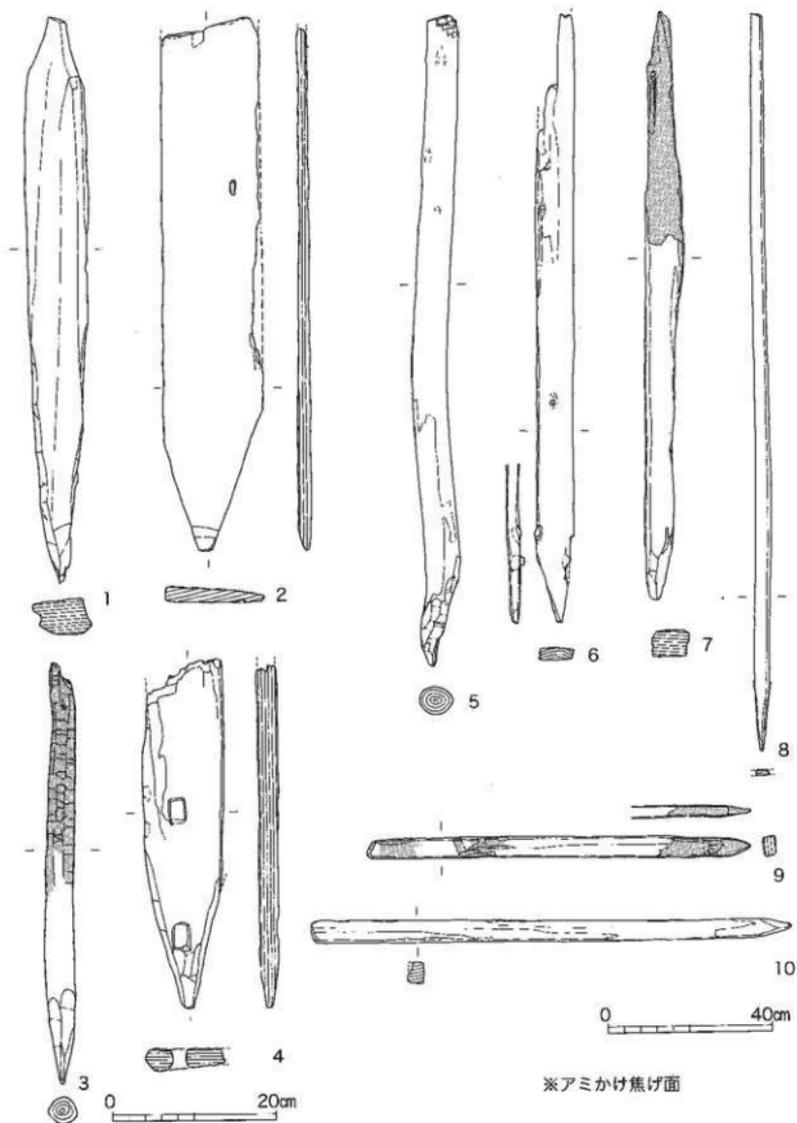
第26图 1区 出土木製品実測図-14 (3層, 1~3-S=1/6 4-S=1/12)



第27図 1区 出土木製品実測図-15 (1-2層 2~4-3層 S=1/12)



第28图 1区 出土木製品実測图-16 (3層 S=1/6)



第29図 1区 出土木製品実測図-17

(3層 1~4 S=1/6 5~10 S=1/12)

※アミかけ焦げ面

第3節 2区の調査

2区の調査は調査地の北側、北北西～南南東約30m、東北東～西南西約25mの約750㎡を対象範囲とした。発掘停止面の面積は約350㎡である。1区と同様に標高約4.5～4.8mまで重機による掘削を行い、その後手掘りによって土層ごとに掘り下げて遺構・遺物の状況を確認した。

調査区には5mメッシュで杭を設定し、長辺を北北西から1～5Gr、短辺を東北東からA～DGrに区分して調査を進めた。

また、2区では標高約3mまで面的な調査を進め、それ以下の状況については、標高2.7m付近までサブトレンチによって部分的に土層のみを確認した。

調査では、旧河道の可能性のあるほぼ南北に伸びる地形の落ち込みが確認され、落ち込み内より弥生時代を中心とする時期の遺物が大量に出土した。落ち込みの時期、土層堆積状況には1区で確認したものと共通性が見られ、双方の落ち込みはカーブして連結するものと考えられる。

1. 土層堆積状況

層序は、表土掘削を行った地形の落ち込み肩部付近までは造成土及び近現代攪乱土主体であった。落ち込み内は基本的に①黄灰色粘土、②褐灰色～黒褐色粘質土、③黒褐色粘土、③' 黒色粘砂の順で堆積しており、地山は細砂層、粘質土層等がほぼ水平に堆積している。

①～③はその堆積状況から、それぞれ1区で確認された①、②、③層に対応する土層である可能性が高い。③'層についてはサブトレンチによる極めて部分的な確認であったため判断が難しいが、③層の変化と考えた。

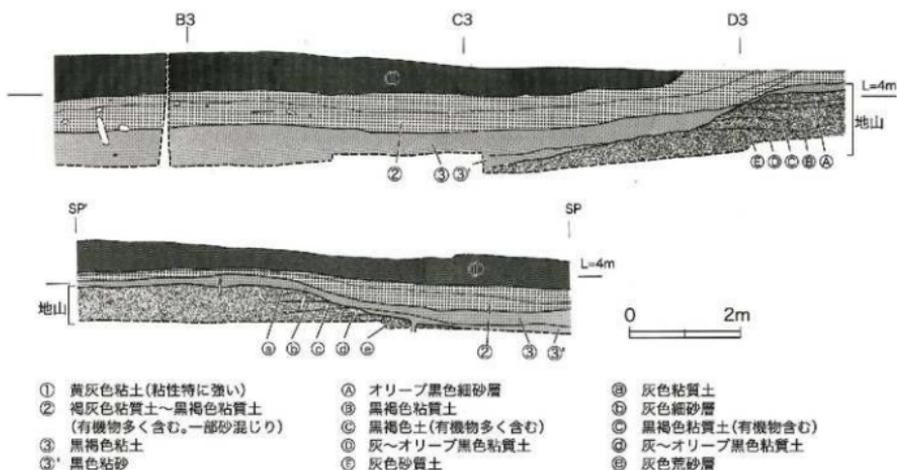
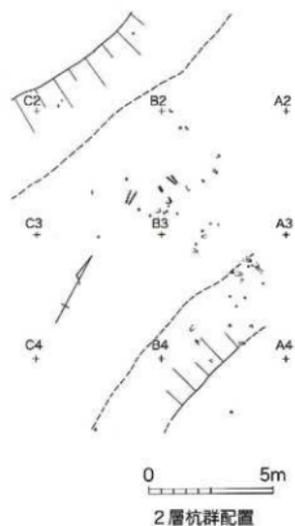
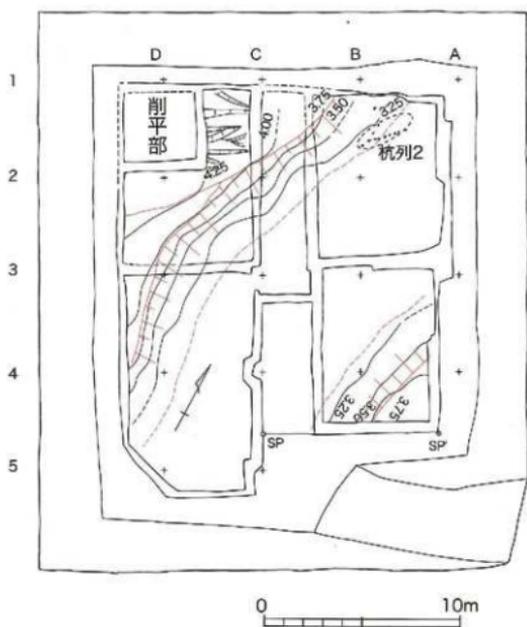
調査は①～③層の標高約3mまでの深さを面的に行い、地山面はサブトレンチによって部分的に確認した。①～③層まで全ての土層で遺物が確認されるが、特に②～③層では多くの遺物が確認され、大量の木製品も確認されている。後述するこれらの遺物の特徴及び出土状況から、土層堆積の時期は大きくは③層が弥生時代中期、②層が弥生時代後期、①層が古墳時代～奈良平安時代と考えられる。

2. 検出遺構

2区では、1区と同様に遺跡が営まれた時期の生活面は近現代の攪乱によって破壊されており、地形の落ち込みの肩部以上からは明確な遺構は確認できなかった。しかしながら、落ち込み内の②層より杭群が1群、③層下面付近から杭列が1列確認された。以下に地形の落ち込み及び検出遺構の概略を記す。

地形の落ち込み (第30図)

旧河道の可能性のある地形の落ち込みは、ほぼ南北方向に伸び、深さ1.3m以上、幅約13～14mを測る。西側の岸は標高約4m、東側の岸は標高約3.75mのレベルに確認され、西側の地形はさらに西



第30図 2区調査区平面図・土層断面図

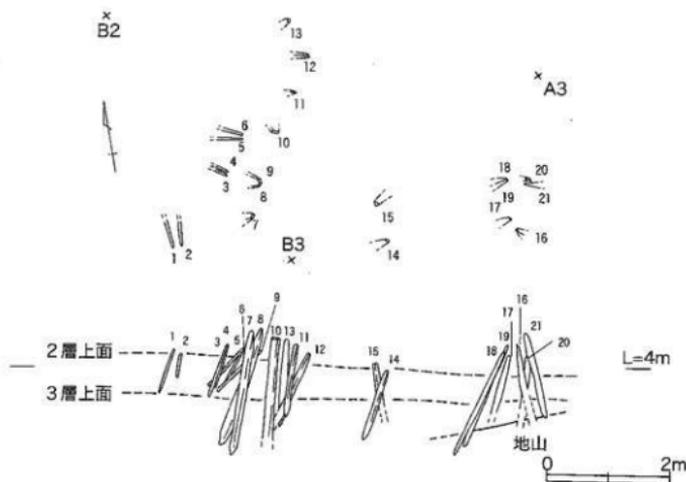
方に向かって緩やかに高くなっていることが確認される。また、西岸の標高4.25m前後では攪乱による地形の改変が著しく、本来の地形が確認できない。

なお、2区では1区の④層にあたる土層が面的調査の範囲に存在しないため、ここで示した計測値、図面ともに地形の落ち込みを形成している地山面の地形を示す。1区の状況と2区③層堆積時期を合わせて考慮すると、弥生時代前期以降、弥生時代中期中葉ごろまでに形成された地形と考えられよう。発掘停止面までのレベルでは継続的な水の流れを示す土層堆積状況も確認できず、遺物が堆積した当時は湿地もしくは沼地に近い状況であったものと考えられる。

②層杭群（第31図～第32図）

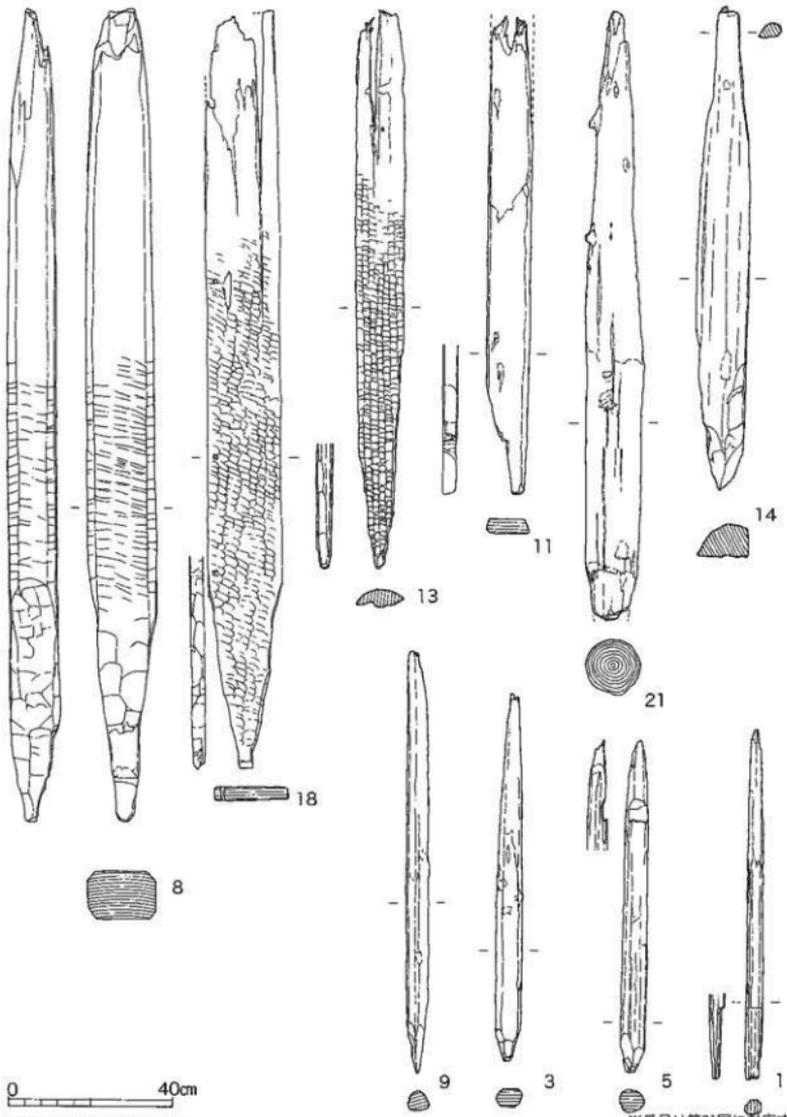
地形の落ち込み北半部にあたる位置を中心に、無数の杭群を検出した。これらは①層掘削時点すでに杭頭部を確認したものが多く、②層中の遺物や木片がこれらの杭に引っかかるように出土しており、②層堆積中の時期に打ち込まれたものと考えられる。配列に明確な規則性は見い出せなかったが、第31図1～6や7、8、10～13は旧河道の軸に沿っているようにも見える。

第32図は②層杭群主要杭の遺構実測図である。1～6はいずれも2本1組で打ち込まれたと考えられるものである。一部では頭部に切り込みが確認できる（第32図5）。また、7、8も対になって打ち込まれたと考えられるもので、他の杭材に比べ特に大形で加工も丁寧なものである（第32図8）。



1～2:棒状 3～6、9:丸杭(5のみくり込み有り) 7～8:大型角杭 10～12:矢板(断面長方形)
13:矢板(断面半円形) 14～15:杭(断面扇形) 16～17、19～21:丸木杭 18:大型矢板

第31図 2層杭群 主要杭 遺構実測図



※番号は第31図に対応する

※番号は第31図に対応する

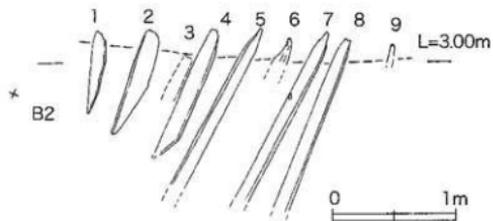
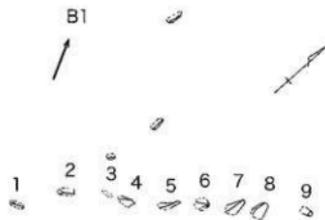
第32図 2層杭群 主要杭材実測図

③層杭群 (第33図～第34図)

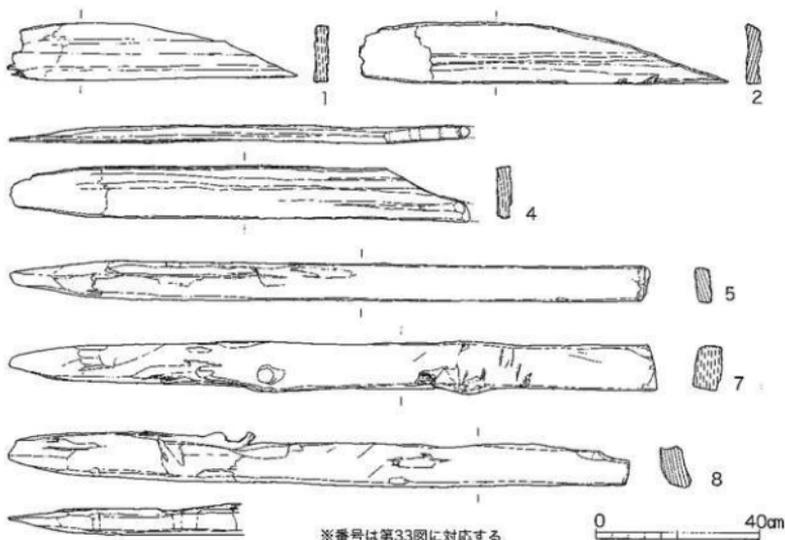
調査区北端部付近の地形落ち込み
西岸斜面において12本の杭を検出し
た。これらは落ち込み斜面の傾斜が
やや緩やかになる標高3.25m前後で
検出したもので、層位的には③層下
面付近の面から打ち込まれたものと
考えられる。

これらの杭の内、第33図1～9は
列状に並ぶように検出された。3、
6、9は非常に脆く、加工も明確で
ないものであるため、杭列として他
と一括することは適当ではないかも
しれないが、1、2、4と5、7、
8はそれぞれ加工形態も統一されて
おり、少なくともこの3本ずつの杭
は一括の遺構として捕らえられる。

加工の明確な遺構図1、2、4、5、7、8については第34図に実測図をそれぞれ図示した。



第33図 杭列2遺構実測図



※番号は第33図に対応する

第34図 杭列2杭材実測図

3. 出土遺物

出土遺物はそのほとんどが地形の落ち込み内堆積土及びそれに連続する土層からの遺物で、いずれも落ち込みの周辺から流れ込んできた遺物と推定される。遺物としては①層で須恵器、土師器、②～③層で弥生土器、各種木製品が出土している。1区の調査状況から、③'層以下にも遺物が含まれるものと推測されるが、2区の調査では確認できていない。

i) 土器

2区の出土土器には①層より奈良・平安時代の須恵器、土師器、古墳時代中～後期の土師器が、②層より弥生時代中～後期の弥生土器が、③層より弥生時代前～中期の土器が出土している。以下に土層ごとの出土土器の概略を記す。

③層出土土器 (第35図～第37図)

第35図は③層出土土器のうち、比較的古い様相を呈するものである。

1～5は壺である。1、5は口が大きく開く口縁部で、1ではわずかに拡張した端部にヘラ描文が、5では下方に拡張した端部と上面には櫛描文が施される。2～4は頸部で、2～3では断面三角形の突帯を数条めぐらす。4では頸基部に指頭圧痕文帯をめぐらす。

6～9は甕口縁部である。7～9はくの字状に屈曲する単純口縁で、胴部が張り出すタイプと推測される。9では上方にわずかに端部が拡張する。6は逆L字形を呈する口縁で、胴部があまり張り出さないタイプと推測される。端部にはヘラ描の刻目文が施され、体部にはヘラ描直線文が2条以上めぐらされていたことが確認できる。

時期については1～3、5、7～9が松本Ⅲ様式に、4が松本Ⅲ～Ⅳ様式に、6が松本Ⅰ～Ⅲ様式前後にあたるものと考えられる。

第36図～第37図は③層出土土器のうち、比較的新しい様相を呈するものである。

36-1は大形の壺である。円筒状の頸部から大きく外反する口縁を持つ。肩部には取っ手が1対取り付けられている。口縁端部は上下に拡張しており、端面には4条の凹線の上から連続的に刻目文が施されている。頸部と体部中位にも凹線文にナデ、刻目文を施すほか、肩部に櫛描列点文、直線文、ヘラ描羽状文、斜格子文を施し、装飾性に富んでいる。

37-1は小形壺の体部である。1は肩部が張る形状のもので、肩部に5条のヘラ描直線文が施される。

37-2は算盤形に近い形状の脚付小形壺もしくは口縁の内径する高坏と考えられる。4条のヘラ描直線文の上方に斜格子文が施されている。

36-2、大形の甕体部である。体部のあまり張らない形状で、制作時の調整が明瞭に残る。外面にタキの痕跡が確認される稀少な例で、タキ→ハケメ→ミガキの外面調整過程が判別できる。

37-3～8は甕である。3～6は拡張した口縁端面に凹線文を施す口縁部を持つもので、3には体

部に櫛描列点文が施される。7～8は拡張した口縁端面に凹線文を施さない口縁部を持つもので、7には体部に櫛描列点文が施されるほか、頸部内面にミガキが確認される。7、8ともに頸部に近い位置までケズリの内面調整が確認される。

37-9～11は壺・壺の底部である。11には内面に丁寧なナデ調整が確認される。

37-12～13は高杯脚部である。いずれも直線文で飾られ、13では刻日文も併用される。

37-14は器種不明品である。風化著しく調整等も不明瞭であるが、底部と推定した平坦部に格子状の痕跡が残る。

時期については、器種不明品以外はいずれも松本IV-1～2様式の範疇で捕らえられるものと考えられるが、37-7、8では頸部付近までケズリが確認でき、V-1様式に近い特徴を示している。

②層出土土器（第38図）

第38図は②層出土土器である。

1～3は③層新相の土器と同様の時期的特徴を示す資料で、1～2が壺、3が甗である。1では頸部にヘラ状工具による圧痕文帯が、2では体部中程に櫛描列点文が、3では口縁上面に4条の凹線文が施されている。

4～6は上記以外の資料である。4は甗肩部付近の破片で、連続する貝殻羽状文と貝殻もしくは櫛状工具による直線文で飾られている。5は取っ手付小形甗で、頸部付近に櫛状工具による列点文が施されている。外面はミガキ調整の後に赤色塗彩が施される。6は脚付甗等の脚部で、脚端面に明瞭な面を持つ。底部、脚端面、内面にケズリの痕跡が残り、内面以外はその上からナデ調整が施されている。

時期については1～3が松本IV-1～2様式、4～5が弥生時代後期の範疇で捕らえられるものであろう。

①層出土土器（第39図）

第39図は①層出土土器である。

1～6は土師器で、1が甗、2が小形丸底壺、3が壺口縁部である。

4～6は土師器坏である。4、6は同一個体の可能性があるもので、高台が付き外面に赤色塗彩が施される。

7は須恵器高杯の脚部片である。須恵器にはここに図示した1片のほか、甗体部小片が1片出土している。

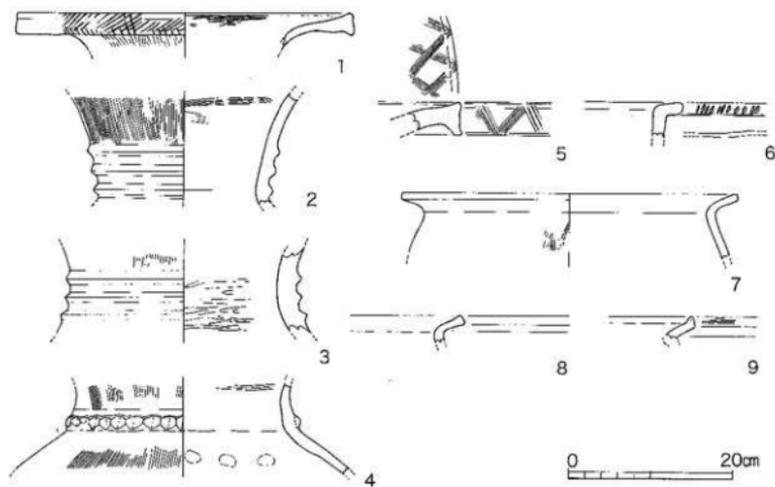
時期については1～3が古墳時代中期～後期、4～7が奈良～平安時代のものと考えられる。

出土状況と土層堆積時期

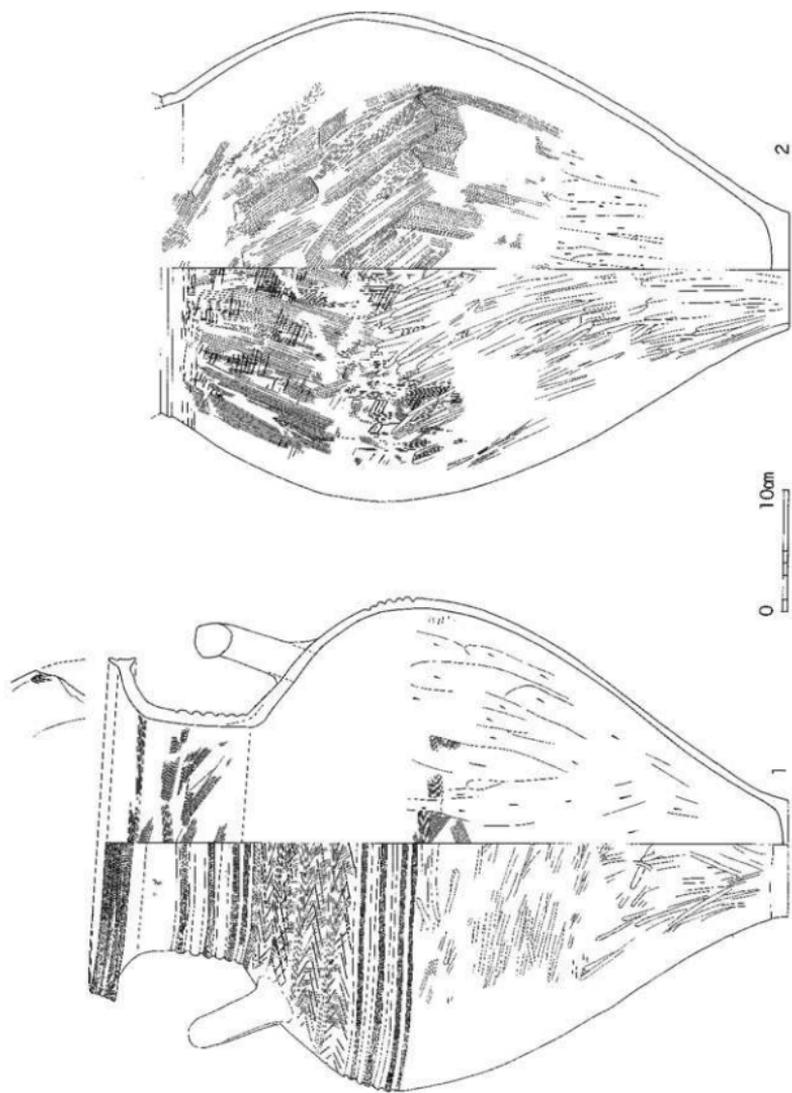
堆積土内出土土器は基本的に流れ込みの資料であるため、土層堆積時期より古い資料も混在しているものと考えられる。③層では、出土遺物は弥生時代前期、中期中葉～後葉の時期の資料が確認されるが、弥生時代中期後葉の資料は③層下面に近い層位からも確認されているほか、前期の資料は小片

1片のみである。②層においても遺物の時期と層位は必ずしも一致しておらず、弥生時代後期の資料が中期の資料と同様の出土状況で出土している。①層については比較的安定しているようで、今回の調査で出土した最も新しい時期の遺物である奈良～平安時代の土器は①層上面付近でのみ確認され、弥生時代以前からの資料も混入していない。

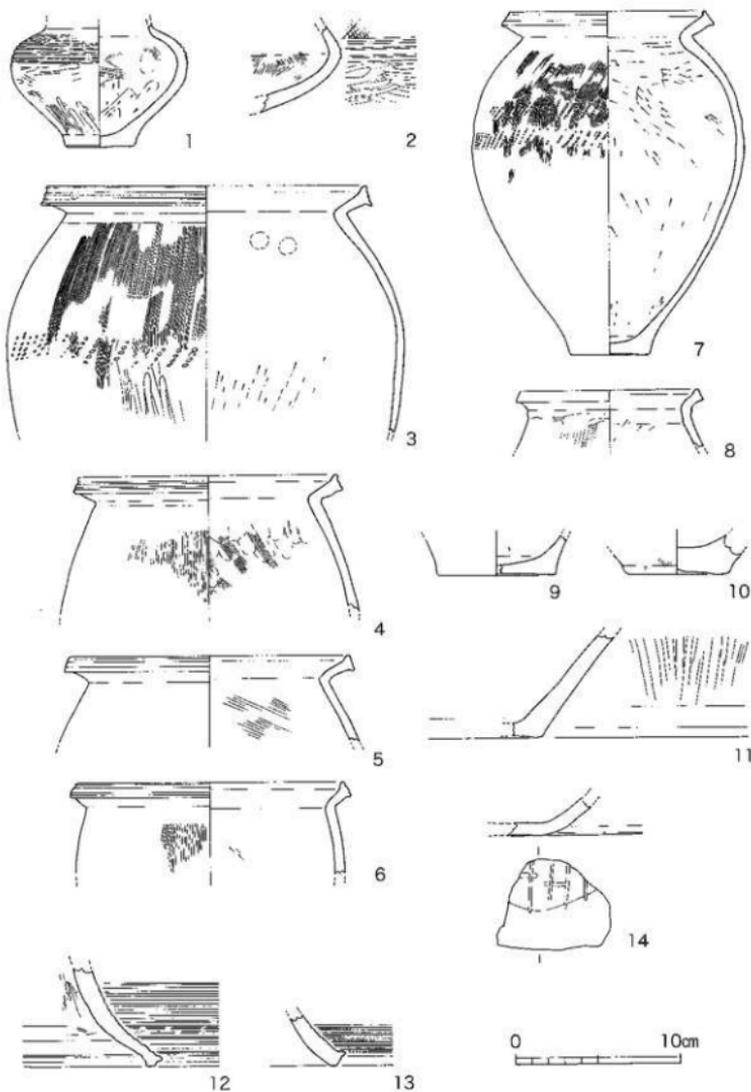
以上のような出土状況と1区、2区の出土土器の特徴から、土層の堆積時期は③層が弥生時代中期中葉～後期初頭、②層が弥生時代後期①層が古墳時代中期～平安時代頃を中心とする時期と考えられよう。③'層以下では遺物を確認していないが、1区の調査状況から弥生時代中期以前の遺物を包含する可能性が考えられる。



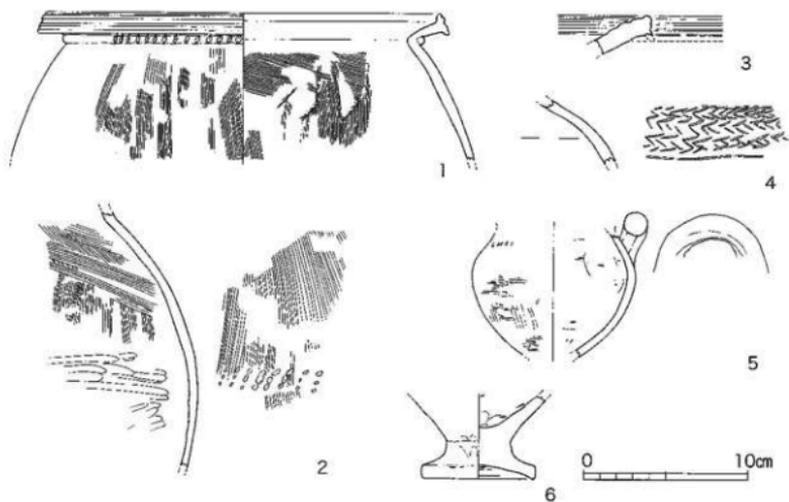
第35図 2区3層 出土土器実測図一



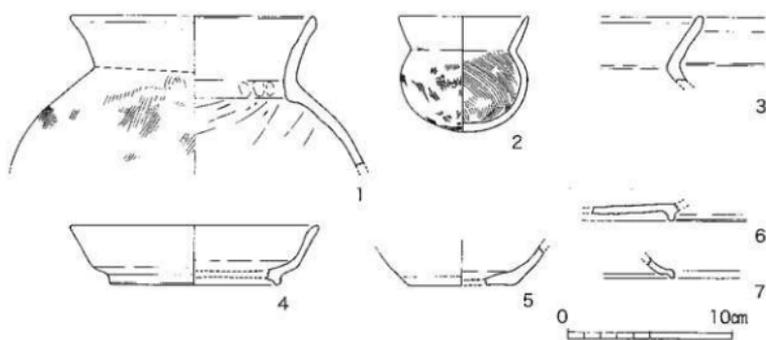
第36图 2区3層 出土土器実測图-2



第37图 2区3层 出土土器实测图-3



第38图 2区2层 出土器类测图



第39图 2区1层 出土器类测图

ii) 木製品

2区の出土木製品は、②～③層より弥生時代中期～後期の容器類、農具、工具、建築部材、その他雑具、部材、杭材など多種多様な用具が確認された。加工痕のあるものとして現場から取り上げて持ち帰った木製品は約500点に登り、その内約200点を保存を要するものとして選別して保管している。以下に報告する木製品は保管している木製品の内、用途の判別できるもの、形状に特徴のあるものを選別したものである。また、杭材等については代表的なものを数例づつ報告するのみにとどめることとする。

以下に、便宜上用途ごとの木製品資料の概略を示す。

<容器類ほか> (第41図)

第41図1は脚付合子の身である。木の葉状平面形を呈し、口縁端部2カ所に紐孔突起が確認される。脚部は欠損しているが、方形スカシを連続して施す円脚であることが破面から推定できる。補修痕が1カ所確認されるほか、外面に赤色塗彩が施されている。

第41図2、3は筒状の木製品である。2では方形の孔が、3では端部の肥厚が確認される。桶等の可能性が考えられる。

第41図4は柄付盤もしくは漁撈具のアカ取り（舟底に溜まる水の汲み取り具）である。身の部分の形態が盤状であれば前者に、塵取り状であれば後者に分類されるが、残存部からは原形が断定できない。

第41図5、6は杓子、匙である。5では柄に逆三角形のスカシが施され、身の底と口縁は外面の浅い沈線でごく区切られている。身の内面と外面底部、柄の前面に赤色塗彩が確認されるが、柄については塗彩範囲が明瞭でない。6には塗りが施されている。

第41図7は筒形容器で、1区で報告したもの（第15図-1）と同様のものである。1区出土のものに比べ小形であるほか、紐による接合部と推定される3カ所に帯状の溝が彫り込まれている。

第41図8はコップ形容器の底部と推定される。

第41図9は組み合わせ箱の破片と推定される。組み合わせの溝部分には木釘を打ち込んで補強した跡が残る。

<農具> (第42図1)

第42図1は傘の付いた曲柄平鋏で、三角形のスカシを持つものである。

<工具> (第42図2)

第42図2は袋状鉄斧の柄である。斧身装着部は欠損しているが、膝柄縦斧の形態であることが判別できる。また、握り部のやや斧台部より溝状の窪みが1周確認されるが、何の痕跡であるかは不明である。

<運搬具ほか> (第42図4～6)

第42図4、5は天秤棒状の木製品である。1区で報告したもの（第18図-3～5）に類似した形状であるが、端部以外にも切り込みが見られ、実際には他の用途に使用されたものと推定される。

第42図6は大形の天秤棒である。両端に紐かけ用の切れ込みを1周入れている。肩担部は原木のね

じれが大きくいびつに曲がっている。

<雑具ほか> (第42図3、第43図～第47図4)

2区において雑具ほかとして分類したものには、その他用具、各種部材、部材残片などがある。1区同様用途が特定できないものがほとんどであるため、ここでは主要な資料についてのみ簡略に説明を加えるにとどめる。

第42図3は楕状の形を呈するの木製品である。

第43図1、2は組み合わせ用の板材である。組み合わせ部と想定される凹加工や段などが確認される。

第43図4、5は後述する建築部材柱の端部に類似したものであるが、欠損箇所が多く正確な形状は判別し難い。

第44図5は連続した穿孔が施される細長い板材で、枠形田下駄枠材等の可能性が考えられるが、断定できない。

第47図1～3は端部を薄く加工した棒状部材である。端部を他部材に差し込んで使用した組み合わせ材と推定した。

<建築材> (第47図5～第49図)

ここでは、1区と同様に建築材と必ずしも断定できないものを含め、大形構造物の部材を建築材として推定した。

第47図5、6は端部に凸加工を施した棒材、角材である。6は凸部を下に向けて突き刺さった状態で出土している。

第48図は柱材と推定したものである。ただし、5は他に比べて小形であり、他の用途に使用された可能性が高い。1、2は角材状に加工され、頭部周辺に精巧な組み合わせ加工が見られることが特徴的である。また、2はくびれ部のある頭部を下に向けて突き刺さった状態で出土している。

第49図1、2は梯子である。

第49図3、4はその他の組み合わせ部材である。

<用途不明品> (第50図)

第50図は用途の判別、推定ができなかったもので、特徴的な形態を持つものである。詳細は不明であるので、特筆事項のみを述べるにとどめる。

第50図1、2は杓子形木器状の製品で、1では方形の孔が、2では刺し縫い状の小孔が穿たれたものである。叩き板未成品等の可能性が考えられる。

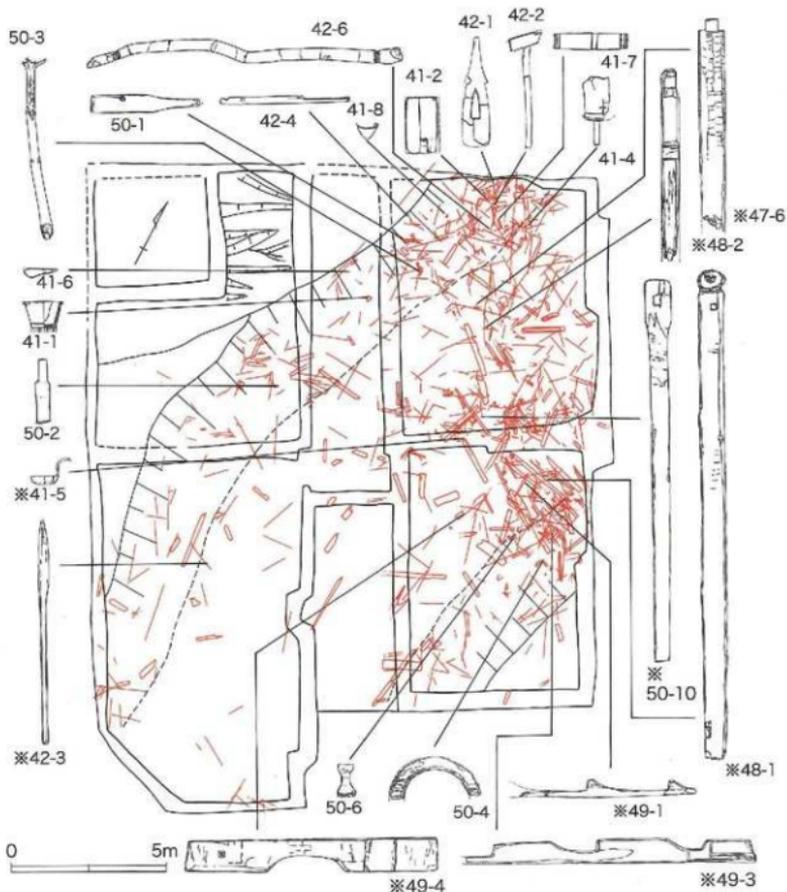
第50図5、6はちきり形の木器で、やや大きめにした一端を刃部状に加工している。両者はサイズ、形状に若干の差異が見られるが、出土地点もほぼ同位置であり、セットで使用されていたものである可能性が高い。

第50図10は、大形の構造材であり、建築材の床板支え材である可能性も考えられる。

<杭材、矢板材ほか>

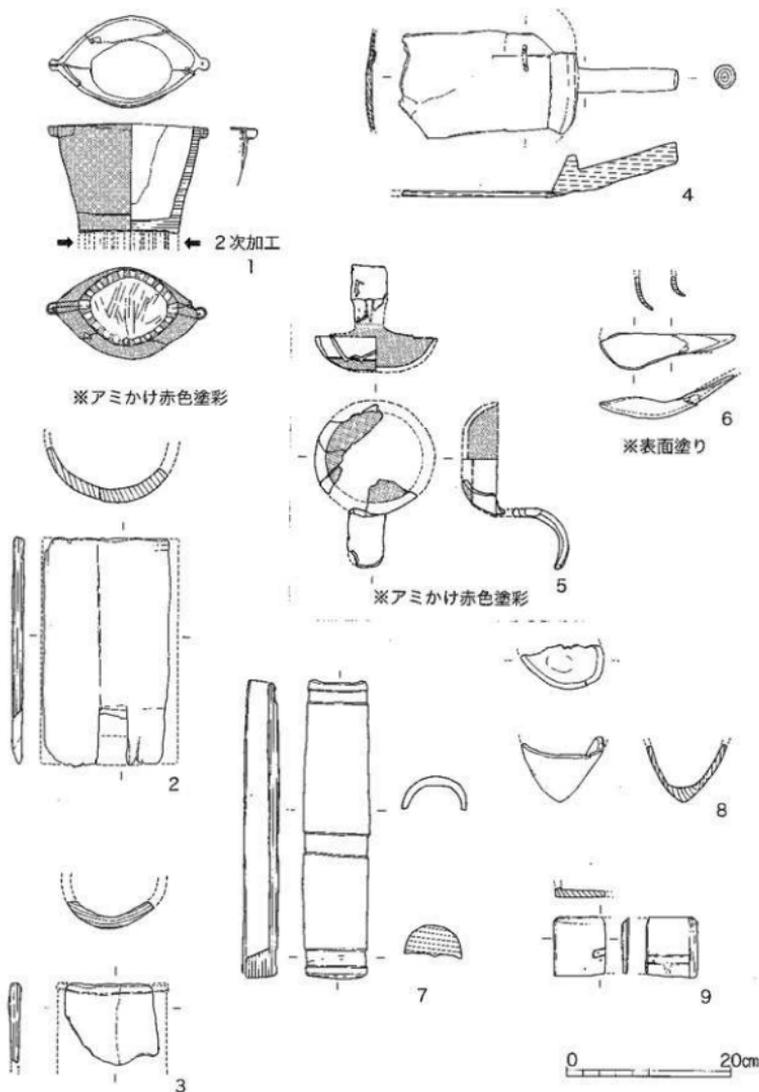
ここでは、代表的かつ確実な資料である遺構第32・34図掲載資料によって報告に代える。

木製品の時期については、土層時期に照らし合わせると、②層出土木製品が弥生時代後期、③層出土木製品が弥生時代中期中葉～後期初頭ということになる。但し、②層出土木製品の内、小片については下層からの混入品が存在する可能性を考慮する必要がある。



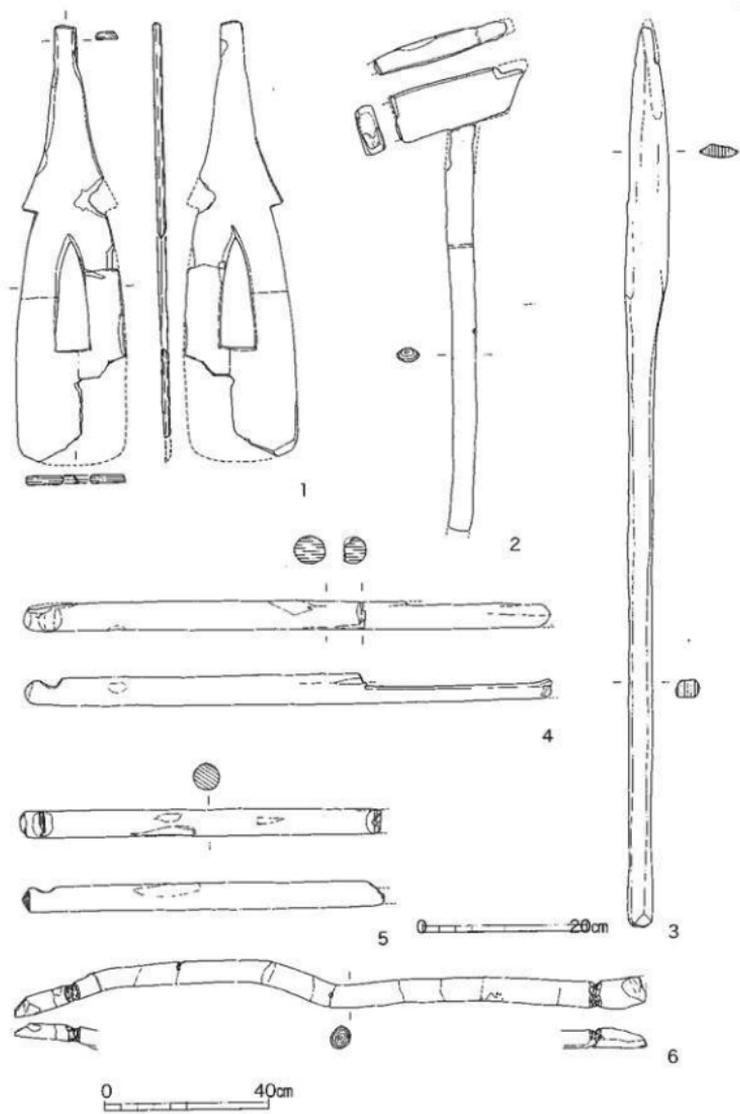
※印は、2層出土遺物(但し、41-5は2~3層)、他は全て3層出土

第40図 2区 木製品出土状況図

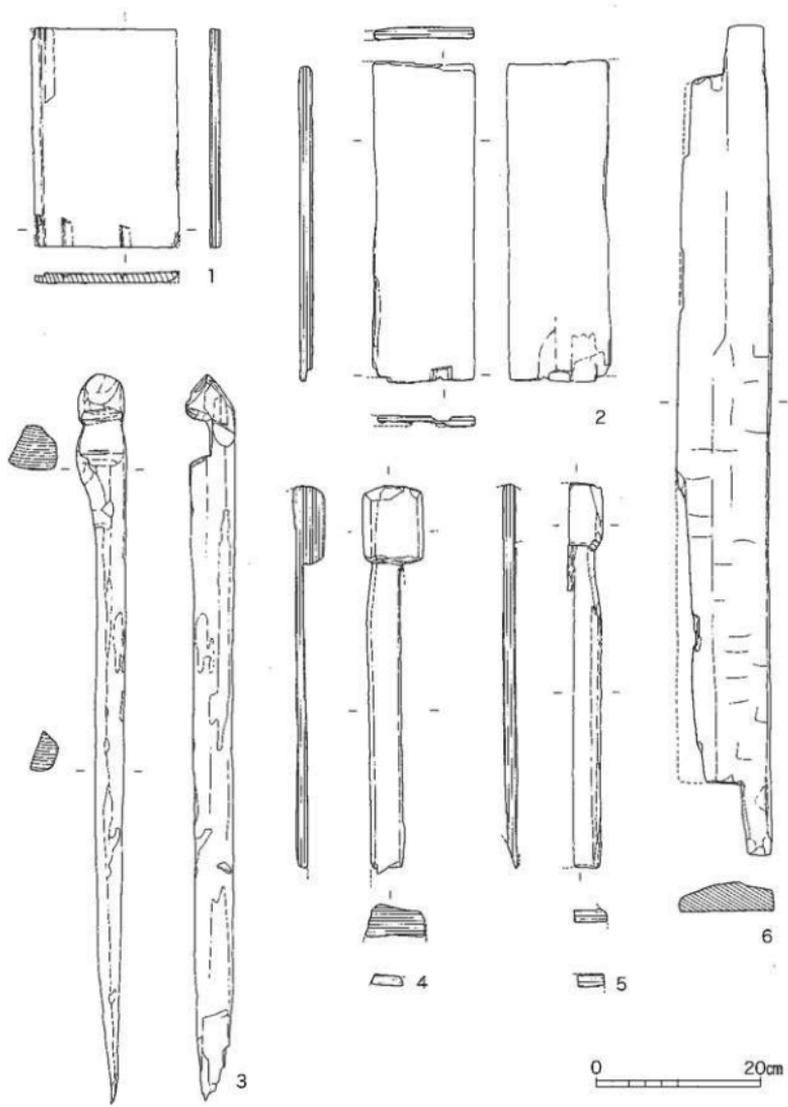


第41図 2区 出土木製品実測図-1

(5-2~3層 1~4・6~9-層 S=1/6)

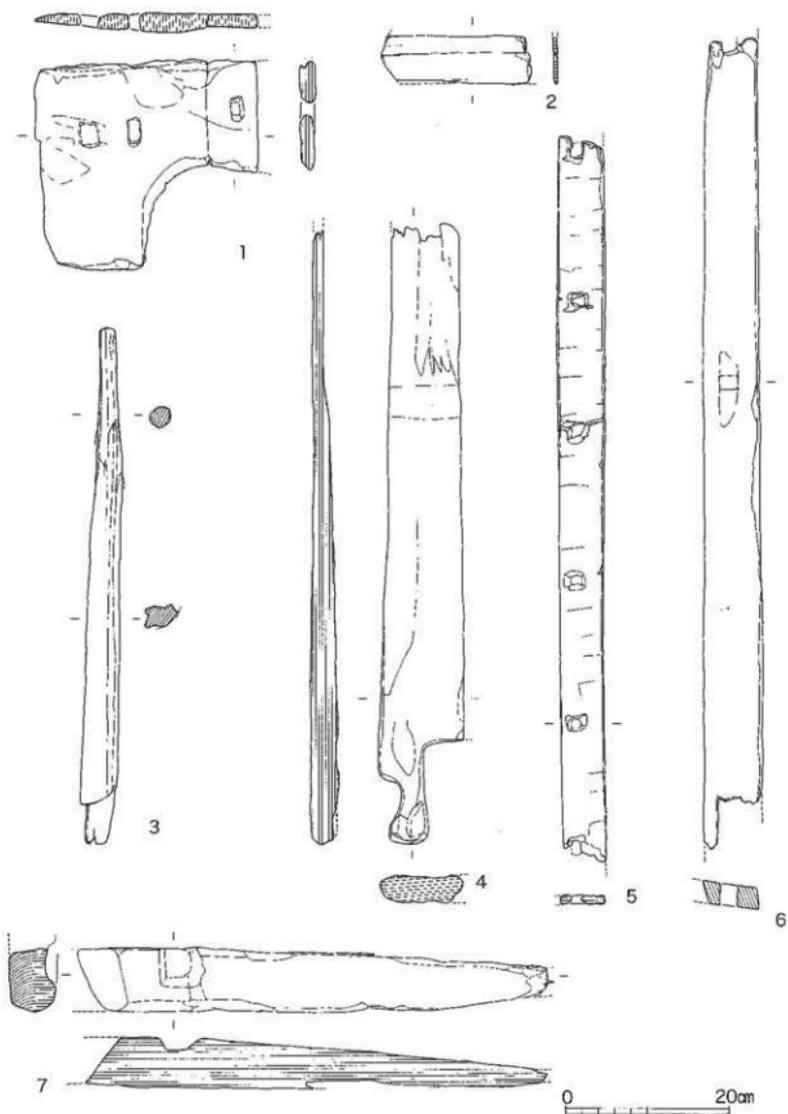


第42图 2区 出土木製品実測図-2 (3·5層 1·2·4·6-層 1~5 S=1/6 6 S=1/12)



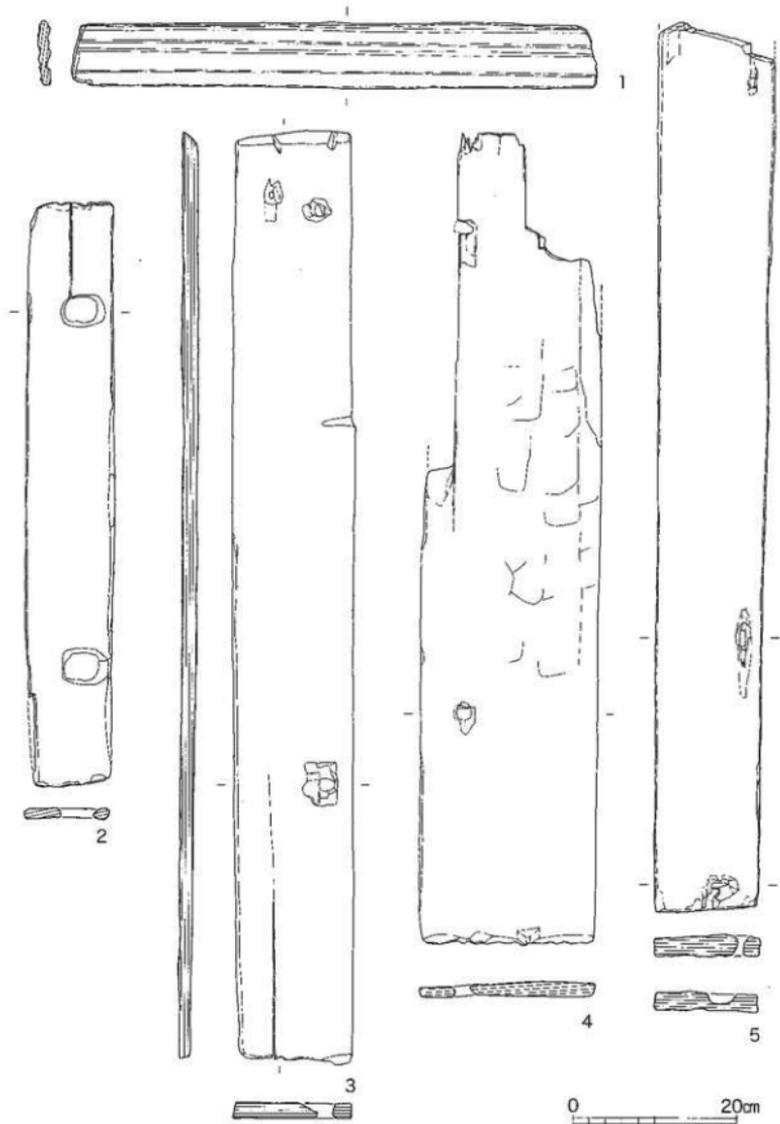
第43图 2区 出土木製品実測図-3

(1·6-2層 2~5-3層 S=1/6)

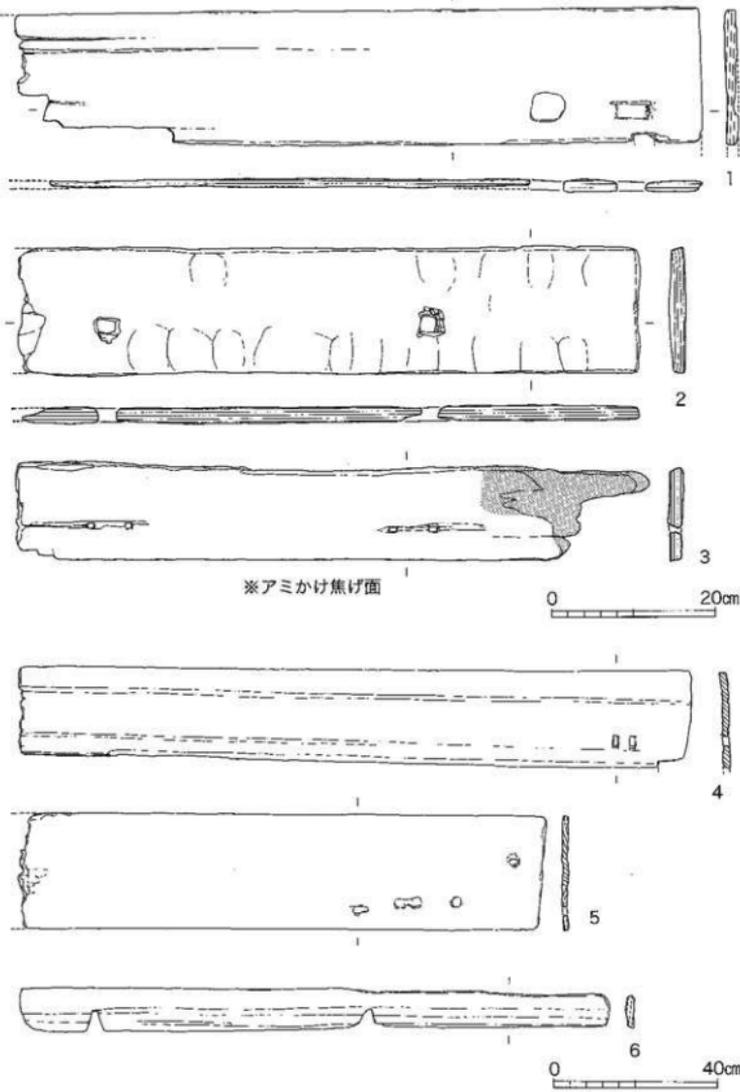


第44图 2区 出土木製品実測図-4

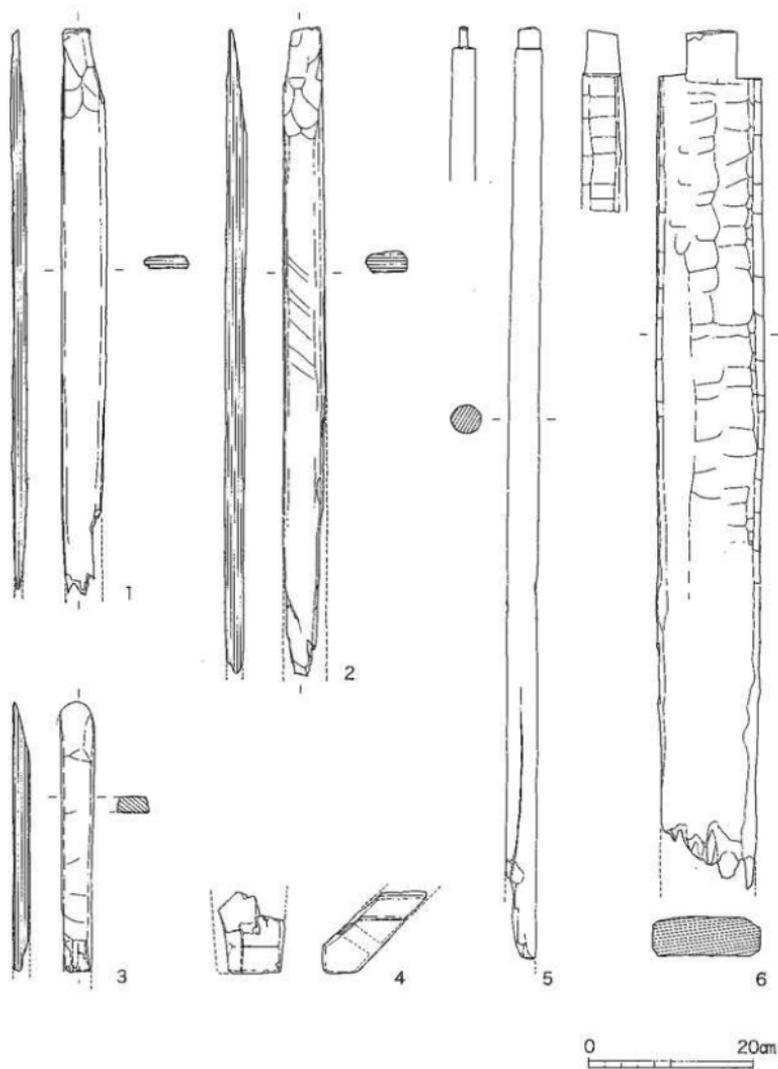
(6-2層 1~5·7-3層 S=1/6)



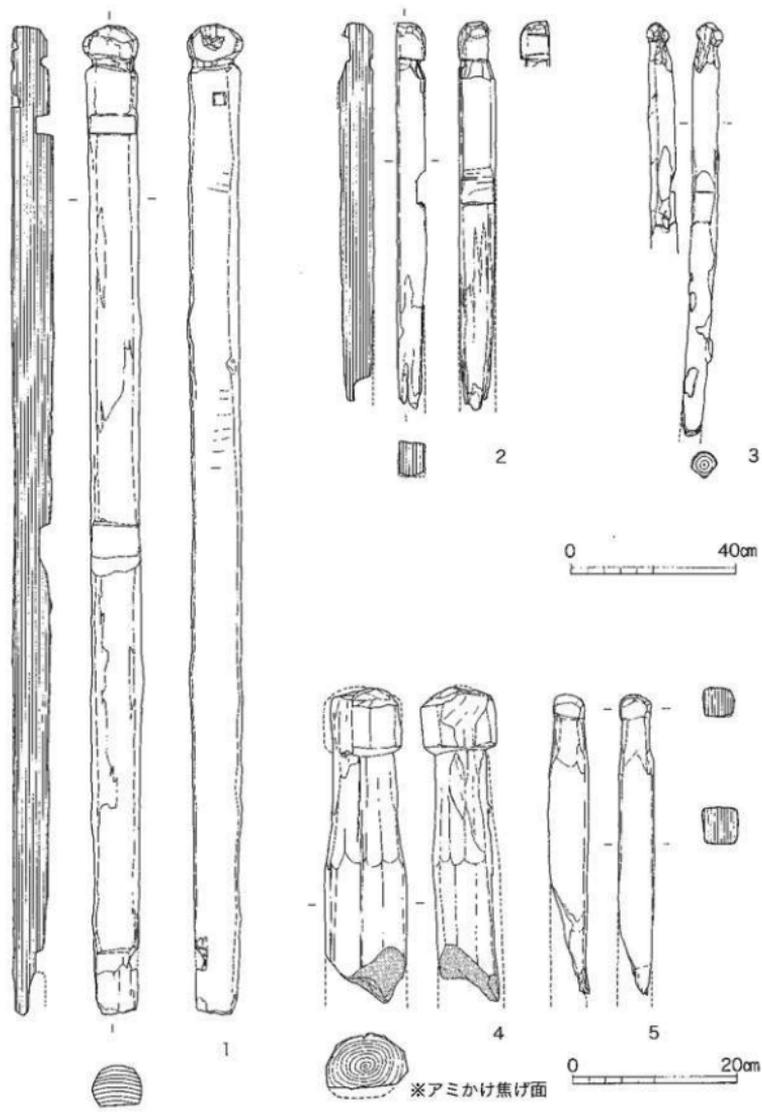
第45図 2区 出土木製品実測図-5 (2-2層 1・3~5-3層 S=1/6)



第46図 2区 出土木製品土器実測図-6
 (1・4・6-2層 2・3・5-3層 1~3 S=1/6 4~6 S=1/12)

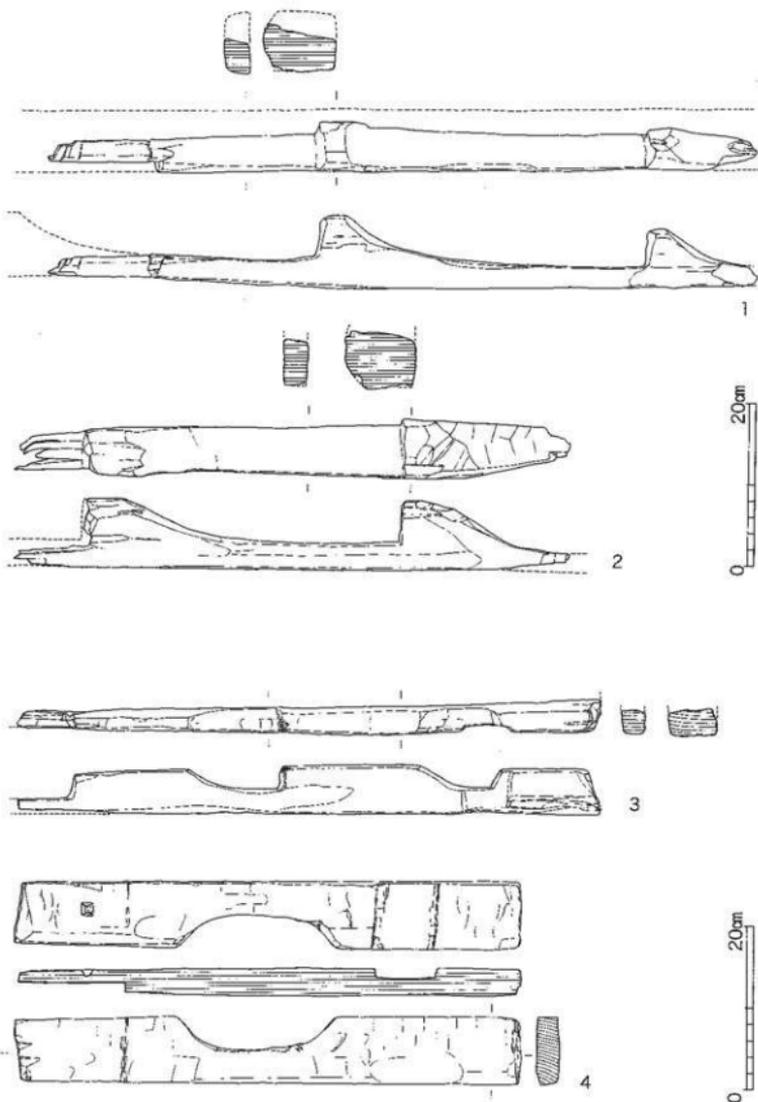


第47图 2区 出土木製品実測図-7 (5·6-2層 1~43層 S=1/6)

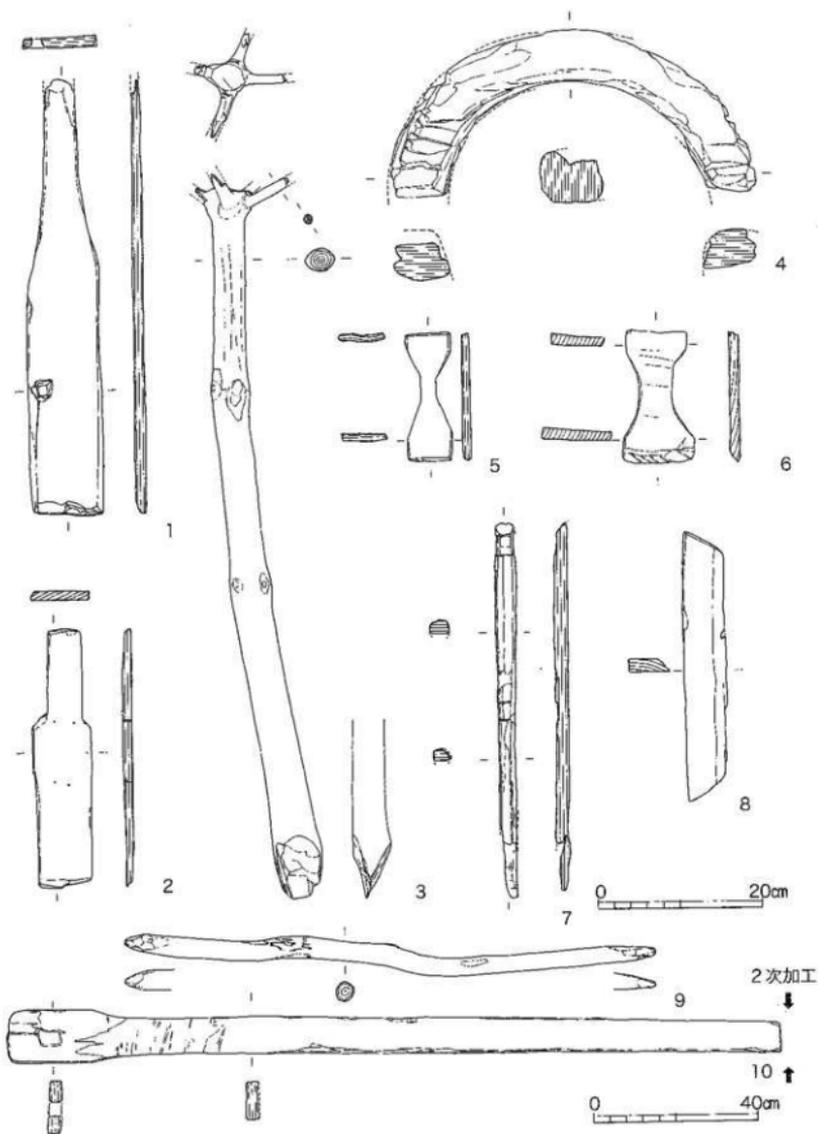


第48図 2区 出土木製品実測図-8

(1・2・5-2層 3-2~3層 4-3層 1~3 S=1/12 4・5 S=1/6)



第49图 2区 出土木製品実測図-9 (2層 1·2 S=1/6 3·4 S=1/12)



第50图 2区 出土木製品実測図-10

(7·8-2層 1~6·9·10-3層 1~8 S=1/6 9·10 S=1/12)

第4章 まとめ

海上遺跡は出雲市民病院移転建設計画に伴って平成11年に発見された遺物散布地である。

今回の発掘調査によって、旧河道の可能性のある地形落ち込み埋没層に木製資料をはじめとする大量の弥生時代遺物が流入した遺跡であることが判明した。当時の生活面が削平されており住居跡等の遺構は全く確認できなかったが、弥生時代中期のものとして推定される杭列が2箇所、弥生時代後期頃のものとして推定される杭・矢板群が1群、地形の落ち込み内より検出されている。また、特筆すべきは出土遺物の木製品で、保存状態の良い資料が種類・量ともに豊富に出土している。

以下に今回の調査で得た以上のような成果を若干の知見を踏まえてまとめることで考察にかえたい。

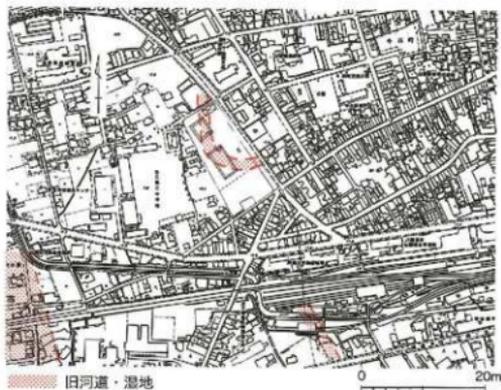
(1) 地形の落ち込みについて

今回の発掘調査は1区と2区とに分断して行われたものであったが、その両調査区にまたがって屈曲した形状で地形の落ち込みが検出された。これは旧自然河道の可能性のあるもので、幅は狭い部位で約13m、広い部位で約18mを測り、深さは少なくとも1.5m以上あったと考えられる。

ただし、作業の安全性の問題から底面まで確認することができなかったこと、同様の理由から一部分的に堆積していた初期埋没土を掘り残す必要があったことから、計測及び図示した形状・数値は弥生時代中期中葉以前の時期の地形である。

また、地形落ち込み内の水流は弥生時代中期中葉にはすでにその流れが確認できず、当時は沼地に近い状態であったと推定される。また、遺構や土層の状況から、弥生時代後期には完全に湿地化したものと考えられよう。本遺跡から出土した遺物群はこういった地形の時期に近隣の生活空間から流入したものと考えられる。

近隣地域における過去の調査においても天神遺跡¹⁾、善行寺遺跡²⁾で縄文時代晩期以前の旧河道等の可能性を持つ地形落ち込みが確認されており、埋没土中にそれぞれ天神遺跡粘土層で弥生時代中期、善行寺遺跡砂層で縄文時代晩期の遺物が出土する。これらの落ち込みは必ずしも1つにつながるものではない。おそらく縄文時代以前においては河川または沼等の地形が当該地近隣に数多く存在したのであろう。その後弥生



第51図 海上遺跡近隣の地形状況図

時代後期までにはその多くが湿地化していったものと考えられる。また、近隣の藤ヶ森遺跡でも中世以前の地形の落ち込みが確認されているが、極めて部分的な調査であり不明確な点が多いため、ここでは特には触れないこととする。

(2) 出土土器と地形落ち込み内埋没土堆積時期について

地形落ち込み内より出土した土器資料は、松本^①I-3 様式前後（弥生前期後半）、Ⅲ様式～草田^②5 期（弥生中期～後期）、松山^③Ⅱ期以降（古墳中期～後期）、奈良～平安時代の時期の範疇でとらえられるもので、中でも松本Ⅳ様式の資料がその大部分を占めている。

各堆積土層における土器資料の時期については、いずれも土層時期より古い資料が混入しているものと考えられ、必ずしもきれいには時期が分らない。

以下に堆積上を上層から地形埋没後堆積層である①層、木製品出土層上層である②層、木製品出土層下層である③層、初期埋没土（弥生時代中期地形形成土）である④層に分け、出土土器の時期と堆積時期を整理して表にして示す。

土 層	土層堆積時期	出土土器の時期	備 考
①層 埋没後堆積層	古墳時代～ (概 観)	古墳時代中期～後期、奈良～平安時代	出土量僅少。正確な堆積開始時期は不明。 遺構なし。
②層 木製品上層	弥生時代後期	弥生時代中期後葉～弥生時代後期 (松本Ⅳ～草田5)	弥生時代後期前葉の資料が多い。他時期 の資料は僅少であるため正確な堆積終了 時期は不明。落ち込み中央部に多数の杭 群あり。有機物多量に混入。
③層 木製品下層	弥生時代 中期中葉～ 後期初頭	弥生時代前期末、中期中葉～後期初頭 (松本Ⅰ-4 前後、松本Ⅲ～Ⅴ-1)	弥生時代中期後葉の資料中心。前期の資 料は小片1 片のみ。 落ち込み内に杭列少数あり。
④層 初期堆積層	弥生時代 前期後半前後 (概 観)	弥生時代前期後半 (松本Ⅰ-3 前後)	部分的調査のため、正確な堆積開始・終 了時期不明。 遺構不明。

土 層 堆 積 時 期 一 覧 表

表のような状況から、初期の堆積は前期後半には一部が始まっており、後期までには全体的な湿地化が進んでいた状況が想定される。弥生時代が終わる頃には落ち込みの地形はほぼ完全に埋没し、西岸の肩が若干地形の名残を留める程度となっている。

遺跡の中心時期は弥生時代中期後葉～後期前葉であり、地形落ち込み内が沼地もしくは湿地状に安定していた時期にあたると考えられよう。これらの遺物はそのほとんどが他所からの流入遺物と考えられるものであるが、当該時期に相当量の人々が居住した生活空間が隣接地に存在したことは確実であり、その生活空間の初現は少なくとも弥生時代前期まで遡るものと考えられる。

また、単独の土器資料としても36-1の装飾性に富んだ把手付大形壺、36-2のタタキ目を明瞭に残す甕などは資料的価値の高いものとして注目される。

(3) 出土木製品について

弥生時代の木製品については、これまで島根県内では松江市の西川津遺跡、タテチョウ遺跡、上小紋遺跡、出雲市の姫原西遺跡、天神遺跡などが知られているが、特に出雲平野の遺跡から出土する木製品資料¹⁾は出土土層の年代が押さえられているものが多く、貴重な資料となっている(第56図)。

今回の発掘調査で海上遺跡から出土した木製品資料も出土土層年代をある程度押さえることが可能である。中でもこれまで出雲平野で資料数の少なかった弥生時代中期の木製品資料や弥生時代中期～後期の建築部材等の発見は大きな成果と言える。

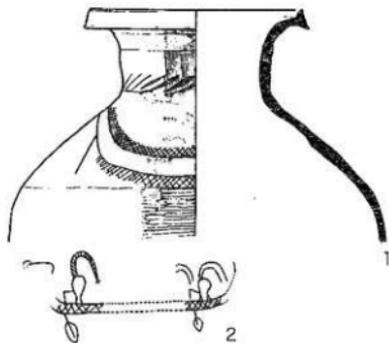
海上遺跡出土木製品²⁾は、前項一覽表のとおり地形落ち込み中の②層と③層より出土している。各層の堆積時期は分かれるが、土器の出土状況と同様に、土層時期より古い資料がある程度混入しているものと考えられる。しかしながら、弥生時代木製品資料の細かい編年は現段階では確立されておらず、遺物資料から混入品を見分けることは非常に困難である。②層出土木製品を弥生時代中期後葉～後期、③層出土木製品を弥生時代中期中葉～後期初頭の資料として、ある程度併行期間を持たせてとらえたほうがより実態に即しているかもしれない。

第55図には各土層と主要出土木製品の対応図を示した。対応図中の時期は土層堆積時期を示したものであり、混入品の存在に伴う時期幅は考慮していない。第56図の出雲平野の主要木製品時期対応図についても同様である。

海上遺跡出土の木製品中には、いくつか特筆すべき事項を持つ資料が存在しており、以下にその概略を簡潔に述べる。

14-4の舟形容器は、船首、船尾ともに強く反り返ったゴンドラ形を呈するもので、岡山県倉敷市城遺跡³⁾や鳥取県淀江町稲吉出土⁴⁾の絵画土器に描かれたものに類似している(第52図)。いずれの土器も舟形容器と同じ弥生時代中期の資料であることも興味深い。容器としての実用性を備えているが、祭祀用具としての用途も考慮すべきであろう。また、非常に類似した形状の舟形容器小型品が鳥取県青谷上寺地遺跡⁵⁾からも出土している。

15-2、3は出土状況、漆の同一性等から同一個体の横杓子柄と推定したものである。これは杓子の柄の部分リング状に削り出したものと考えられ、兵庫県玉津田中遺跡⁶⁾、奈良県唐子鍵遺跡⁷⁾などに類例が見られる(第53図1)。これは弥生時代中期の近畿地方に特徴的



1:倉敷市城遺跡(文献⑧より転載)
2:淀江町稲吉(文献⑨より転載)

第52図 弥生時代中期の絵画舟

な制作技法、形態とする見解¹⁹もあり、弥生時代の技術交流を考える上での資料ともなり得る。

41-1は木の葉形平面形を呈する脚付合子、15-1、41-7は筒形容器である。類例の少ないものであるが、近年の鳥取県青谷上寺地遺跡の調査²⁰において脚付合子、筒形容器ともに類似した形態のものが蓋と身のセットで出土しており（第53図2、3）、その全形が推定できる。青谷上寺地遺跡においてこれらの遺物が出土した土層時期は弥生時代前期後葉～中期と報告されている。

また、今回の調査では柱材、梯子、破風板²¹など、建築部材と推定される木製資料が数多く発見されており、弥生時代の建築構造を解明する上での手がかりとなる良好な資料が得られた。しかしながら、同一家屋資料としての一括性に乏しいため、各部材が建築構造のどの部分に当たるかという個別の細かい検討は今回ほとんど行っていない。概観としては、弥生時代中期の部材には丸太材が多く継手・仕口構造は少ないようで、後期の部材には角材が多く継手・仕口構造も多いようである。これが出雲平野における技術的な画期を示すものか、単に発見された建築物の種類の違いによるものかは断定できないが、私見では前者の可能性が高いと考えている。

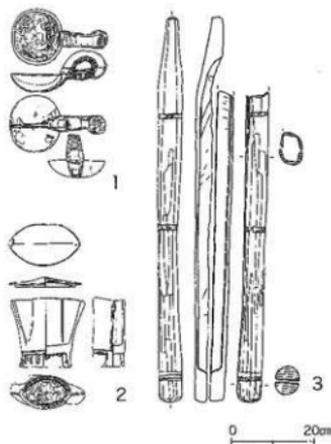
〔4〕 土器制作関連出土資料について

出土した土器・木製品の中には、土器製作関連資料もしくはその可能性のある資料が数点確認されている（第54図）。

①は、第50図-2で用途不明品の木製品として報告した資料の外形・断面ラインである。当該資料は側面の加工を割り放しで留める粗雑なものであり、未製品と推定した。本材の形状より造り出される製品としては、土器製作に使用する叩き板等が想定され、唐子鍵遺跡第48次調査出土の叩き板完成品²²等に類似する形状となるものではないだろうか。

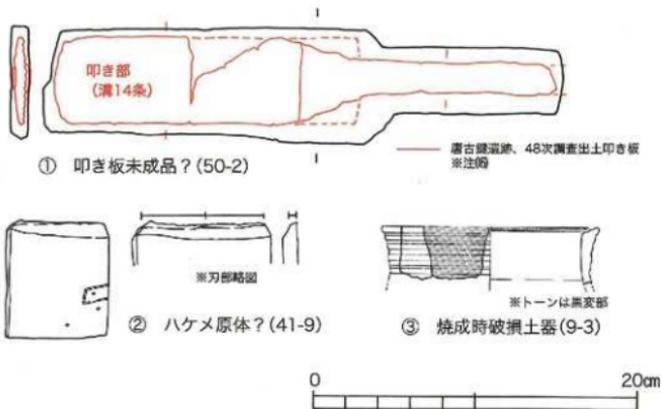
②は第41図-9で木製組合式箱の破片と報告したもので、擦具として再利用した痕跡がうかがえる。破損部分を外面にあたる側から削って刃部を造り出しており、その先端部はすり減って微妙な凹凸がある。擦痕は刃線に対して直交した動きによるものが2面観察できる。可能性として土器成形に用いるハケメ原体²³としての再利用を想定しておく。

③は第9図-3で報告した土器資料で、その破片接合状況等から焼成時破損土器²⁴と考えられる資料である。全面黒変した破片と全面普通の焼成の資料が接合している。焼成時に破損して色調が全く異なってしまう資料が接合したものと考えられ、これは単に偶発的に遠方から流れ込んだ資料ではなく、調査区の近隣で土器焼成作業が行われていた証拠となる資料と考えて良いであろう。



1:玉津田中遺跡(文献¹⁷より転載)
2~3:清谷上寺地遺跡(文献²⁰より転載、一部改変)

第53図 出土木製品の類例



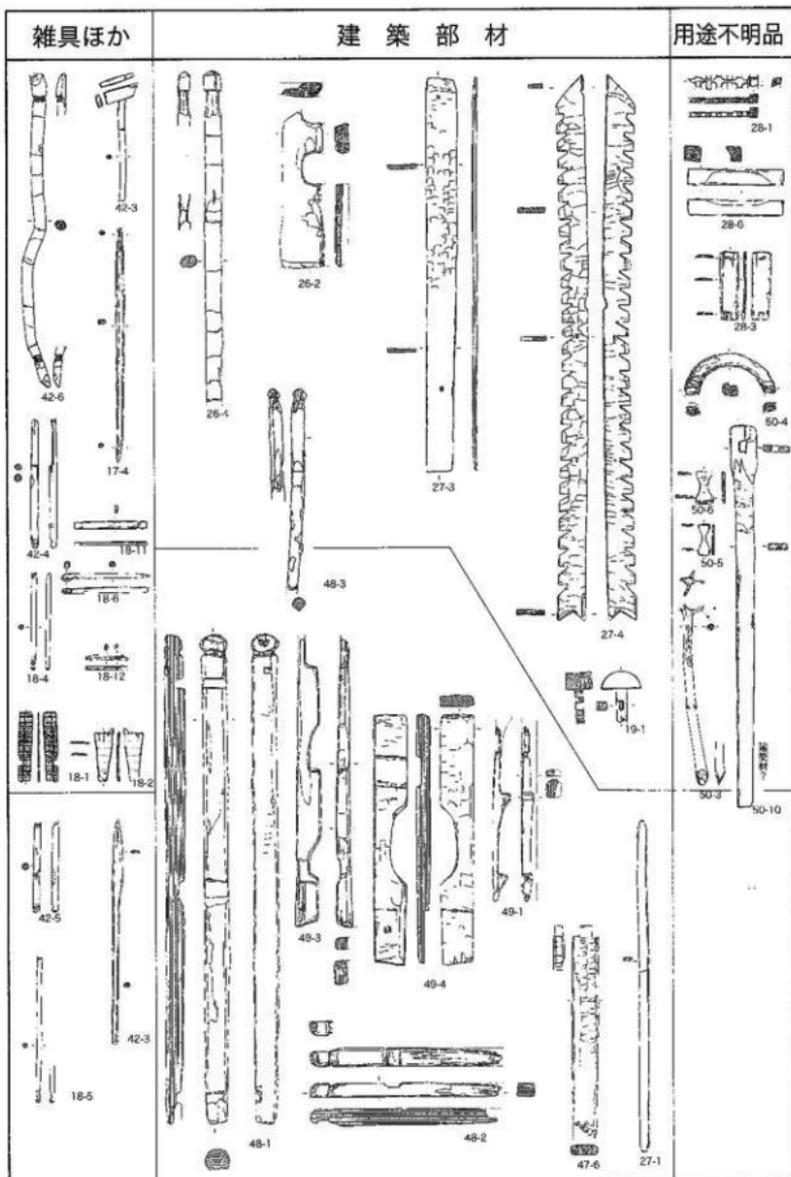
第54図 海上遺跡土器制作関連遺物

土器制作関連資料として積極的根拠を持つものは③の焼成時破損土器のみであり、①と②については推定の域を出ないが、用具としてのセット関係が成立する事から、想定したような土器制作関連資料である可能性は高いと考えている。

以上、今回の調査で知り得た情報の要点について列挙した。限られた期間の中で十分な検討・報告ができたとは言いが、実測図等については可能な限りのものを掲載した。今後の各方面における研究資料として活用していただければ幸いである。

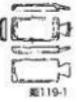
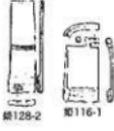
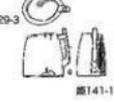
註釈・参考文献

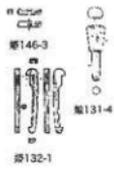
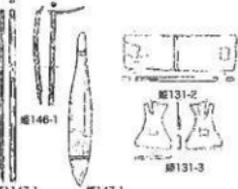
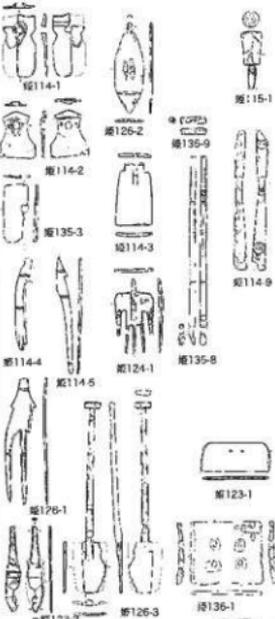
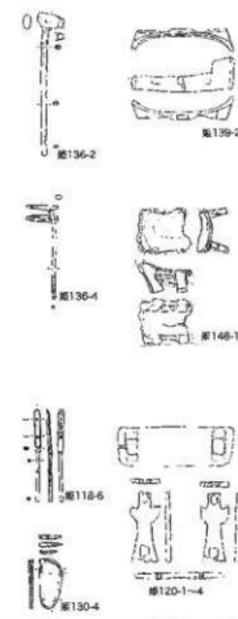
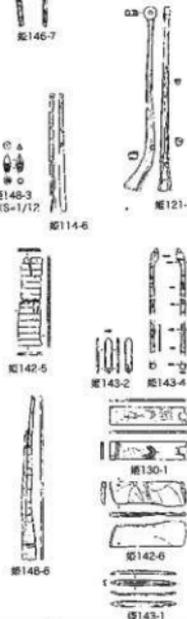
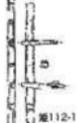
- (1) 『出雲市駅付近連立立体交差事業地内 天神遺跡第7次発掘調査報告書』 出雲市教育委員会ほか 1997年
『市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 天神遺跡(第10次調査)』 出雲市教育委員会ほか 2002年
- (2) 「善行寺遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第7集』1997年
- (3) 正岡睦夫・松本岩雄『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992年
- (4) 『講武地区県営園場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会 1992年
- (5) 松山智弘「出雲における古墳時代前期前半の土器の様相—大東式の再検討—」『島根考古学会誌 第8集』 島根考古学会 1991年
- (6) 『姫原西遺跡 一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』 島根県教委ほか 1999年
- (7) 木製品の器種や名称、分類については基本的に『『木器集成図録 近畿原始編』 奈良国立文化財研究所 1993年』によったが、必要に応じて雑具として大きな範囲でまとめたほか、その他の名称も使用した。
- (8) 伊藤晃「岡山県山上の弥生時代絵画出土資料」『考古学雑誌 第66巻第1号』 日本考古学会 1980年
- (9) 佐々木謙「鳥取県淀江町出土弥生式土器の原始絵画」『考古学雑誌 第67巻第1号』 日本考古学会 1981年
- 00 湯村功氏(鳥取県埋蔵文化財センター)教示
- 01 『神戸市西区玉津田中遺跡—田中特定上地区両整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』 兵庫県教育委員会 1996年
- 02 『田原本町埋蔵文化財調査概要7—昭和61年度唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報—』 田原本町教育委員会 1987年
- 03 上原眞人「木製容器の各期と種類」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製容器』 埋蔵文化財研究会ほか 1996年
- 04 『鳥取県教育文化財調査報告書72 青谷上寺地遺跡3』 鳥取県教育文化財団 2001年
- 05 破風板の可能性については、浅川滋男氏(現鳥取環境大学教授)の「見解としてご教授いただいた。
- 06 唐古鍵遺跡48次調査川上の叩き板については、深澤芳樹氏(奈良国立文化財研究所)よりご教授いただき、藤田三郎氏(田原本町教育委員会)のご厚意により外形図を掲載させていただいた。なお、当該資料の復元線等は原因のコピーと深澤氏の観察見解を参考にさせていただいた。深澤氏の観察によれば、柄の基部は製作当初直角に近い角度で叩き部に接続していた可能性が高いとのことである。
- 07 ハケメ原体の可能性については、田崎博之氏(愛媛大学法文学部教授)にご教示いただいた。
- 08 田崎博之ほか「遺跡山上の焼成粘土塊・焼成剥離土器片から見た弥生土器の生産・供給形態」『平成9～11年度科学研究費補助金<基礎研究(C)>(2)>研究成果報告書』 愛媛大学 2000年



第56図 出雲平野の主要出土木製品土層対応図

(S = 1/24)

	容器類ほか	食器具
天神黒色粘土層 (弥生中期後半)	 天V84-6	 天V84-5
姫原西下層 (弥生後期前半)	 姫147-3  姫145-6  姫145-1  姫131-7  姫131-6  姫145-2	 姫147-4
姫原西中層(弥生後期後半前後)	 姫140-3  姫141-5  姫116-5  姫123-3  姫142-1  姫117-10  姫119-1  姫140-4  姫140-2  姫117-2  姫129-4  姫128-2  姫116-8  姫136-5  姫141-3  姫129-3  姫116-1  姫141-2  姫129-5  姫129-5  姫115-5  姫141-1  姫119-3	 姫142-2  姫115-2  姫118-1  姫118-1  姫137-3  姫115-4  姫127-1  姫126-5
姫原西上層 (弥生終末)	 姫111-4  姫112-5  姫112-4  姫112-6	 姫111-8  姫111-3

農具類	雑具ほか	武具・祭祀具ほか
 <p>天X109-3 天X109-2 天X109-4</p>	 <p>天897-31</p>	
 <p>器146-3 器131-4 器132-1</p>	 <p>器146-1 器147-1 器131-2 器131-3</p>	 <p>器146-7</p>
 <p>器114-1 器114-2 器114-4 器114-5 器126-1 器126-2 器126-3 器123-1 器123-2 器135-9 器135-8 器135-3 器114-3 器124-1 器136-2 器136-4 器116-6 器130-4 器130-1 器148-1 器148-6</p>	 <p>器136-2 器139-2 器148-1 器136-4 器116-6 器130-4</p>	 <p>器146-7 器121-1 器1119 器148-3 器S-1/12 器114-6 器142-5 器143-2 器143-4 器143-1 器148-6</p>
 <p>器112-2 器111-1</p>	 <p>器112-1</p>	 <p>器1119</p>

※ 天VII-Xは文献(1)より、姫は文献(5)より転載。(番号は各報告書の挿図番号)

海上遺跡出土土器観察表

No	回収番号	調査区	Gr名	上層	器種	法量(単位:cm)			色調	胎土	形態・装飾の特徴	時期
						口徑	底径	器高				
1	8-1	1区	E5	4	鏡or鉢	(27)			黄褐色	2~6mm程度の砂・ 葉母を含む	外:ハケ、ミガキ 内:風化	松本Ⅰ-3前後
2	8-2	1区	B8	4	有蓋甕	9.8	6.1	12.3	褐色~黒色	2~6mm程度の砂・ 葉母を含む	外:風化著しい 内:ヘリ状工具痕	松本Ⅰ-3前後
3	8-3	1区	B7	4	甕	(13.3)			淡黄色~褐色	1~3mm程度の砂・ 葉母を含む	外:口縁ナデ、体部ハケ 内:ケズリ後ナデ	松本Ⅰ-3前後
4	9-1	1区	B9	3	甕				にぶい黄褐色	2cm以下の砂粒を 含む	口縁内外面凹線文	松本IV
5	9-2	1区	B9	3	甕				暗黄褐色	微砂粒を含む	口縁内外面凹線文	松本IV
6	9-3	1区	D7 D9	3	甕	(13)			黒褐色・黄褐色	微砂粒を含む	口縁外面・肩部凹線文 徳成灼痕片	松本IV
7	9-4	1区	B9	3	甕				褐灰色	微砂粒を含む	口縁外面・肩部凹線文	松本IV
8	9-5	1区	D6	3	甕	(20.3)			黒~褐色	微砂粒を含む 葉母・石英・長石	外:列点文、ハケ 内:ハケ	松本IV
9	9-6	1区	D6	3	甕	(12.2)			黄褐色	微砂粒を含む	外:列点文、ハケ 内:ハケ、ケズリ	松本IV
10	9-7	1区	B7	3	甕	(14.7)			黒~灰白色	微砂粒を含む 空母	外:すず多量に付着 内:ハケ	松本IV
11	9-8	1区	D9	3	甕	(16.2)			黒~暗褐色	微砂粒を含む	外:列点文、すず多量に付着 内:ケズリ	松本V-1
12	9-9	1区	D5	3	甕	(18.2)			黒~黒褐色	2mm以下の砂粒を 含む	外:ハケ内:ケズリ	松本V-1
13	9-10	1区	B8	3	甕				黒褐色	微砂粒を含む	外:ハケ内:ケズリ	松本V-1
14	9-11	1区	B8	3	甕	(23.4)			灰白~黒褐色	微砂粒を含む		松本IV~V-1
15	9-12	1区	D9	3	甕	(22.6)			黄褐色	微砂粒を含む		松本IV~V-1
16	9-13	1区	B9	3	甕	(22.4)			黄灰色	2mm以下の砂粒を 含む		松本IV~V-1
17	9-14	1区	C5	3	甕	13.2			黒褐色	微砂粒を含む	外:ハケ 内:ケズリ?	松本IV~V-1
18	9-15	1区	B9	3	甕	(16.4)			にぶい黄褐色	微砂粒を含む	内:ケズリ?	松本IV~V-1
19	9-16	1区	B8	3	甕	(15.2)			灰白色	微砂粒を含む		松本IV~V-1
20	9-17	1区	C9	3	甕	(12.6)			黒色	2mm以下の砂粒を 含む		松本IV~V-1

No.	同版番号	調査区	Gr名	土質	群 種	法量(単位:cm)			色 調	触 上	形態・顕微の特微	考 察
						口径	底径	高さ				
21	9-18	I区	B4	3	壺				淡黄褐色	微砂粒含む	内:ケズリ?	松本IV~V-1
22	9-19	I区	B8	3	壺				灰青色	微砂粒含む		松本IV~V-1
23	9-20	I区	H8	3	壺				暗黄褐色	微砂粒含む	外:ハケ 内:ナデ	松本IV
24	10-1	II区	B8	3	壺or甕				にぶい黄褐色	微砂粒含む	外:ハケ、刺突文 内:ハケ	松本IV
25	10-2	I区	D6	3	壺or甕				淡緑褐色	微砂粒含む	外:刺突文、斜行字文ほか 内:ハケ	松本IV
26	10-3	II区	B7	3	壺or甕	(7.0)			淡黄色	1~2mm程度の砂・ 茎屑含む	外:ミガキ 内:ハケ後ナデ、底部オサエ	松本III~IV
27	10-4	I区	B8	3	壺or甕	(7.8)			にぶい黄褐色	微砂粒含む	外:ミガキ 内:ケズリ後ミガキ	松本III~IV
28	10-5	II区	C9	3	壺or甕	(6.0)			黒褐色~にぶい黄褐色	微砂粒含む	外:ミガキ 内:ナデ	松本III~IV
29	10-6	I区	B9	3	壺or甕	(7.8)			黒褐色	微砂粒含む	内:ケズリ	松本III~V-1
30	10-7	II区	C9	3	壺or甕	(5.2)			灰黄褐色	2mm以下の砂粒含む	内:ケズリ	松本III~V-1
31	10-8	II区	B8	3	壺or甕	(5.9)			黒褐色	微砂粒含む	外:ハケ 内:ケズリ	松本III~V-1
32	10-9	I区	C9	3	壺or甕	(10.0)			黒褐色	2mm以下の砂粒含む	内:ナデ	松本IV?
33	10-10	I区	E6	3	壺or甕	(5.9)			灰黄褐色	2mm以下の砂粒含む	内外面ナデ	松本IV?
34	10-11	I区	A6	3	高杯	(14.6)			暗黄褐色	微砂粒含む	外:ミガキ、口縁端-外凹陥文 内:ミガキ	松本IV
35	10-12	I区	B5	3	高杯				暗褐色	微砂粒含む	内外面赤色塗彩	松本V-1
36	10-13	I区	B8	3	高杯				暗褐色	微砂粒含む	外:凹線、ナデ 内:脚ケズリ、杯ミガキ	松本IV
37	10-14	I区	B8	3	高杯				黒褐色	微砂粒含む	外:凹線、頸肩文内:ケズリ	松本IV
38	10-15	I区	R7	3	高杯				淡褐色	1mm大の砂粒多く含む	外:凹線、ナデ、杯ミガキ 内:脚ケズリ、杯ハケ後ナデ	松本IV
39	11-1	II区	C8	2	甕	(31.8)			にぶい黄褐色	3mm以下の砂粒多く含む	外:指環状溝帯、ハケ 内:ケズリ	松本V-1
40	11-2	I区	C7	2	甕	(24.8)			淡黄褐色	微砂粒含む	凹線文、黄沢文 内:ナデ、ケズリ	松本V-2
41	11-3	I区	B5	2	甕	(13)			淡黄褐色	微砂粒含む	外:指環状溝帯、刺突文 内:ケズリ	草田5層

No.	図面番号	調査区	Gr名	上層	形 態	法量(単位:cm)			色 調	土 質	形態・装飾の特徴	時 期
						口径	底径	器高				
42	11-4	1区	D9	2	高坏	(20.8)			灰黄色褐色	微砂粒含む	外:ケズリ蓮ナデ、ミガキ	松本V-1
43	11-5	1区	D7	2	高坏	(16)			灰黄褐色	微砂粒含む	内外面赤色塗彩痕	松本V-1
44	11-6	1区	B7	2	高坏		(10)		灰黄褐色	2cm以下の砂粒含む	外:ミガキ 内:ケズリ	松本V-1
45	11-7	1区	D9	2	高坏		(13)		灰黄色	微砂粒含む	外:ミガキ 内:ケズリ	松本V-1
46	11-8	1区	B7	2	高坏				灰黄褐色	微砂粒含む	外:ミガキ 内:ケズリ	松本V-1~2
47	11-9	1区	A7	2	甕				灰黄褐色	微砂粒含む	外:割突文 内:ケズリ	松本V-1
48	11-10	1区	C5	2	甕				暗黄褐色	微砂粒含む	外:指鋸仕痕帯 内:ハケ	松本Ⅲ~Ⅳ
49	11-11	1区	D10	1	壺	(18.6)			暗黄褐色	微砂粒含む	外:ハケ 内:ケズリ	松山Ⅲ末~Ⅳ
50	35-1	2区	B2	3	甕	(20.4)			淡黄褐色	微砂粒含む	内外面ハケ口縁部刻彫り文	松本Ⅲ
51	35-2	2区	C2	3	甕				淡黄褐色	微砂粒含む	外:ハケ、数条の突帯 内:ハケ、ナデ	松本Ⅲ
52	35-3	2区	B3	3	甕				灰黄色	微砂粒含む	外:ハケ、数条の突帯 内:ミガキ	松本Ⅲ
53	35-4	2区	A1	3	甕				暗黄褐色	微砂粒含む	外:指鋸仕痕帯、ハケ 内:ハケ、ナデ、オサエ	松本Ⅲ~Ⅳ
54	35-5	2区	C1	3	壺				灰白色	微砂粒含む 岩屑・石英・灰石	口縁部と内面に刺梅文	松本Ⅲ
55	35-6	2区	B2	3	甕				にぶい褐色	微砂粒含む	口縁部刻し文 外:ヘラ指鋸文	松本1-3
56	35-7	2区	B2	3	甕	(20.4)			にぶい黄褐色	1cm次の砂・重母石 を含む	外:ハケ 内:ナデ	松本Ⅲ
57	35-8	2区	B2	3	壺				灰黄褐色	微砂粒含む		松本Ⅲ
58	35-9	2区	B2	3	甕				灰黄褐色	微砂粒含む		松本Ⅲ
59	36-1	2区	AB1	3	甕	27	9.5	56	黄褐色	1~2mm程度の砂・ 重母石を含む	外:刻目、割突、ヘラ指鋸文ほか 内:ハケ後ケズリ、口縁部刻文	松本Ⅳ
60	36-2	2区	B2	3	甕		9.4		にぶい黄褐色	微砂粒含む砂・重 母石	外:タタキ後ハケ 内:ハケ、ケズリ	松本Ⅳ
61	37-1	2区	A3	3	壺		4.2		灰黄色	微砂粒含む 岩屑・石英・灰石	外:ミガキ、ヘラ指鋸文内、 ケズリ、ハケ、オサエ	松本Ⅳ
62	37-2	2区	A2	3	甕or高坏				にぶい黄褐色~ 黒褐色	2cm以下の砂粒含む	外:ミガキ、ヘラ指鋸文ほか 内:ハケ、ナデ	松本Ⅳ

No.	図版番号	調査区	Gr名	土層	形 態	流量(単位:cm)			色 澤	土 質	形態・断面の特徴	時 期
						1径	2径	3径				
63	37-3	2区	B2	3	塊	(19.5)			暗黄褐色	細砂粒含む	外:ハケ、ミガキ、羽点文 内:ケズリ後ナデ・オナエ	松本IV
64	37-4	2区	B4	3	塊	(15.8)			灰黄褐色	細砂粒含む	外:ハケ 内:ケズリ後ハケ・オナエ	松本IV
66	37-5	2区	A4	3	塊	(17)			暗黄褐色	2mm以下の砂粒含む	内:ハケ	松本IV
66	37-6	2区	B2	3	塊	(16.2)			黒褐色～灰黄褐色	細砂粒含む	外:ハケ 内:ケズリ後ナデ	松本IV
67	37-7	2区	B1	3	塊	(12)	(4.8)	(21)	暗黄褐色～暗赤褐色	細砂粒含む	外:ハケ、羽点文 内:ケズリ、底部ケズリ	松本V-1
68	37-8	2区	B2	3	塊	(10.8)			黄褐色	細砂粒含む	外:ナデ、ハケ 内:ケズリ	松本V-1
69	37-9	2区	H3	3	塊or葉		(7.2)		暗灰褐色	細砂粒含む	内:ケズリ	松本III～V-1
70	37-10	2区	B2	3	塊or葉		(6.4)		にぶい暗褐色	細砂粒含む	外:ハケ後ナデ	松本III～V-1
71	37-11	2区	A1	3	塊or葉				暗黄褐色	1～2mm程度の砂粒含む	外:ミガキ、ナデ 内:ナデ	松本III～V-1
72	37-12	2区	A1	3	高坪				にぶい黄褐色	3mm以下の砂粒含む	外:凹線、ケズリ後顔面付後ナデ	松本IV
73	37-13	2区	B1	3	高坪				灰褐色	2mm以下の砂粒含む	外:凹線、羽点文内:ナデ	松本IV
74	37-14	2区	A2	3	不明				灰白色	2mm以下の砂粒・重母・石英・長石	外:底部に格子状の痕跡	松本IV?
75	38-1	2区	B4	2	塊	(24)			黒褐色	細砂粒含む	外:ハケ、汗痕文帯内:ハケ	松本IV
76	38-2	2区	A4	2	塊				にぶい黄褐色	2mm以下の砂粒・重母・石英・長石	外:ハケメ、羽点文 内:ミガキ、ハケ	松本IV
77	38-3	2区	B3	2	変				灰白色	細砂粒含む重母・石英・長石	凹線部・内面に凹線	松本IV
78	38-4	2区	B2	2	塊				にぶい黄褐色	4mm以下の砂粒・重母・石英・長石	外:真鍮羽状文、点線文	松本V
79	38-5	2区	A2	2	塊				赤褐色	細砂粒含む	外:ミガキ、羽点文、赤色点線 内:ケズリ	松本V
80	38-6	2区	B3	2	割部		(6.8)		にぶい黄褐色	2mm程度の砂粒含む	内面・底部にケズリ	
81	39-1	2区	A3	1	土層露出	14.7			灰白色	3mm以下の砂粒・重母・石英・長石	外:ハケ 内:ケズリ	古墳時代中期～後期
82	39-2	2区	C3	1	土層露出	(7.9)		7.1	黄褐色	細砂粒含む	外:ハケ 内:ハケ	松山前期
83	39-3	2区	C3	1	土層露出				にぶい黄褐色	2mm以下の砂粒・重母・石英・長石		古墳時代中期～後期

海上遺跡出土木製品観察表

No	図版番号	調査区	Gr名	土層	種 類		保存方法	備 考	備 考
					大 別	細 別			
1	2-1	試掘		有機物層	農具	田下駄	処理	スギ科スギ属スギ	
2	2-2	試掘		有機物層	器材	有孔板材	バック		
3	2-3	試掘		有機物層	その他	尖頭形棒材	バック		
4	7	1区	D7	3	杖等	杖	バック		杖列1
5	13-1	1区	D6	3	漁網具	田舎	処理	スギ科スギ属スギ	腐蝕あり
6	13-2	1区	B4	3	舟楫	楫	処理	スギ科スギ属スギ	
7	14-1	1区	C0	3	舟楫	楫尾	処理	ニレ科ニレ属	
8	14-2	1区	B8	3	舟楫	コップ形木製品	処理	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	
9	14-3	1区	B5	3	舟楫	楫	処理	スギ科スギ属スギ	
10	14-4	1区	C5	3	舟楫	舟形舟楫	処理	ニレ科エノキ属	塗りあり
11	14-5	1区	D5	3	舟楫	舟楫芯	処理	スギ科スギ属スギ	
12	15-1	1区	B5	3	舟楫	筒形舟楫	処理	スギ科スギ属スギ	
13	15-2	1区	E7	3	食卓具	楯杓子柄	処理	ブナ科シイ属	塗りあり
14	15-3	1区	E7	3	食卓具	楯杓子柄	処理	ブナ科シイ属	深塗り、13と同一個体
15	15-4	1区	B5	2	食卓具?	柄	バック		
16	15-5	1区	B4	3	食卓具	楯杓子	処理	ツバキ科サカキ属サカキ	塗りあり
17	15-6	1区	D6	3	舟楫	楫	処理	スギ科スギ属スギ	
18	15-7	1区	D7	2	食卓具	杓子形木製品	処理	スギ科スギ属スギ	
19	16-1	1区	D6	3	農具	新製機	処理	ブナ科コナラ属アカガシ類	
20	16-2	1区	C5	3	農具	曲柄機	処理	ブナ科コナラ属アカガシ類	又根orスス入り中張
21	16-3	1区	C5	3	農具	曲柄又機	処理	ブナ科コナラ属アカガシ類	
22	16-4	1区	B5	3	農具	曲柄平機	処理		
23	16-5	1区	C6	3	農具	田下駄	処理	スギ科スギ属スギ	
24	16-6	1区	B4	3	農具	田下駄	処理	スギ科スギ属スギ	
25	16-7	1区	D6	2	農具	田下駄	処理	スギ科スギ属スギ	
26	17-1	1区	B4	3	農具	楯杓	処理		
27	17-2	1区	D6	2	農具	杓	処理	ツバキ科ツバキ属	
28	17-3	1区	D6	3	農具?	楯杓?	処理	ブナ科シイ属	杓子形木製品?
29	17-4	1区	C5	3	農具?	ヤス?	処理	スギ科スギ属スギ	
30	18-1	1区	C8	3	武器	楯	処理	マツ科モミ属	赤色塗彩
31	18-2	1区	B8	3	武器	楯	処理	マツ科モミ属	
32	18-3	1区	C8	3	武器?	火打棒?	バック		
33	18-4	1区	D4	3	武器?	火打棒?	処理	ヒノキ科ヒノキ属	
34	18-5	1区	D7	3	武器?	火打棒?	処理	スギ科スギ属スギ	
35	18-6	1区	B8	3	武器?	楯杓?	処理	ヒノキ科ヒノキ属	
36	18-7	1区	B8	3	その他	柄	処理	ツバキ科サカキ属サカキ	
37	18-8	1区	D7	3	その他	柄	バック		
38	18-9	1区	B4	3	雑具ほか	葉形留具	処理	スギ科スギ属スギ	

No.	図面番号	調査区	Gr名	土層	試 験		保存方法	樹 種	備 考
					大 形	細 別			
39	18-1	1区	B5	3	雑草ほか	顕微鏡器具	乾燥	ヒノキ科アスナロ属	
40	18-1	1区	H4	3	雑草ほか	顕微鏡器具	乾燥	スギ科スギ属スギ	
41	18-1	1区	D5	3	雑草ほか	発火具	乾燥	スギ科スギ属スギ	火燐白・一部炭化
42	19-1	1区	B8	3	雑草ほか	部材等	乾燥	スギ科スギ属スギ	建築部材?
43	19-2	1区	B8	3	雑草ほか	部材等	バック		42の草部分に類似
44	19-3	1区	B4	3	雑草ほか	部材等	バック		
45	19-4	1区	D6	3	雑草ほか	部材等	バック		
46	19-5	1区	D6	3	雑草ほか	部材等	バック		
47	19-6	1区	D6	3	雑草ほか	部材等	バック		
48	19-7	1区	D6	3	雑草ほか	部材等	バック		
49	19-8	1区	H4	3	雑草ほか	部材等	バック		
50	19-9	1区	B4	3	雑草ほか	部材等	バック		
51	19-1	1区	B4	3	雑草ほか	部材等	バック		
52	20-1	1区	D5	3	雑草ほか	部材等	乾燥	ツバキ科ツバキ属	
53	20-2	1区	C6	3	雑草ほか	部材等	バック		
54	20-3	1区	C8	3	雑草ほか	部材等	バック		
55	20-4	1区	D6	3	雑草ほか	部材等	バック		
56	20-5	1区	B8	3	雑草ほか	部材等	バック		
57	20-6	1区	D8	3	雑草ほか	部材等	バック		
58	20-7	1区	C5	3	雑草ほか	部材等	バック		
59	20-8	1区	B4	3	雑草ほか	部材等	バック		
60	21-1	1区	C4	3	雑草ほか	部材等	バック		建築部材?一部炭化
61	21-2	1区	A5	2	その他	加工材残片	バック		
62	21-3	1区	B4	3	その他	加工材残片	バック		
63	21-4	1区	D9	3	その他	加工材残片	バック		
64	22-1	1区	D7	3	雑草ほか	部材等	乾燥	スギ科スギ属スギ	
65	22-2	1区	D5	3	雑草ほか	部材等	乾燥	スギ科スギ属スギ	
66	22-3	1区	D7	3	雑草ほか	部材等	バック		
67	22-4	1区	D6	3	雑草ほか	部材等	バック		
68	22-5	1区	C4	3	雑草ほか	部材等	バック		
69	22-6	1区	C4	3	雑草ほか	部材等	バック		
70	23-1	1区	B4	2	雑草ほか	部材等	乾燥	スギ科スギ属スギ	
71	23-2	1区	B4	3	雑草ほか	部材等	乾燥	スギ科スギ属スギ	
72	23-3	1区	C9	3	その他	燃えさし?	バック		
73	23-4	1区	D5	3	その他		バック		
74	23-5	1区	D6	3	その他	燃えさし?	バック		一部炭化
75	23-6	1区	C5	3	その他		乾燥	スギ科スギ属スギ	
76	24-1	1区	C8	3	雑草ほか	部材等	バック		
77	24-2	1区	H7	3	雑草ほか	部材等	バック		
78	24-3	1区	B4	3	雑草ほか	部材等	バック		

No	同版番号	調査区	Gr名	土層	植 栽		保存方法	材 種	備 考
					大 別	細 目			
79	24-4	1区	B4	3	雑草ほか	部材等	バック		
80	25-1	1区	D5	3	雑草ほか	部材等	バック		
81	25-2	1区	H4	3	雑草ほか	部材等	バック		
82	25-3	1区	B7	3	雑草ほか	部材等	バック		
83	25-4	1区	D7	3	雑草ほか	部材等	バック		
84	26-1	1区	D6	3	建築部材		バック		
85	26-2	1区	C6	3	建築部材		処理	スギ材スギ材スギ	
86	26-3	1区	C6	3	建築部材	柱等?	処理	ツバキ科サカキ属サカキ	
87	26-4	1区	C5	3	建築部材	柱材	処理	ブナ科シロノキ属	
88	27-1	1区	E6	2	建築部材	ほぞ差材	処理	スギ材スギ属スギ	
89	27-2	1区	B8	3	建築部材		処理	スギ材スギ属スギ	
90	27-3	1区	C5	3	建築部材		処理	スギ材スギ属スギ	
91	27-4	1区	C8	3	建築部材	製紙板	処理	スギ材スギ属スギ	
92	28-1	1区	H3	3	用途不明		処理	ニレ科エノキ属	製紙板
93	28-2	1区	C5	3	用途不明		バック		
94	28-3	1区	B8	3	用途不明		処理	ヒノキ科ヒノキ属	
95	28-4	1区	B9	3	用途不明		バック		2つ折りで出土
96	28-5	1区		3	用途不明		処理	スギ材スギ属スギ	
97	28-6	1区	H4	3	用途不明		処理		地形
98	29-1	1区	B7	3	杭等	杭	バック		
99	29-2	1区	B8	3	杭等	矢筈	バック		
100	29-3	1区	D4	3	杭等	杭	バック		一部炭化
101	29-4	1区	C9	3	杭等	杭	バック		部材板用杭
102	29-5	1区	D4	3	杭等	杭	バック		
103	29-6	1区	C5	3	杭等	矢筈	バック		
104	29-7	1区	C5	3	杭等	杭	バック		板炭化
105	29-8	1区	D9	3	杭等	杭?	バック		
106	29-9	1区	D4	3	杭等	杭?	バック		一部炭化
107	29-1	1区	H5	3	杭等	杭?	バック		
108	32-8	2区	A2	2	杭等	角材杭	バック		2層杭群
109	32-1	2区	A3	2	杭等	矢筈	バック		2層杭群
110	32-1	2区	A2	2	杭等	杭	バック		2層杭群
111	32-1	2区	A2	2	杭等	杭	バック		2層杭群
112	32-2	2区	A3	2	杭等	杭	バック		2層杭群
113	32-1	2区	A3	2	杭等	杭	バック		2層杭群
114	32-9	2区	A2	2	杭等	杭	バック		2層杭群
115	32-3	2区	B2	2	杭等	杭	バック		2層杭群
116	32-5	2区	A2	2	杭等	杭	バック		2層杭群
117	32-1	2区	B2	2	杭等	杭	バック		2層杭群
118	34-1	2区	A1	3	杭等	杭	バック		杭角2

№	図版番号	調査区	Gr名	土層	種 類		保存方法	樹 種	備 考
					大 別	細 別			
119	34-2	2区	A1	3	枕等	枕	バック		枕列2
120	34-4	2区	A1	3	枕等	枕	バック		枕列2
121	34-5	2区	A1	3	枕等	枕	バック		枕列2
122	34-7	2区	A1	3	枕等	枕	バック		枕列2
123	34-8	2区	A1	3	枕等	枕	バック		枕列2
124	41-1	2区	B1	3	容器	餅付合子	処理	クワ科クワ属	赤色塗彩、輪郭線あり
125	41-2	2区	A1	3	容器		処理	スギ科スギ属スギ	焼状
126	41-3	2区	B2	3	容器		処理	トネノキ科トネノキ属トネノキ	筒状
127	41-4	2区	A1	3	容器?	餅付合子?	処理	クスノキ科クスノキ属クスノキ	アガ取り?輪郭線あり
128	41-5	2区	A2	2-3	食器具	櫛杓子	処理	クワ科クワ属	赤色塗彩
129	41-6	2区	B1	3	食器具	匙	処理	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	塗りあり
130	41-7	2区	A1	3	容器	圓形容器	処理	ヒノキ科アスカロ属	
131	41-8	2区	B1	3	容器	コップ形木製鉢	処理	クワ科クワ属	
132	41-9	2区	C3	3	容器	組合せ箱	処理	イチイ科カヤ属カヤ	木釘あり、瓢川へう?
133	42-1	2区	A1	3	農具	曲柄平鍬	処理	ブナ科コナラ属アウダシ環切	
134	42-2	2区	A1	3	工具	狭状鉄斧柄	処理	ワキ科サカキ属サカキ	
135	42-3	2区	C3	2	その他	櫛形木製鉢	処理		
136	42-4	2区	B1	3	運搬具?	火付棒?	処理	スギ科スギ属スギ	
137	42-5	2区	A3	2	運搬具?	火付棒?	バック		
138	42-6	2区	A1	3	運搬具	火付棒	処理	エゴノキ科エゴノキ属	
139	43-1	2区	A2	2	雑具ほか	部材等	処理	スギ科スギ属スギ	組合せ板材
140	43-2	2区	A1	3	雑具ほか	部材等	バック		組合せ板材
141	43-3	2区	A3	3	雑具ほか	部材等	処理		
142	43-4	2区	A1	3	雑具ほか	部材等	バック		
143	43-5	2区	B2	3	雑具ほか	部材等	バック		
144	43-6	2区	A3	2	雑具ほか	部材等	バック		
145	44-1	2区	C3	3	雑具ほか	部材等	バック		
146	44-2	2区	A2	3	雑具ほか	部材等	バック		
147	44-3	2区	B1	3	雑具ほか	部材等	バック		
148	44-4	2区	C4	3	雑具ほか	部材等	バック		
149	44-5	2区	A1	3	雑具ほか	部材等	バック		
150	44-6	2区	C3	2	雑具ほか	部材等	バック		
151	44-7	2区	A1	3	雑具ほか	部材等	バック		
152	45-1	2区	C2	3	雑具ほか	部材等	バック		
153	45-2	2区	D3	2	雑具ほか	部材等	バック		
154	45-3	2区	A3	3	雑具ほか	部材等	バック		
155	45-4	2区	A3	3	雑具ほか	部材等	バック		
156	45-5	2区	A3	3	雑具ほか	部材等	バック		
157	46-1	2区	B3	2	雑具ほか	部材等	バック		
158	46-2	2区	A1	3	雑具ほか	部材等	バック		

図

版

完掘状況(東より)



土層堆積状況
南岸遺物出土状況(東より)



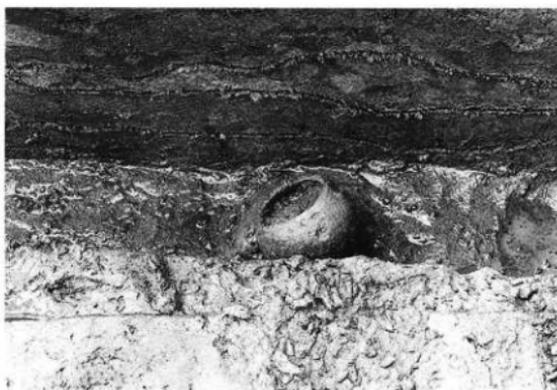
北岸遺物出土状況(東より)



1区遺構



杭列1 検出状況(北より)



4層土器出土状況(8-2)



4層土器出土状況(8-3)

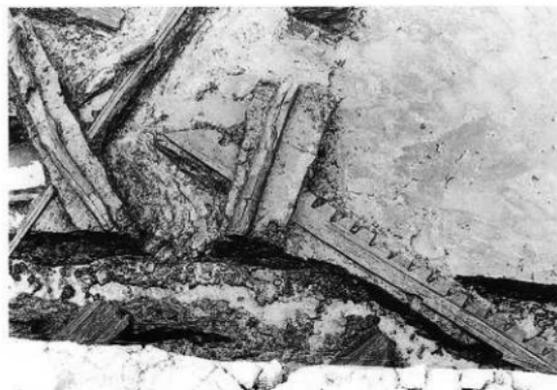
3層木製品出土状況(14-4)



3層木製品出土状況(16-1)



3層木製品出土状況(27-4)



2区遺構



完掘状況 土層堆積状況
(北西より)



土層堆積状況(北西より)



遺物出土状況(東より)

2層杭群北西側検出状況
(北東より)



2層杭群南東側検出状況
(東より)



杭列2検出状況(南東より)



2区遺構



3層土器出土状況(36-1)



3層木製品出土状況(41-1)



3層木製品出土状況(41-7)

3層木製品出土状況(42-2)



3層木製品出土状況
(50-6ほか)



2層木製品出土状況
(48-1ほか)



1区出土土器



8-1



8-3



8-2

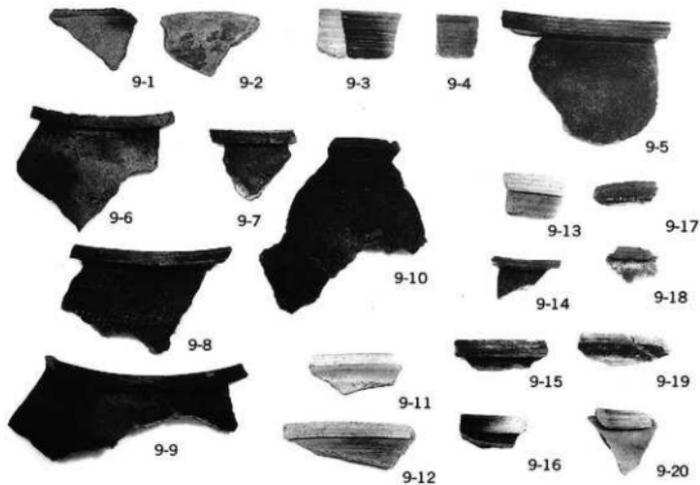
1区 4層出土土器



10-3



10-4



9-1

9-2

9-3

9-4

9-5

9-6

9-7

9-10

9-13

9-17

9-14

9-18

9-8

9-11

9-15

9-19

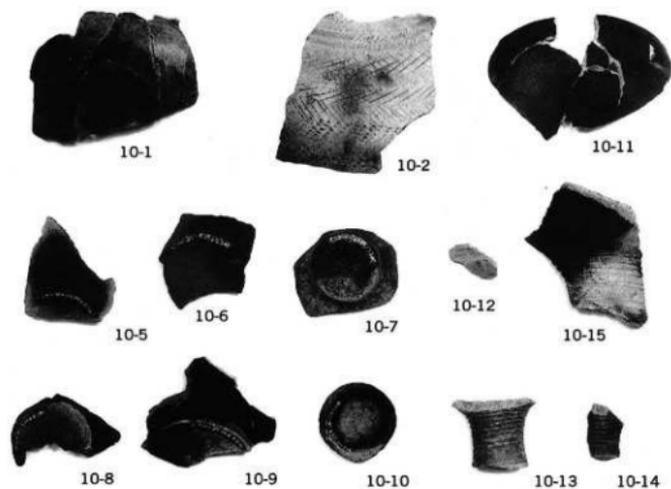
9-9

9-12

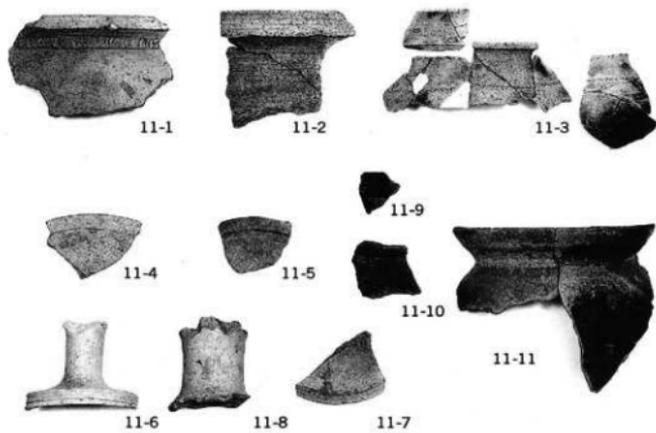
9-16

9-20

1区 3層出土土器-1

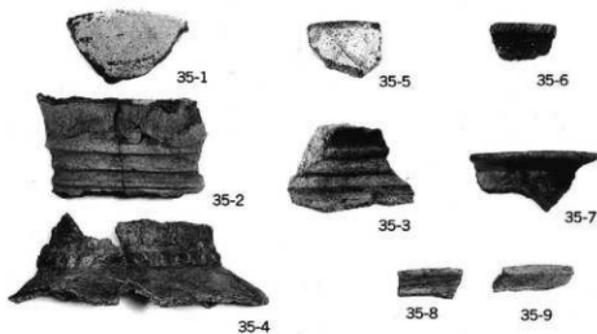


1区 3層出土土器-2



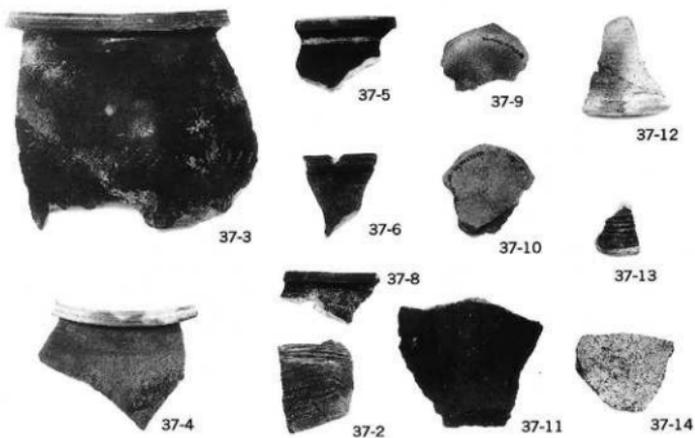
1区 1~2層出土土器

2区出土土器



2区 3層出土土器-1

2区出土土器



2区 3層出土土器-2



2区 1~2層出土土器

1区出土木製品



2-1



2-2



2-3

試掘出土木製品



7

1区 杭列1 杭材



13-1



13-1



13-2



13-2



14-4



14-1



14-3



14-4



14-5

1区 出土木製品-1

1区出土木製品



14-2



15-5



15-4



15-2



15-3



15-2



15-3



15-1



15-1



15-9



15-7



16-1



16-2



16-3



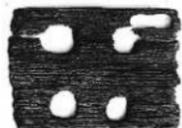
16-4



16-5



16-6



16-7

1区 出土木製品-2



17-1



18-1

18-1

18-2



17-2



17-3



17-4



18-6



18-7



18-9



18-10



18-11



18-12



18-3



18-4



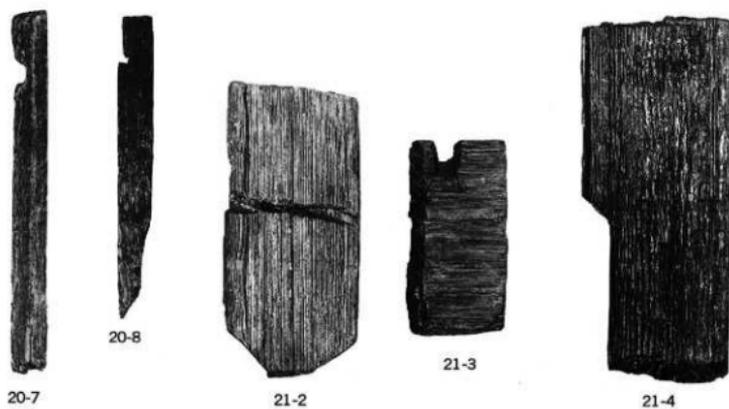
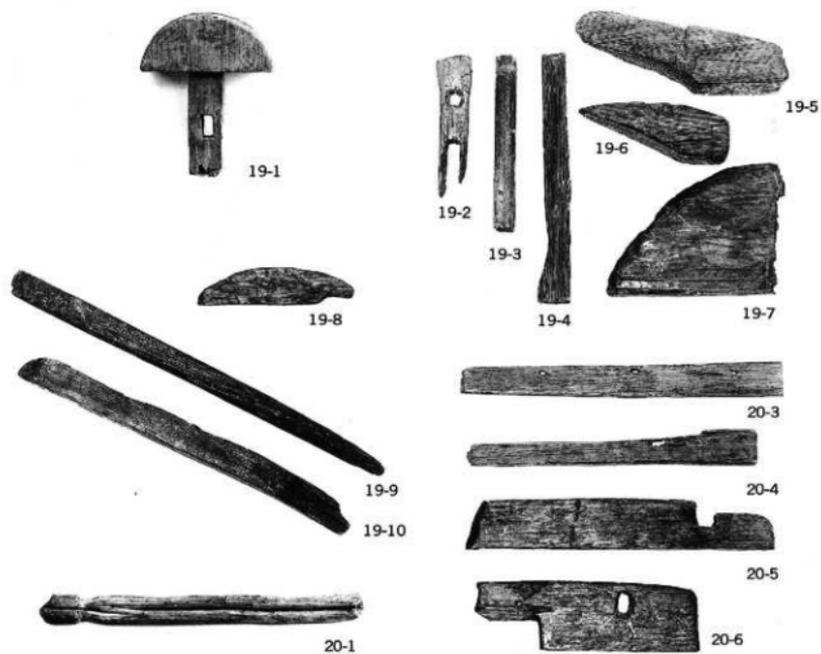
18-8



18-5

1区 出土木製品-3

1区出土木製品



1区 出土木製品-4